

季刊『ふくおかアジア』

第2号



天橋立(京都府宮津市)



大風呂南1号墳出土のガラス釦(腕輪)
(京都府与謝野町)

季刊「ふくおかアジア」第2号【令和6年(2024)12月】

編集 季刊『ふくおかアジア』編纂委員会

発行 ふくおかアジア文化塾

季刊『ふくおかアジア』第2号 目次(2024年12月)

	タイトル・テーマ	執筆者	ページ
0	河村哲夫の『日本古代通史』第1巻～第4巻発売中	広告	2
1	ちよいワルオヤジの古代史エッセー 第10回「古代史を楽しんで」—センチメンタルジャーニー	大和川一路	7
2	マツコのひとり言 第2回	マツコ	16
3	風の吹く丘 第2回 To be or not to be	H・IMAGINE	21
4	古代史マニアのひまつぶし 第2回 早良王国を踏査する	徳永隆司	25
5	吉備の古代史シリーズ 第16回 吉備と出雲 <下> 墳丘墓から見る「古墳起源に関わる楯築と四隅」	石合六郎	36
6	日本古代通史(第5巻) 続・邪馬台国の時代 4 論文一挙掲載! 第35回 出雲の銅剣・銅矛・銅戈 第36回 出雲の古代文化 第37回 ニギハヤヒと丹波 第38回 天日槍と但馬	河村哲夫	53 79 105 135

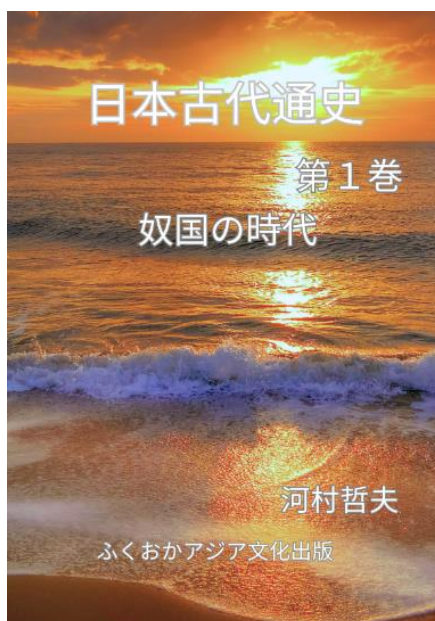
(前回) 季刊『ふくおかアジア』創刊号目次(2024年9月)

1	季刊「ふくおかアジア」の創刊にあたって	河村哲夫
2	ちよいワルオヤジの古代史エッセー 第九回「古代史を楽しんで」—魔界へようこそ	大和川一路
3	マツコのひとり言 第1回河村先生との出会い	マツコ
4	新連載 風の吹く丘 第1回バブルのおもいで	H・IMAGINE
5	『魏志倭人伝』を読み解く 第一章私の「邪馬台国」試論	愛川順一
6	マニアックなひまつぶし 第1回 古代朱のベンガラを作る鉄バクテリア	徳永隆司
7	吉備の古代史シリーズ 第14回 吉備と出雲(上)銅鐸文化「大国主の祭祀受け入れる」	石合六郎
8	日本古代通史(第5巻) 続・邪馬台国の時代 第32回 出雲の国譲り① 第33回 出雲の国譲り② 第34回 出雲の銅鐸③	河村 哲夫

河村哲夫の『日本古代通史』

第1巻～第4巻

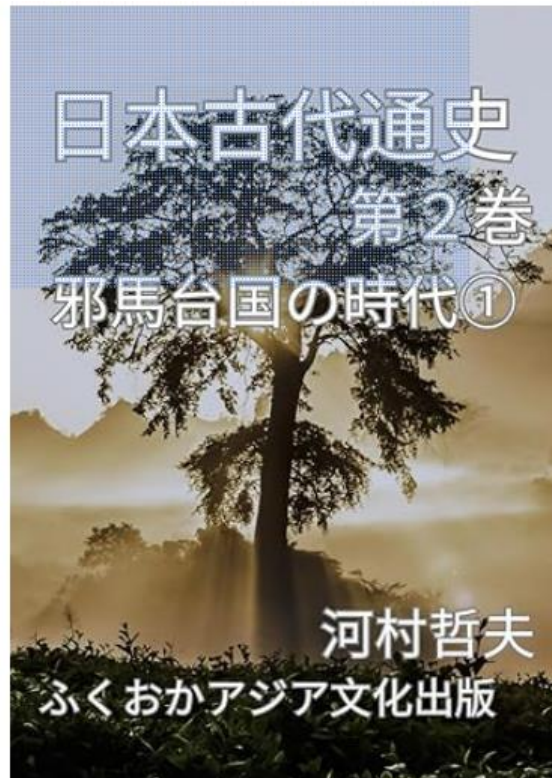
・ご購入は、Amazon(アマゾン)の通販サイトから直接お願いします。書店では、お取り扱いいたしておりません。



『日本古代通史』第1巻 奴国の時代
河村哲夫
¥2,750(消費税含)

『後漢書』『三国遺事』『日本書紀』など中国・朝鮮・日本文献を総合的に活用しつつ、考古学的な成果などを織り交ぜながら、奴国の実像に迫る渾身の古代ドキュメント——ライフワークを飾るその第1巻

第1巻目次
【I】卑弥呼の鏡
【II】天照大神の鏡
【I】邪馬台国前史としての奴国
【II】高天原の神々
朝鮮半島南部の倭人の痕跡
北部九州のクニグニ
奴国の神々



『日本古代通史』第2巻 邪馬台国の時代①

河村哲夫

¥2,750(消費税含)

『魏志倭人伝』と『古事記』『日本書紀』など日中の文献を総合的に分析しつつ、当時の東アジア情勢のなかでの邪馬台国と「卑弥呼＝天照大神」の外交手腕について具体的に述べる。また、帯方郡から邪馬台国へ至るクニグニの状況を明らかにする。

第2巻 目次
卑弥呼の登場
卑弥呼の外交①
卑弥呼の外交②
【邪馬台国への道】
三韓諸国
対馬と壱岐
末盧国と西海の島々
末盧国から伊都国へ
伊都国から奴国へ



『日本古代通史』第3巻 邪馬台国の時代②

河村哲夫

¥2,750(消費税含)

筑紫平野における邪馬台国最後の道をたどり、卑弥呼の死と天照大神の天の岩戸および247年の日食との関係を明らかにし、投馬国と狗奴国の所在地を明示する。そして、新たな女王台与が登場する。

第3巻 目次
夜須をゆく
朝倉をゆく
日田をゆく
投馬国は豊の国
狗奴国は肥の国
狗奴国と卑弥呼の死
卑弥呼と台与



『日本古代通史』第4巻 続・邪馬台国の時代①

河村哲夫

¥2,750(消費税含)

卑弥呼の死後、邪馬台国は筑紫平野から英彦山を越えて、京都平野や彦山川・遠賀川流域方面へと勢力を拡大させていく。その一方で、高天原を追放されたスサノオは息子の五十猛らとともに出雲に向かう。『魏志倭人伝』・『古事記』・『日本書紀』・『風土記』などの徹底的な読み込みはもとより、考古学的成果や地域伝承などを踏まえた驚愕の古代ドキュメント

第4巻 目次
英彦山と京都平野
神夏磯媛と豊比売命
英彦山と宗像
ニギハヤヒ
スサノオと五十猛命
出雲の神々
スサノオとクシナダヒメ

【今後の発刊予定】

○『日本古代通史』 第5巻 「続・邪馬台国の時代②」

【令和7年(2025)1月発売予定 アマゾン kindle 版】

第5巻 目次	掲載号
隠岐の島	季刊古代史ネット 第15号(2024年6月)
大国主命	
大国主命の国づくり	
出雲の国譲り①	季刊「ふくおかアジア」創刊号(2024年9月)
出雲の国譲り②	
出雲の銅鐸	
出雲の銅剣・銅矛・銅戈	季刊「ふくおかアジア」第2号(2024年12月)
出雲の古代文化	
ニギハヤヒと丹波	
天日槍と但馬	

【令和7年(2025)11月アマゾン kindle 版にて発売予定】

○『日本古代通史』 第6巻 日向王朝の時代①

ちよいワルオヤジの古代史エッセー 第 10 回「古代史を楽しんで」—センチメンタルジャーニー

大和川 一路

1. 阿蘇と九重
2. 金海と慶州
3. 万葉集と現代歌

1. 阿蘇と九重

『二十歳の私』と題する企画で社内報に載せたことがあった。会社勤めも終る頃のこと。

ふっと読み直したら、余りの拙文に呆れた。当時の空気は、『何でも見てやろう』。

時は流れて、もうみんな 72 歳。親友のオガワ君は信州大学に入った。松本の下宿に遊びに行つては麻雀をやり、帰省するとパチンコに連れまわされて、「天の四本釘やチューリップの釘をよく見てやりなさいよ。俺、釘師になりたいなあ」とまで言っていた。

夏休みにオガワ君と二人で、山陰本線に乗って日本海を眺めながら、初めて九州に行った。唐津でみどり牛乳を飲んだ頃から腹が痛み出し、木賃宿でさらに痛くなり、夜通し激痛に襲われて、山陽本線で名古屋にとんぼ返りした。30 時間も看病してくれて、オガワ君は何しに九州に行ったのか。

40 年経って、社内報に改めて感謝の言葉を書いた。急性盲腸炎だった。もし腸が破れていたらどうなっていたことか、ある意味命の恩人。

不完全燃焼で九州への想いやみがたく、5年後に一人でグラバー邸、雲仙・島原、それから三角という港に渡り、阿蘇の内牧温泉に泊まったような。どうやって名古屋まで帰ったのか、写真もメモも残っていない。以降、九州にとんと縁はなくなった。

時は流れて、まさか仕事で熊本に 48 回も出張することになるとは思わなかった。

当時、九州はシリコンアイランド。それから自動車の一大生産拠点となっていた。部品の調達先は東アジアにまで及び、さらにタイや中国へと2次メーカーまで海外進出に拍車がかかった。そして今、TSMC が熊本に進出。半導体日本が復活するだろう。

ほとんど遊べない熊本出張だった。空港と会社とホテルを往復しただけで、馬刺しのフルコースを一回食べて、スイカとメロン農家が頭に残っているだけである。

福岡に移住してから、TSMC の巨大工場を見たいと思っていた。30 年前に熊本の自動車部品製造の子会社が半導体製造装置の仕事を受注して、少しだけ業界の事情が分かったから。センチメンタルジャーニーなのだけれども、工場がどれだけ変貌しているのか見たかった。一緒に働いた仲間は山鹿、和水、菊池、七城、合志、玉名辺りからの通勤で、もうみんな退職しているが、どんな

町に住んでいたのか少し知りたかった。

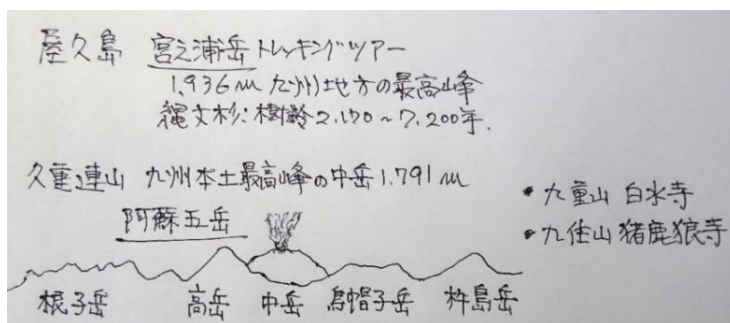
そして、装飾古墳が多い地域と知ったのは、つい最近のことである。

『阿蘇くじゅう国立公園』というけれど、“くじゅう”って何、聞いたこともなかった。春日市の友人が、「屋久島に行く前に、練習で九重に行ってくる」と云っていた。

屋久杉を見に行くのに、九重で何の練習がいる？こんな不思議な話も聞いたことがある。

「ネコは時々居なくなるが、根子岳に集まって会議をする。帰ってくると耳が少し折れている」昔の人がよくこんな話を子供にしていたらしい。

今月は熊本へ行くから、『旅のヒント』私の楽しみノートに調べて記しておいた。



それで分かった。屋久島の宮之浦岳に登るから、九重連山で登山の練習をしてくると言う事か。

阿蘇五岳の順番も覚えた。知ったかぶりして歴史講座の先生に「九州で一番高い山を

知ってますか？」とバカな質問をしたら、「九州で？ 筑前、筑後、肥前、肥後、豊前、豊後、日向、大隅、薩摩で九つ。う～ん？」

知らない訳なからうに。そうか、九州地方と云わねばならなかったのだ。

猪鹿狼寺(いからじ)なんて凄い名前の寺があるが、昔の人は獣の名前を付けたと歴史講座の先生から聞いていたが、八岐大蛇も越の国から来た人と考えるとスッキリする。

高速をおりて阿蘇を目指して走っていると、左側に巨大な白い建物が見えた。ならばこの辺りは菊陽町なのか。東京エレクトロンかソニーセミコンかもしれない。

TSMC が第三工場までつくったら、台湾やそこらじゅうからさらに人が集まって、この一帯は異国風情のシティに変わるかも。

阿蘇神社を見物してから、どこかの車止めで根子岳をバッチリ写真に収めることができました。



頂上のギザギザに雲がかかって稜線がクッキリ見える。何故かヒョッコリ『檜山節考』が出てきたが、でも猫捨て山には見えないけれど。

日本アルプスと違って九州の山々は感傷をやさしく包んでくれる。「良いことも悪いことも人生いろいろあった。カヨちゃんは元気で暮らしているのかなあ。ティパポーンさんはあれからどうしているのかなあ。劉さんはまだカナダにいるのかなあ」

「私、根子岳三回登ったわよ！」と黄色い声に振り向けば、年恰好は同じでも『男たちの旅路』と

は様相が違う女子の集団がいた。男子の孤独好きが分かるかなあ。

ついに来ました、見ました、チブサン古墳。山鹿市にある 44m の前方後円墳。



円筒埴輪や石人が出土する異色な古墳。解説を聞かなくても女性の乳房とわかります。小学生はカラスに見える、私には成田祐輔さんの丸四角メガネのようにも見えました。

装飾古墳館の解説シートには、江戸時代には母乳の出が良くなるように甘酒をお供えした。…壁の王冠を被った人

物は、この古墳の主と考えられています。朝鮮半島南部の王冠とも共通する形で両地域の交流がうかがえます。と書かれていた。

もう少し学術的であって欲しいですね。例えば、文化の伝播と受容と変遷みたいな事が書いてあったら嬉しいな、と古代史おじさんは思った次第。

福岡での最初の違和感は地名でした。「松浦・高良・始良・香春・太良・多田羅・多良の“ら”とは何でしょうか？」と初稿に書いたが、半島の百済、新羅、加羅や耽羅などみんな“ら”で終わり、北部九州一帯まで“ら文化圏”と教わって違和感はなくなりました。

一方、熊本・山鹿・和水・菊池・七城・合志・玉名・菊陽・阿蘇などは、中国の上海・蘇州・鎮江・南通・合肥などの漢字と同じ匂いがして、北部九州とは違う文化圏なのだと思っていた。だから、解説文の半島南部と山鹿一帯の交流がうかがえます。に、そうなのかなあ？ 上海デルタの方じゃないかなあと根拠なく考えていた。



根拠はなくとも、経緯は覚えている。岡山の造山古墳の見物に行った時、舟形石棺を覗いていると、郷土の古代史オジサンが寄って来て「呉越同舟の呉ね。くれグループが造った石棺で、阿蘇の溶結凝灰岩。九州地域の石棺の特徴を持っていてね、赤の石は阿蘇の方でしか採れないんだよ」この時から、肥と呉が繋がっていたように思うのです。これが阿蘇のピンク石を知ることになった

10 年前の小さな出来事。阿蘇のどこかで切り出しているのかと思っていたが、宇土市の馬門が産地という。大爆発で火砕流が山に当たって吹き上がり、大量の酸素が供給されて発色した。ベンガラ生成と原理は同じそうだが、鉄バクテリアが作った Fe_2O_3 の利用が多いそうだ。もうこの領域はお手上げである。

むかしブルーボックスで $E=mc^2$ が、なんとなく中学生でも分かったように、文系おじさんに猫でも

分る『古代朱の起源と倭の王墓』を書いてもらえたら、読んでみたい。

2. 金海と慶州

よく韓国に行くので、「韓国が好きなの？」と何回も聞かれるが、好きとか嫌いとかではなくて、興味があってもっと知りたいだけなのです。今度行くなら慶州桜の頃と歴史講座の友達と話していたが、これからの遠い約束はダメ。だから10月初旬に遠征することにした。

釜山からは近場の金海と慶州、金官伽耶や新羅の地は初めての方ばかり。「せめて半島の地理や歴史の勉強をしてちょうだいね」と念押しした。

「天馬塚古墳群」「屋台」「良洞民俗村」「カジノ体験」「倭館」「朝鮮通信使」「マッコリ」——みんな色々言ってくれるけど、動線揃えや時間配分、食事場所に会計業務とスムーズな流れは段取り八割、段取りマンは大変なのである。このメンバー、きっと珍道中になると思っていたが、やはり輪をかけたような珍道中になった。

HISで「10月3日は韓国の祝日でお店がやってない。開天節ですよ」と聞かされて、それで古都慶州はなんとなく4日の金曜日に入れ替えた。

『開天節』これ檀君神話に基づく古朝鮮建国の祝日。BC2,333年の建国とはまた古い。まずは3日の祝日は、金海博物館と亀旨峰のハイキングだけで高齢者には十分だろう。

十数年前に、初めての韓半島古代史旅行で訪れたのは亀旨峰で、懐かしい。

飛鳥川師匠は「くじぼん、くじぼん」と云っていた。だから私もくじぼんと云っていた。

韓国語を知らないまでも、みんなに「クジボンって何？」と聞いて欲しかった。



「天神の御子は、筑紫の日向の高千穂のくしふる峯においでになるでしょう。書紀の天鈿女と猿田彦の会話です。これとよく似て、六つの金の卵が降って来て、首露が生まれて金官伽耶の王となり、あとの五個も孵って伽耶諸国の王となりました。ここが駕洛国、金官伽耶の地ですよ。その後、高霊の大伽耶に中心が移っていったんですよこれくらいは説明できそう。

「クニさん、伽耶のくしふる峯で記念写真を撮りましょう。ピッと立って！」『大駕洛国太祖王誕降之地』なる碑があったが、こんなあったかなあ？



亀旨峰の碑の位置も違うし…。亀旨峰のこれと箸墓古墳のあれ、偶然とは思えないほどの相似形。

任那日本府はこの地でもタブーだから、私達の話は、蛸の踊り喰いと蟹の醤油漬。金海博物館の土器や装飾品に感動し、入館無料に感動し、「日本も国立博物館は全部無料にすべきだ」と。これ比較文化論と云えるのか。「この世にないものは無料と平和的な政権交代」と云うじゃないか。「チャガルチ市場でマッコリ飲めるかなあ」クニさん、どうしてここでそうなるの？！

慶州市では仏国寺、石窟庵、天馬塚、慶州博物館、武烈王陵と古都散策を計画した。



新羅と百濟の仏教美術の違いを勉強しようと意気込んでいた時期もあり、久しぶりの仏国寺の石塔に懐かしさを感じたが、土木が専門のハギさんに「アーチの石の加工は大したことないぞ」と云われてカケンとなった。石塔の粋を全然分かつちやいない。ハギさんにじゃないですよ。石塔の粋も説明できない勉強不足の私がカケン。

そもそも仏国寺は統一新羅の時代に建立が始まって、李氏朝鮮の時には仏教が弾圧されたがなんとか残ったものの、文禄・慶弔の役で加藤清正に燃やされて、朝鮮総督府によって再建された。こんな歴史的背景を予習していて、ハギさんには修復の痕がハッキリ見えたに違いない。

最近、記憶の揺らぎにハッとする。覚えられない、思い出せない。

日本の国宝第一号は百濟観音と思い込んで、ことさら渡来人の影響を感じていたが、ところが、「広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像ですよ」と指摘された。これ記憶の揺らぎと云うよりも、曖昧なままの記憶が原因なのであろう。犯人は亀井勝一郎の『大和古寺風物詩』しかない。この手の本はこの一冊しか読んでいないから。高尚で難解で十代の頭では無理だった。時代背景も無理解で、とりあえず読んだに過ぎなかった。

さて、仏国寺と興福寺の阿吽？の立像。どちらが仏教美術として優れているのか。

「お顔がやさしいね～」そんな感想を聞いて、重厚よりも極彩色の方が良いのかも。



開天節の翌日を世の中の人には有給にして四連休にしたらしく、慶州は車も入り込めぬ大渋滞。「右上の方が善徳女王の陵ですよ」に反応したのはドラマを見ている二人だけ。石窟庵や天馬塚、食堂にすら行けずに 30 キロ離れた世界遺産の良洞民俗村に逃散した。

「良洞民俗村に、ワー嬉しい」でもそこ新羅じゃなくて、朝鮮時代の両班の村ですよ。

「焼き魚が食べたい」と気持ち分るけど、博多で味噌煮込みを欲するようなものですよ。

京都見物に出かけたが、鞍馬の山奥にしか行けませんでした。と云うような感じの一日となったが、案外良き一日だった。なんと韓屋風の食堂で焼き魚が出たのです。

「両班の屋敷はどれかなあ」「あれだよ」「これだよ」と、里山を指差しみんなで探した。

帰国の日の予定はないから、「海雲台でリッチな昼食のひと時を」とリクエストしたらドライバーの朴さんに反対されて、どうも年寄りの集団が行くようなところではなさそうだ。それで釜山の港町を案内されて、朝鮮戦争の話を聞いて、船に乗せてもらって沿岸を一周し、糸島の牡蠣小屋のような所で網焼き貝をたらふく食べた。



「倭館に行きたい」とは言い出しにくく、まず釜山タワーに登って 360 度の景色で旅を振り返り、朝鮮通信使歴史館では親日的な館長さんから日韓交流の熱き想いを聞いて、暖かい心持ちで帰途に就いた。「結局、倭館には行けなかったわね」

草梁倭館跡が釜山タワーにあったそうな。無くなったものを探していた私たち、みんな不勉強でした。

「よき旅だったじゃないの。ツアーじゃ無理よ。ところで珍道中って、何かあったの？」
苦労話を少しだけ。書くのは起結、承転は省きます。

「韓国に旨いお酒はないですよ」「じゃあ、俺たち日本酒と焼酎を免税で買って行くよ」
三泊で高級な日本酒二本と焼酎二本も買っちゃって、結局一本はホテルに置いてきて。

「賭け事だ、依存症だ」とお小言しながらも、愉しそうな足取りで。カジノのルーレットの雰囲気だけでも、小さな幸せあるかもと、それがピギナーズラックで三人とも勝ってしまった。気が大きくなって口走った。「明日のご飯、全部私が奢るわよ！」

姐さん、姐さん、ダメですよ、分かっちゃいない。10万₩勝っただけですよ！

「屋台に寄ろ～か。もう一回焼肉でもいいよ」さっき五人で1キロなんぼの豚肉食べて、まだそんなこと云うかね。案の定、次の朝には「腹の調子がおかしい」

「あのね、屋台のキンパ五本も食べるかなあ。一本切って、みんなで分けるモノでしょう。あの海老天、二度揚げしてたでしょう。油でドボドボ、何本もチャミスル飲んで、グダグダ現象が起きるに決まっているでしょう！」姐さんの10万₩では足りなかった。

「キムチ沢山買っていこーと」4万₩のキムチをロッテのおばさんに云われるままに、性格が良くて断れないクニさんは三つも買い込んで、帰国して六日で食べてしまった。

蟹の醤油漬けをチューチューし過ぎて、口内炎で何も食べられなくなった人もいた。

帰国後、歴史講座で先生から、「金海に行ったそうですが、マア 50 点ですね。高霊まで行かないと」でも、先生。生徒だけで高霊の天照大神のテーマパークを見たら、頭が崩壊しますよ。今までの学びが無になりますよ。大伽耶で歪曲された歴史を説くことができるのは先生だけです。引率する責務があると思いますが。

3. 万葉集と現代歌

歴史講座に通う女性の方々は万葉講座も掛け持ちし、「20～30 人の教室に男子は一人もいなくなってしまった」と聞いてから、どんな解釈の万葉歌を聞いているのか心配になり、一度そこに通って講師の方の歴史認識を聞いてみたいと思ったが、止めた。

「古事記・日本書紀は嘘っぱちだ」と云う方もいる。

「天武までは九州の天皇だ」と云う立場の方もいる。

そうなると万葉歌と辻褄が合うのだろうか？

伝承を無視して論が成り立つのだろうか？

さて、2012年3月26日の朝日新聞、第4回万葉こども賞コンクールの記事である。

作文の部 最優秀賞 松田梨子さん(中学校1年生)

絵画の部 優秀賞 渡辺華子さん(小学校5年生)

ともに題材は山部赤人。ちなみに絵画の最優秀賞は、小2の堤千莉さんの額田王。

春の野にすみれ摘みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける

子供たちがこの歌から発想して、作文や絵を描いていました。



松田梨子さんの作文にいたく感心し、全文『古代史ノート』に貼り付けておいた。これが万葉集の入り口となった。と思われるかもしれませんが、違います。

遠の昔、「小倉百人一首」の丸暗記で挫折して以来、万葉歌とは無縁の日々でした。

それで感銘を受けた松田梨子さんの作文。

中学生になってから、私は何となく、いつも何かに縛られているような気がして…「受験」を常にあたまたどこかで意識し、緊張しているうちに、時間などの自由だけでなく、心の自由も私はなくしかけていたのかもしれない。…「心は自由なんだよ。自分の心に素直に生きていいんだよ」…山部赤人と『赤毛のアン』のアン・シャーリーから心の自由と想像力のメッセージ受け取ったのかもしれない。と結んでいる。

これって「自由とは何かをする自由と、何かからの自由」、実存主義が流行った頃に、自由とはそう考えるのかと理解したが、哲学の領域じゃありませんか。

その概念を中一の女の子が綴っていた。

「24 時間働けますか」が流行った時も、団塊の世代とバブルを演出していた時も、いつも頭は数字一杯で、流行歌さえ知らない囚われの日々から逃げ出したいと思っていた。

せめて朝日歌壇の松田梨子さんの歌でもと、新聞での追っかけをしていた。

2012年5月6日の朝日歌壇。古代史ノートの二冊目に貼ってあった二首。

しゃぼん玉近づくように笑い合う「モモって呼んで」「リコって呼んで」 松田梨子

いよいよ春新たまねぎと白エビは進級祝いにカラッと揚げる 松田由紀子

お母さんも選ばれて、「松田梨子は将来、大歌人になるかもしれない。妹はわこ」と記されていた。

2024年11月3日。「才能も枯れただろうなあ」と思いつつ、ドキドキしながら朝日歌壇に松田さんを探した。

駅ピアノ姉と奏でる日曜日ペアのブラウスメンデルスゾーン 松田わこ

誘ったら二つ返事で乗ってくれて街角ピアノ妹と弾く 松田梨子

朝日歌壇には何千人もの応募があって、選ばれたら赤飯炊いて喜び祝うと聞いていた。

もうあれから12年も過ぎたのに。

春野尔 須美礼採尔等 来師吾曾 野乎奈都可之美 一夜宿二来

この万葉歌、漢字だけをジッと眺めてどう解釈するのか、凡人三人に聞いてみた。

「ここはすみれ咲く近江の地、師弟二人で飛鳥の頃に想い馳せ今夜は酒を酌み交わそう」

「奈良の春野はすみれが綺麗です。愛しき昔を思い出し今宵は一緒に過ごしましょうね」

「春の野ですみれの花を摘んだことがなつかしく思い出される。今は一人寝で淋しいよ」

政治闘争に敗れた官吏の歌か、松ぼっくりに火が付いたのか、それとも「僕の恋人東京へ行っちゃ…淋しい夜はいーやーだよ」みたいな歌なのか。

作者も文法も時代背景も分からねば、漢字だけ見たらそんなところでしょう。

春の野にすみれ摘みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける。この読み下しが通説。

私たちは誰かの解釈を学校で教わって、思い込んでいるのかもしれないですね。

凡人の古代史は書物か講座か神社巡りが入口と思っているが、興味を持ったなら自走力で深堀し、一気呵成に一家言持つようになっていく。

この辺りが分水嶺で、自説を滔々と語る人が登場すると反作用で遠ざかる。

一方、古代史小説や韓国時代ドラマ、万葉集や神様など妙に詳しいピン芸人のような人もいて、ピンの楽しい話を聞かせてくれる。

良くも悪くもこうして14年、古代史を楽しんできましたが、「一丁こらで万葉歌を勉強して、違うアプローチで古代史を楽しんでみるか」と、ピンときた。

莫囂圓隣之大相七兄爪謁氣吾瀨子之射立爲兼五可新何本

額田王のこの歌、解説不能だが、ひょっとして松田わこさんの歌と同じではないのか？

駅ピアノ姉と奏でる日曜日ペアのブラウスメンデルスゾーン

現代人が万葉仮名に変換したら、古代の人々はこの歌が解るのだろうか？

「あのね、4500首もあるのよ。人生のどういうステージにいるのか分かってる？」



「そりゃ遊行期って云われてますよ。ああ楽し」

「私はね、深堀して脳の皺が減らない様にするだけ。万葉集を今から出来る訳なからうが、常識で考えなさいよ。あなた、顔面クリームやっても皺は減りません。口元と首筋に塗らにゃ、常識で考えなさいよ。それよりこの前、凄い綺麗な人形を見たのだ。川崎幸子さんの博多人形がズラっと並んで、まじまじ見たね。伊勢物語 芥川ですと。これ見て思い出したよ。女性はね、おんぶしてくれた男性と幸せになるって。平安時代からの伝承かなあ、そんなことされたこと無いでしょう」

「色々言って誤魔化しなさんな。在原業平と藤原高子の駆け落ちの結末も知らないの？たかこじゃない。たかいこって云うのよ。悲しいかな、言霊の判らぬ人間が万葉集を勉強するって、アホと違うか。教養のない暇人なこと！」

どうやら分水嶺に差し掛かったようです。

大和川一路・プロフィール

本名・内藤一郎(ないとう・いちろう)

名古屋市熱田区生まれ。刈谷高校を経て立命館大学卒。

民間企業で45年勤務。

上司から古代史の面白さを教わり、奈良の山河を駆け巡る。

「大和川一路」は上司から贈られたペンネーム。

退任後、憧れの福岡に移住。

季刊古代史ネットで「ちよいワルオヤジの古代史エッセー」を連載。

自称、古代史の旅人、あるいは古代日韓関係史研究家

現在、河村哲夫代表が主宰するふくおかアジア文化塾・理事(広報・企画担当)



マツコのひとり言

第2回

【卑弥呼の年齢】

先日、NHK が企画した「邪馬台国はどこに？」という番組を観た。

番組の時代設定は、卑弥呼が魏に使者を送ったとされる 239 年頃。

ところが、番組に出てきた卑弥呼は、古代衣装に身を包んだ、うら若き女優だった。はて？この頃の卑弥呼が、若い女性である筈がないのだが、、、と不思議に思う。

卑弥呼が登場するのは、大体西暦 180 年前後とされ、亡くなったのは 247 年。途中で交代した記録は無いので、在位はおおよそ 67 年間位と読み取れる。0歳で即位することは無いので、トヨと同じように 13 歳で即位したとしても、亡くなった時の卑弥呼の年齢は 80 歳に近い筈。魏に使者を送った頃はゆうに、70 代の筈だ。

考古学者や歴史学者たちは、なぜ卑弥呼のイメージに監修をかけないのか不思議だ。史実に基づけばこの年代の卑弥呼は 70 歳に近い設定にしなければなりませんよ、と助言するべきだと思う。

ドラマや小説が卑弥呼の年齢をフィクションにするのは良い。しかし、専門家たちが史実の間違いを容認する事はあってはならないと、私は思う。丁寧に史実を読み解き、丹念に調べ、当時の様子を紐解いていくことこそが、古代史学習なのだ。いろんな場所で、ここが卑弥呼の邪馬台国だ、と、うら若き乙女像を作り上げ、年齢をイメージ操作する広報はいかがなものか、と思う。

卑弥呼は晩年の活躍こそ注目されるべき史実が沢山あり、少なくとも、魏に使者を送った時の卑弥呼の年齢は、大枠で提示しておいてもらいたい、と強く思う。

【古代日本人の海洋術】

河村先生は、よく朝鮮半島、対馬、壱岐、北部九州の地図を書かれる。講座おなじみの地図である。九州と朝鮮半島には、ほどよく中間点に壱岐と対馬があるので、航海がスムーズだったとの事。特に先生が力説されるのは、対馬も壱岐も古代から日本の領土であり、奪われた記録などどこにもない事。

なるほど、対馬や壱岐が他民族から征服された話は聞いた事が無い。もし、古代の外国人が海洋術に優れていれば、壱岐対馬の領土争いはあったかも知れないが、対馬壱岐が日本の領土である、という事実こそが古代日本人の海洋術が優れていた証となる。

私は対馬に行ってみる事にした。真夜中に博多港を出発する対馬行きのフェリーに乗り、早朝から当日午後 3 時まで、の弾丸対馬ツアーに参加した。萬松院を廻り、和多都美神社で乙姫を思い、対馬最西端の千俵蔭山の展望台から釜山を見た。そこからは釜山のタワー群が肉眼ではっきり見えた。韓国はこんなに近いのか、と今更ながら感嘆した。河村先生が言われるには、志賀島と釜山は古い昔から、海人族同士の行き来があったとの事。

当時は、ホテルなど無いので、住居を自分たちで作り、そこで役目が終わるまで生活をしていた筈。なので、双方の土地にそれぞれの国の土器や墓が残されているのは当然の流れだと。そして、

場合によっては地元の女性とも縁が出来、定住した者もいるかも知れない。そうだとすれば、お互いの国の文化の影響を受けながら家族として継承されたに違いなく、双方から産まれた子供たちは、二国間を繋ぐ外交官に育った可能性がある、と、河村先生は推察される。成程、そんな事もあったかもしれない、と、古代の隣国との恋愛事情に思いを馳せた、対馬の旅だった。

【小学生の古代鏡通信】

福岡市西区の乃々華さん(当時小6)の自由研究が H27 年度、全国こども科学映像賞を受賞したと聞き、映像を探した。吉野ヶ里で直系 7cm の古代鏡のレプリカを作成した乃々華さんは、この鏡を使って通信できないか、と考えた。そこで、友人とお互い鏡を持ち、どこまで光反射が確認できるか実験している。結果、2km先まで鏡の光を確認する事ができた乃々華さんたち。

もっと大きな鏡なら、さらに遠くまで見えるかも知れない、と思った乃々華さんは、古代で一番大きな鏡が出土した糸島平原遺跡まで行き、平原の大鏡(直系 46.5cm)と同じサイズのレプリカを作り、糸島の背後にある彦山から小呂島まで鏡反射の実験を試みている。結果は、大成功でその距離はなんと、30 km。古代でも実用の可能性があることを証明した素晴らしい実験だ。

乃々華さんはその実験動画を伊都国博物館の学芸員に見せて見解を聞いた。学芸員は、一樣に乃々華さんの実験は評価するものの、古代鏡の見解を説明し、鏡を通信に使ったという記録はない、と締めくくった。

乃々華さんは「私は、この鏡を使って、戦争が始まり敵がきたぞー、とか、援軍ください、とか、そんな緊急な通信に使ったのでは、と考えました」と自分の見解を語った。

私は、圧倒的に乃々華さんの見解に引き込まれた。学芸員が言った学術の見解に、間違いはないだろうが、熱量を感じなかった。もし、私が学芸員だったら、この小学生の見解に大いに感嘆し賞賛し、熱量をもって語り合うのに、と思った。これからの考古学とは、史実を示すだけでなく、もっと想像力をかきたてる要素があっても良いと思う。乃々華さんのような、考古学の金の卵達に大いに熱量を持って対応してくれる学芸員を望みたい。

【河村式教養の話】

河村先生の授業には、時々明解な基礎教養が織り込まれる。

ある時、1坪について講義された。

「1坪とは、大人1人が1日に食べる米の量が取れる田んぼの広さの事を言います」と。ええ？そうなの？知らなかった！不動産で使う1坪という単位は何度も聞いた事がある。家を建てる時、坪単価を平米数に直すのが面倒くさいなあ、と思った事は多々あったが、1坪にそんな意味があったとは全く知らなかった私。

更に、教養講座は続く。「1日1坪の米が必要と言う事は、1年で360坪が必要という事。その360坪が1反で、1反から取れる米の値段が1両と決められた訳です。で、大体家族は6人位なので、6人で横に並んで、縦に田植えをしたので、一反は縦長な田んぼの大きさになったのです」との事。

ほほ～。小中学校で義務教育を受け、大学まで行ったというのに、この理論を始めて聞いた私。私の家は、兼業農家で、小さな頃は田植えや稲刈りに駆り出されていたにも関わらず、一反の定義を、還暦すぎて古代史の師匠から教えられた私。いやあ、本当に恥ずかしい限り。

すると、河村先生がなにやら、いたずら小僧のような顔をされた。河村先生がこのような顔をする時は、とっておきの話をする時だ。

「先ほど一反は 360 坪と言いましたが、なんと、豊臣秀吉の時代に一反は 300 坪に改ざんされたんですよ。わかります？つまり、天下人となった秀吉が、60 坪もごまかして、税収を増やしたという訳です。その名残が今でも続き、一反は 300 坪と定着しました。秀吉は頭が良いというか、ずる賢いというか、どうでしょうかね」と受講者に投げかける河村先生。う～ん、この話もまた新情報。私が知らない事ばかりである。河村式基礎教養は、古代史授業においても、私個人の為にも、とても重要な要素である。

【郷土の奴国サミット】

2022 年、私が住む春日市で市政 50 周年の記念イベント、「奴国サミット」が行われた。

私が小学 6 年生の時に、町から市になったのを覚えている。父は長く春日町役場に勤めていたが、春日市役所になってからは社会教育課で発掘の仕事をしていた。あれから半世紀も経つのか、と私は感慨深い思いで「奴国サミット」に参加した。ところが、サミットでは、奴国の丘歴史資料館の館長や学芸員が、長々と独自の持論ばかりを展開し、資料は専門用語ばかりで、お世辞にも面白いとは言えなかった。

春日市の須玖岡本遺跡からは、中国の前漢鏡が 30 枚以上出ており、弥生時代の鏡として全国屈指の出土率と言える。ちなみに、近畿では中国の鏡は殆ど出土していない。その他、弥生時代の銅剣や銅矛が圧倒的多数、出土しており、その種類と数は他に類を見ない。奴国こそが、古代の最初のクニであり、重要なテクノポリスだったと言える。奴国の存在は、志賀島から出土した金印でも証明されており、我が故郷の自慢の地であり、だからこそ、の奴国サミットだと思う。

私と同じ感想を持つ市民も多数居たようで、不満が燻ぶるように見えた会場だったが、邪馬台国の話になると更に空気は重々しいものとなった。奴国の丘歴史資料館の館長が、「邪馬台国はどこにあったかわかりません。それが現在の見解です。それでよろしいですか？」と開き直った言葉を発したからである。事前質問票には邪馬台国に関する質問が多く寄せられていたようで、質問を無理やり終わらせようとする意図を感じた。館長は間違いを言った訳ではない。しかし「あなたは地元の歴史資料館の館長じゃないんですか」と私は言いたい。奴国にこれだけのモノがあるという事は、邪馬台国も九州にあったかもしれませんね、と、リップサービスでも言って欲しい。それが郷土を愛する市民に向けた声、というものではないか、と、私はつくづくそう思った。

【九州を思う気持ちとは？】

2024年の夏、NHKと九州大学がコラボした「バックヤード探検隊」という企画があり「縄文時代の九州へタイムトラベル」というツアーに申し込んだ。とても楽しみにしていたのだが、期待は大いに裏切られた。九州と銘打っているが、九州の遺跡が全く紹介されなかったのである。紹介されたのは、世界遺産に登録された、青森県の三内丸山遺跡と九大の先生が発掘しているモンゴルの遺跡。そして、縄文時代の遺跡は東北関東に集中しており、九州は2割程度しかない、という説明。佐賀には、BC8000年の東名遺跡があるが、一言の紹介も無かった。九州の遺跡をひとつも紹介しないのであれば、なぜ「九州へタイムトラベル」などと言うタイトルを付けるのか、理解に苦しむ。

九州歴史資料館で行われていた「筑紫君一族史」に出向いた時も、疑問に思う所があった。展示自体は大変素晴らしかったのだが、パネル表示に「最果ての豪族 筑紫君」と書かれていた部分が気になった。最果てとは、まるで何も無いへき地であったかの如く連想される。古代における九州・福岡は決して最果ての地ではない。大陸からいち早く文化が入ってきた、テクノポリスが北部九州だった筈だ。それに、筑紫君磐井は、肥後までも束ねる力ある豪族。「最果ての豪族」と言われる事自体、私は納得がいかない。このパネルを展示した方々は、「最果て」と書くことに違和感はなかったのだろうか。それぞれの地にそれぞれの歴史があるように、互いをリスペクトする姿勢は基本だと思う。古代史を学び始めて、どうも、九州という地が見下げられている気がしてならない。少なくとも、郷土に誇りを持つ古代史愛好家が居る事を忘れてはならないと思う。古代史を牽引する九州の専門家の方々には、もっとも九州を押しあげてもらいたい、と強く思う。

【装飾古墳と熊本魂】

古墳は様々だが、4世紀から7世紀に造られた、色鮮やかに装飾された古墳が全国に700ある。そしてその装飾古墳の3割が熊本県に集中している。集中している要因は、赤色顔料のベンガラが阿蘇黄土として手に入りやすく、有明海が近かったから、とも言われている。

建築家、安藤忠雄さんが設計した、まるで古墳そのものを連想させる熊本県立装飾古墳館には、その代表たる装飾古墳のレプリカが展示されている。中でも有名なチブサン古墳は、2つの大きな同心円文が女性の乳房に見える事から名付けられた説がある。少し足を延ばして山鹿市立博物館まで行くと、事前予約は必要だが、チブサン古墳の玄室に入る事が出来る。中に入ってみると、とても厳かで古代の空気を感じる事が出来た。

装飾古墳館では、筑紫の君磐井にまつわる映画が放映されていた。磐井の乱とは、筑後を治めていた豪族、磐井が肥後豊前の協力を得て、ヤマト王権相手に戦った乱である。映画の主人公は装飾古墳の石を加工する職人で、のみを剣に持ち替え、地元の為にと戦った様子が描かれていた。戦いむなしく石職人は戦死するが、その息子が不屈の魂を継承していくストーリーだった。最後に「この肥後魂は後に菊池一族を輩出する土台となります。そして、その魂は1000年を超えても、決して強者には屈しない姿勢が受け継がれていったのです」というナレーションで締めくくられていた。菊池一族は、中世平安時代から室町時代まで活躍した九州きっての強豪武士で、その逸話はいくつも受け継がれている。明治維新で活躍した西郷隆盛も菊池一族の末裔だと聞き、なるほど、

と大いに感心した。熊本魂を満喫する古墳ツアーの一日だった。

【邪馬台国九州説】

明治天皇の夜叉子、竹田恒泰氏制作の「国史」が文部科学省から歴史教科書として認定された。

私は、このニュースをとっても嬉しく感じた。それは、竹田氏はかねてから邪馬台国九州説を発言されているからである。竹田氏は、邪馬台国について聞かれると、まず、奴国の重要性を語り、文献を読み解く限り、邪馬台国は九州になれば辻褄が合わない、と断言される。

NHKの歴史番組で活躍される、磯田道史さんは邪馬台国特集番組の最後に、一冊の本を持ってこう言われた。「邪馬台国については、この本を買って読んでください」と。磯田さんお勧めのその本は、「日本史の論点」という本で、肝心の邪馬台国については、北九州説だと書かれていた。磯田さんが直接九州説を発言せず、本を通じて九州説を紹介された事は、公の立場からの配慮だと思われる。

ある民放の番組では、著名なジャーナリストが、日田の鉄鏡を提示しながら九州説を唱え、もう一人の歴史学者は中国の著作をもって、九州説を断言された。

もちろん、九州説の人は、九州説の論評を支持し、近畿説の人は近畿説の論評意外は認められないのであろう。考古学愛好者が、どう考えようと、どれを選択しようと、それは個人の自由である。

しかし、教科書認定を受けた竹田さんとNHK解説員の磯田さんの発言は重要なポイントだ。竹田さんは、邪馬台国に関し、歴史学者と考古学者は少なからず見解が異なる、と言われる。どうして同じ学問分野なのにこうも見解が異なるのか、古代史初心者の私は疑問だらけだ。

磯田さんは、歴史とはこれからの人生を歩いていく為の靴のようなものだと言われる。河村師匠は、「邪馬台国がどこであろうと構わない。大切な事は、古代の人々がどうやって生きてきたか、を資料に基づききちんと学ぶことだ」と力説される。でも、私はこれからも郷土の九州説を信じながら、勉強を続けていきたいと心に誓っている。

風の吹く丘 第2回 ～ To be or not to be～

H・IMAGINE

ネガティブな日本人

以前、中国の人工衛星が地上に落下してくるとの予測が報道された。TV で、『近日中に落下してくる恐れがあるため、落下が推定される時間帯は極力外出を控え、安全な場所で過ごす様に』とのアナウンスが TV から流れたからびっくりした。広い世界のどこに落ちるか分からない。日本に落下すると限定しても、そんなものに直撃される確率はとても小さいに違いない。中国の杞憂は、時空を超えて、現代の日本で少なからぬ人達と共有された。

その衛星落下の報道を受けて、米国ではお祭り騒ぎだったようである。中にはハンバーガーショップをチェーン展開している会社が、地表に大きな的を作り、的に当たれば無料でハンバーガーを振る舞うなんて報道もあった。カルト的な集団が、日本に落下すると騒いでいるのならまだしも、大手のマスコミによる注意喚起だから頭が痛い。

ネガティブにも程がある。

資本主義の米国

日本で誰かが、良いアイデアで事業を思いついたとする。このアイデアを担保に銀行に融資の依頼をしても、取りはぐれの無い不動産の担保・若しくは、資金力の有る保証人を要求されるだろう。こうして良いアイデア・発明も研究開発費が調達できずにお蔵入りになる事が多い。米国では、無担保でもエンジェルと言われる投資家が株主として出資をしてくれる。多くの事業は夢と消えるが、中には巨大産業に成長する企業もある。日本を代表する企業は昔から変わりはしないが、米国を代表する企業はこの四半世紀の間に様変わりした。これが資本主義大国、米国の強みで有る。

日本人ももっと楽観的に、ポジティブに未来を信じてゆければ良いのになあ。

また、かなり崩れてきたが、日本では終身雇用制度で大企業が優秀な人材を囲い込み、ベンチャー企業には人がなかなか流れて行かない。米国では不況になると、余剰人員は簡単にリストラされ、職を失った人材は二番手、三番手の企業に就職する事になる。こうしてベンチャー企業に資金と人材が供給され、新しい産業が次々と立ち上がるシステムになっている。

日本株を買おう

米国人の金融資産の運用の王道は、株式投資である。日経平均は 1989 年末から現在までほぼ横ばい(配当を貰った分だけ儲け!)であるが、NY ダウは10倍を大きく上回る。彼らが株式投資に前向きなのは納得できる。日本では過去実績が乏しい事もあり、日本人は価格変動を嫌い、預貯金を中心にお金を寝かせている。株式市場への長期に亘る資本投下は、個人の資産形成に有

効であると共に、新しい産業に資金を提供するに於いて国家の繁栄に不可欠である。日本市場の長期低迷の背景には、過剰雇用・過剰債務・過剰設備の三つの過剰があったが、この三つの過剰は既に解消された。株式投資にネガティブな印象を持つ高齢者の資産は、これから若い世代が相続によって引き継ぎ、学校で投資の勉強をした若者達が株式市場に資金を提供してくれるだろう。日本企業が溜め込んだ資本も東証や政府の方針もあり有効に活用され始めた。

個人の資産も企業の資本もやっと動き始めた。日本株を買おう。

今は昔

オリンピックなどの国際イベントを見ると、世界中の企業がスポンサーとなり TV 画面に色々な国の企業名が映し出される。子供の頃は、有力スポンサーに日本企業がひしめいており、本当に国際イベントかと疑うくらいに日本企業ばかりが目についていた。しかし今は昔である。シャープ・三洋・東芝など、家電産業の凋落が酷い。

そりゃそうだろう、昔の日本企業の電化製品には使いもしない不必要な機能が満載され、分厚い取扱説明書が添付され、その分が価格に上乘せされていた。中韓の電化製品は必要最低限の機能しか無いが、その分価格も安かった。日本企業は、利用者の利益より自己の利益を優先した為に、市場からの消えて行く事になった。

こんな馬鹿みたいな事をやらなければね、未来はきっと明るい。

To be or not to be

今は、株式投資をやるべきか、やらざるべきかハムレットの様に悩んでいる段階ではない。

You should better でも無い。

You have to である。

しかも Right now なのだ。

To be to be ten made aware.

さて、これは何と書いてあるか分かりますか？

(答) 飛べ飛べ、天まで上がれ です(笑)。

そして、日本の株式市場と大和民族の未来が、そう有って欲しいと願っている。

大統領選挙

注目の米大統領選が終わった。争点の一つは移民問題だ。移民は、低コスト労働の担い手だったが、失業と格差と宗教的混乱により治安の悪化等の問題が発生した。また、自由貿易主義は、安価な輸入品の流入を拡大し、インフレを抑制する効果がある一方で、安価な輸入品とのコスト競争に敗れた先進国の労働者から職を奪った。低賃金の移民を受け入れても、低賃金の人たちが生産した商品を受け入れても、受け入れた分だけ国内で雇用が消えるのは当然の理屈である。よって、移民と輸入品を抑制し、国内の雇用を確保しようと訴えるのは、米国の国益にかなっていないと

思う。ただし、移民や輸入品の流入に歯止めを掛けても、貧富の差は拡大していこう。

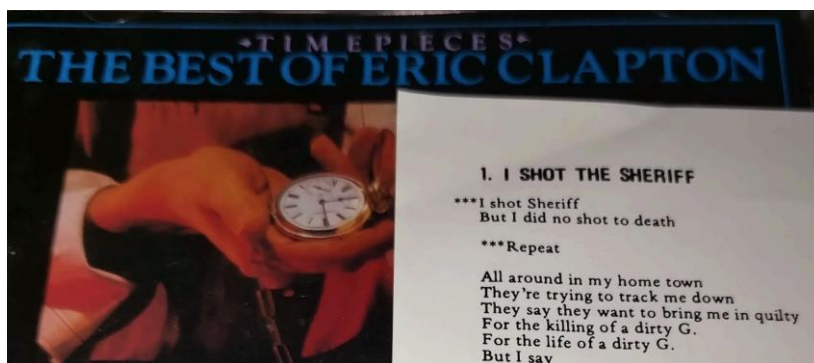
資本主義の原則に自由な競争がある。自由は競争を促し、競争に勝った者は富を獲得する。勝者の資産は運用により更に資産を生む。米国では資産が一部の富裕層に偏り、多くの米国人が中間層から脱落した。困窮者が多数になれば、困窮者の意見が政治に反映されるのが民主主義だ。行き過ぎた資本主義を民主主義が是正するのか、注目である。

大統領の任期切れが迫りバイデン大統領は、レームダック(任期満了を迎え、求心力が低下している状態(足の悪いアヒル))と化した。ドナルド・トランプ、こんなに品が無くうるさい大統領候補をかつて見たことがなかったが、トランプを一枚めくると見覚えのあるアヒルが出てきた。ドナルドダックだ。レームダックとドナルドダック。

【あひるの決闘】はトランプに軍配が上がった。

ポリス的なハリスも敗れてしまった。保安官はシェリフだ。ポリスではない。

I Shot the Sheriff(クラブトンのバージョン)名曲でしたね。



国益の追求

移民が米国人の職を奪い、生活苦をもたらした。新たに米国で職を得た移民は生活苦から抜け出した。ジョン・レノンのイマジンにある様に、国境も宗教も財産も無ければ、もっと人類は仲良くなれたのだろうか。国境が出来る遥か前、人類が非力で生存競争が他の生き物と行われていた時代は、人はもっとお互いに協力していたのだろうか。人が圧倒的な力を持ち、人口が飛躍的に増えた時から、食料等の確保の為に争いは人間同士で行なわれるようになった。絶対的貧困から抜け出しても、相対的貧困は消えない。私たちは他人より豊かな暮らしを求めて行動をする。他国よりも豊かな暮らしの実現が国益だろう。

最悪の場合、戦争になる。

竹島は日本の領土に相違ない。ほぼ全ての日本人の共通認識だ。独島は韓国の領土だと、ほぼ全ての韓国人は思っている筈だ。なぜ両国民がああ島を自国の領土だと思い、相手国の主張が間違っていると憤るのか。それは、提供される情報が違うからだ。提供される情報が誰かにコントロール

ールされている。この領土の奪い合いで戦争になった場合、命を懸けて戦う意味が有るのか。

ウクライナの兵士もロシアの兵士も、自国の正義を信じて戦争に命を懸けている。多くの兵士が毎日戦場で死んでいく。それでも、プーチンは毎日旨いスープをすすっているに違いない。明日は、わが身だ。気を付けよう。

環境問題

トランプは環境保護派ではない。これが一番心配だ。11月も下旬に入ろうとしているのにまだ寒くない。10月に長崎までドライブをした。長距離を走ったのにフロントガラスとナンバープレートに汚れが無い。若い頃に長距離を走ると、どちらも潰れた虫の死骸で汚く汚れたものだ。商店街を飛ぶ燕も、夏の日の夕暮れにお馴染みの蝙蝠も見ることが少なくなった。鳥や虫の糞や死骸は、植物の成長に必要な栄養素だ。また、虫が居なくなると、受粉にも影響が出るだろう。各地で起きる土砂災害は、豪雨の影響が主因だが、栄養不足で深く根を張れなくなった植物の影響も有るかもしれない。

寒い冬、山に雪が積もり、春に雪解け水が海に流れ込む。冷たい水が海の底を這い、海底をかくはんし、プランクトンや藻類の成長が促進され、魚に必要な養分が供給される。寒い冬が豊かな海の恵みをもたらすのだ。山も海も環境問題が深刻だ。

私たちは食物連鎖の頂点にいる。その底辺に起きた大きな変化が、遠からず頂点にも同様の変化をもたらす事は、容易に想像がつく。

環境問題も Matter (問題) だ。

いろいろ考え始めると、あれこれ不安は尽きないが、長くなってしまった。

今宵はここまでいたしとうござりまする。

古代史マニアのひまつぶし 第2回 早良王国を踏査する

徳永 隆司

1.はじめに

福岡市西区飯盛吉武地区の圃場整備事業にともない、埋蔵分化財の調査が1984年から5か年にわたり実施され、たくさんの貴重な文化財が発見された。中でも3号木棺墓には銅鏡、銅剣、勾玉など(写真1)が納められていた。これは支配者の象徴品である「三種の神器」を表わすもので、時代が奴国よりも300年古い、紀元前4～5世紀であったことから、日本の最古の「王」の墓として「早良王墓」とよばれるようになった。

室見川の左岸地域の早良地域では、日本で最も早く稲作が行われていたことが知られており(野方遺跡)、地域を支配する大きな権力をもった「王」がいたと考えられている。魏志倭人伝に記述されている100余国のはじまりの「クニ」と考えられている。

早良王国は室見川から、その上流の日向川の水田に適した段丘地域で、室見川の下流域までを含んでいたと思われる。海に近い愛宕神社の鳥居には上流の金武村の住人が寄進した旨の記述があり、昔から室見川を介して盛んに交流していた。



図1 早良王国全体図

具体的には、図1に示した赤線の部分(室見川の左岸の線から飯盛山、叶岳から長垂海岸までの山塊の線)を「早良王国」と仮定して、いくつかの史跡を実地踏査し、文献等を調べたので、史跡の現状と文献調査結果で興味があった内容を報告する。

現在の福岡市早良区は図1の「やよいの風公園」吉武高木遺跡より南側の室見川上流部であり、下流の北部は福岡市の行政区では、西区となっている。



写真1 王墓の鏡、剣、勾玉

2. やよいの風公園(早良王墓とコスモス祭り)

三種の神器を副葬する「早良王墓」や 2000 基の甕棺墓が発掘された地域は、現在、埋め戻されて、「やよいの風公園」として多くの市民に利用されている。写真2、写真3、写真4に示すように、広い芝生の所々に説明版が陶板で配置してあり、散歩道は「甕棺ロード」などの表示があり、整備された公園となっている。休日は子供とバドミントンやサッカーを楽しむ親子や犬を散歩させる市民で大変にぎわっている。駐車場やトイレが完備されていることから、平日でも結構利用者が多い。また、最近では、小さな簡易テントを張って、楽しむ家族連れが多くみられる。

秋には結構な規模でコスモスの花が楽しめるイベントも毎年実施されている(写真5)。公園の背景は飯盛山であり、コスモスと調和して素晴らしい景観となっている。11月初旬に行われるイベントでは、コスモスが採り放題となっており、人気がある。



写真2 やよいの風公園説明版



写真3 公園から飯盛山をのぞむ



写真4 王墓の説明版



写真5 コスモスまつりのチラシ

3. 吉武古墳群(地下式横穴古墳がなぜこんなところにある?)

古墳群は、福岡市西区吉武、「やよいの風公園」の南西方向の約2kmの山麓に分布しており、その状況は図2となっている。周辺で最も大きな古墳は夫婦塚2号墳であり、図2の右下、市民農園「かなたけの里公園」の北側に隣接している。図の右下側の2基の●の内の夫婦塚1号墳はすでに消失し、農地となっている。残存する2号墳は写真6に示すように巨石で築かれた横穴式石室で、自由に石室に入ることができる。説明版によると6世紀後半に作られ、副葬品として、須恵器、武器、馬具、五鈴鏡が出土している。消失した1号墳と隣合せであったことから、夫婦塚古墳とよばれるようになった。

夫婦塚古墳の北側に散在する古墳の写真を写真7～写真11に示す。場所は図2の中段の「調査古墳群」と記した長まるの線で囲まれた所である。場所は入会地であり、現代の墓も共存しており、戦時中はイモ畑となっていたそうである。

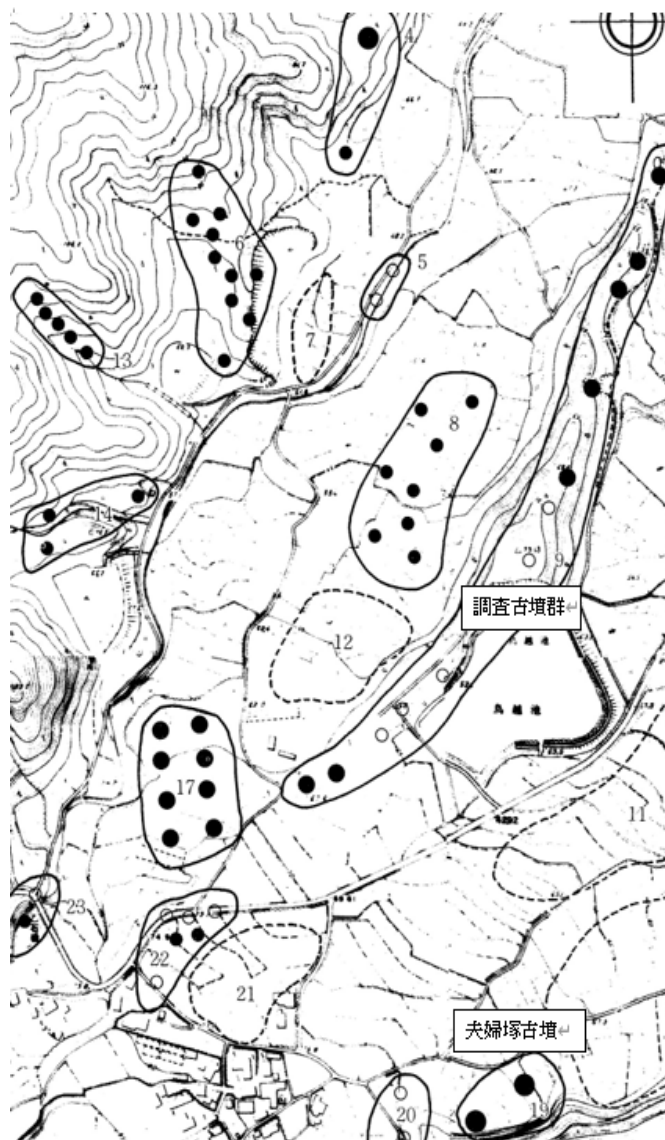


図2 踏査古墳位置図(●:古墳)

写真7や写真8のように古墳は円墳で小高くなっており、見つけるのは容易である。

写真9の入り口は土囊で閉鎖されており、ネットで調べた結果では装飾古墳とのことであった。また、写真 10 は地下式横穴古墳であり、梯子を使用して、降りないと古墳の石室の入り口にはいけない。西日本では珍しい構造の古墳である。

なお、図2の踏査古墳群の中で平地の部分の古墳については、福岡市教育委員会によって発掘調査が行われ、調査報告書が作成されている。副葬品として、須恵器の高杯、土器類、鉄鏃、鉄斧などの鉄製品、装飾品の丸玉、管玉が発掘されており、6世紀の築造と考えられている。また、発掘調査終了地は田や畑となっていた。その他の山の裾部や丘陵部の古墳はほとんど未調査である。



写真6 夫婦塚2号古墳



写真7 円墳の外形



写真8 未発掘の円墳



写真9 埋め戻された装飾古墳



写真10 地下式横穴古墳



写真 11 天井石がはずれた古墳

4. 小戸大神宮(祝詞に出てくる場所?)

小戸大神宮は神代の昔、伊邪那岐命(いざなぎのみこと)が御禊祓(みそぎはらえ)の神事を行い、天照皇大神を始め住吉三神などの神々が御降誕された場所と伝わっている。小戸大神宮は図1の早良王国全体図の最北部(上部)に位置しており、神社の現状を写真 12 と写真 13 に示す。



写真 12 小戸大神宮



写真 13 小戸から飯盛山(左)、叶岳(右)

この神社については、全国の神社で奏上されている祓詞の中に次のように小戸の地名が入っている。

「掛けまくも畏き 伊邪那岐大神(筑紫の日向の橋の小戸の阿波岐原)に禊祓へ給ひし時に…… 恐み恐みも白す」

祝詞の「小戸」をこの小戸大神宮に重ね合わすという考えについて以下に根拠を述べる。

- ① 筑紫の日向 ⇒ 日向峠 ⇒ 日向峠は図1の早良王国の南側に古くから存在し、写真 14 の江戸時代の古地図の右側の上から6行目に「ヒナタ峠」の記載がある。
- ② 橋の小戸 ⇒ 太刀端(たちばな、切り立った断崖の端)⇒写真 15 のように江戸時代の地図では姪浜の海岸線(小戸付近)は切り立った断崖となっており、地図にも荒磯の記載がある。写真 15 の右側の川は室見川、左側の川が十郎川であり、その間に鷲尾山(愛宕山)や姪浜村の記載がある。写真 16 には現在の小戸の岩場を示す。

- ③ 阿波岐(あわき)⇒ 檜の木⇒ 檜・椎・楠などの常緑広葉樹林帯(照葉樹林帯)は西日本の特徴であり、海岸線の山はそれらの木々で被われていた可能性が大きい。特に写真 17 にあるように、檜の木の花は「あわ」のように見え、「あわき」と表現されていた可能性が大きい。

以上が小戸大神宮を祝詞に出てくる「小戸」に重ね合わすことができる根拠である。



写真 15 筑前国絵図 文化・文政(右側の河川は室見川、左側の河川は十郎川)



写真 16 小戸の岩場



写真 17 檜の花

5. 愛宕山(卑弥呼の宮殿があった?)

愛宕山は図1(早良王国全体図)の最北部(上部)に位置しており、山頂には西暦 300 年代(十二代景行天皇時代)に創建され、福岡県では最も古い歴史をもつ「愛宕神社」がある。

邪馬台国について、文献検索を行っていたところ、非常に興味ある文献があったので、紹介する。「土木史研究 論文集」に掲載されたもので、著者は土木工学の都市工学に精通する小合彬生である。この論文の主旨は以下の通りである。

邪馬台国は「奴国」を中核都市として、「伊都国」、「不彌国」を衛星都市とする三か国を中心として成り立っていた。また、「奴国」は経済、「伊都国」は軍事・行政、「不彌国」は祭祀をそれぞれ担当していた。そして、卑弥呼の宮殿は「愛宕山」にあり、ここで、魏使と面会した。

卑弥呼がいた「不彌国」は祭祀都市であり、イタリアのローマにある「バチカン市国」が持つ機能を果たしていたと考えられる。「不彌国」の位置については、小合彬生は都市工学の専門的立場から「不彌国」は「伊都国」と「奴国」の間に存在すべきと考えたことから早良王国と重なる位置となった。

これらの結論を補完する意味で、著者の現地踏査の結果及び魏志倭人伝の記述から得られる根拠を述べる。まず、「不彌国」を早良王国と重ね合わせた理由は、魏志倭人伝の以下の行程に関する記述である。行程については主に方向と距離を抜き出して示す。

- a. 倭人在帶方東南大海之中 依山疊為國邑 舊百餘國 漢時有朝見者 今使譯所通三十國
- b. 從郡至倭 循海岸水行 歷韓國 乍南乍東 到其北岸狗邪韓國(七千餘里)
- c. 始度一海(千餘里)至「對馬国」(方可四百餘里)有千餘戸
- d. 又南渡一海(千餘里)名日瀚海 至「一大國」(方可三百里)有三千許家
- e. 又渡一海(千餘里)至「未盧国」有四千餘戸
- f. 東南陸行(五百里)到「伊都国」有千餘戸
- g. 東南至「奴国」(百里)有二万余戸
- h. 東行 至「不彌国」(百里)有千餘戸
- i. 南至「投馬国」水行二十日 可五万戸
- j. 南至「邪馬壹國」女王之所都 水行十日陸行一月
- k. 自郡至「女王國」(萬二千餘里)

青松光晴や愛川順一の報告では、この記述の中で、魏史の主線行程は、行動を表す「度、渡、行」があり、その後「至、到」の両方の文字(赤字)があるところである。魏使の主線行程は、b,c,d,e,f,h と最終目的地の j である。すなわち、魏使は「道程 h」の「不彌国」には確実にっており、そこに卑弥呼の宮殿があり、梯儻(ていしゅん)たちは卑弥呼に金印紫綬や多くの下賜品を届け、卑弥呼から感謝の上表文を預かって帰ったのである。また、青山光晴は中国史書の行程表示法にはルールがあり、動詞と至、到がそろっていない g や i は傍線行程であり、人口が多い大国であるから、記述していると述べている。

「伊都国」からの邪馬台国連合国への記述について、「不彌国」は「道程 h」のように「伊都国」(現在の推定地は西谷正の JR 糸島高校前駅近くの潤地区付近)から東に 100 里、7~10km のところに「不彌国」はあったということになる(図3)。すなわち、早良王国と「不彌国」は重なる。



3図 伊都国から不彌国の行程図

「伊都国」と「奴国」、「不彌国」の間には高祖山(416m)が立ちはだかっている。前述の魏志倭人伝の「道程 g」の通り伊都国から東南へ 100 里、7~10km 行くと、日向峠を越えて室見川の右岸である「奴国」に達するが、魏使は実際には行っていない。一方、「道程 h」のように東に行き、今宿青木から広石峠を通過して、下山門付近を 100 里(7~10km)行くと早良平野の「不彌国」に達する。

次に「道程 k」の自郡至「女王國」(萬二千餘里)について述べる。すなわち、魏使倭人伝には、出発地の帯方郡から「女王國」の卑弥呼の宮殿までの距離は 12000 里と記述されている。それでは、実際に魏使が行った b,c,d,e,f,h の距離を総計してみると、

b:7000 里+c:1000 里+800 里(方可 400 里)+d:1000 里+600 里(方可 300 里)+e:1000 里+f:500 里+h:100 里=12000 里 となり、魏使倭人伝の記述と合致する。ただし、この計算では、対馬と壱岐の島の大きさは、それぞれ方可 400 里と方可 300 里となっているが、魏使は島を東西、南北へと陸行して、威厳を示すためのパレードをしたと考え、倍の距離となっている。

以上のことから、卑弥呼の宮殿(接見場所)は「不彌国」(室見川下流平野、早良平野)にあったということから、宮殿の立地条件として最適な場所を捜すと、「愛宕山」がある。「愛宕山」については、江戸時代の儒学者の貝原益軒が「筑前国続風土記」の中で「海陸山川のながめ広くして、すぐれたる景勝地、遊覧する人多し」と記述しており、「不彌国」(早良王国)で太陽を拝める最も良い場所である。戦前には、ケーブルカーが設置されており、お花見と展望で賑わったようである。また、近くには姪浜という古くからの村があり、神功皇后が三韓遠征の際、この浜より出発され、凱旋帰国された所である。皇后が濡れた衣を干された浜で、「あこめが浜」が転化して姪浜と呼ばれるようになったという。

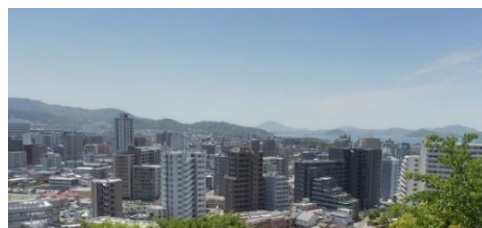
踏査の結果、写真 18 で分かるように「愛宕山」から東方向に「奴国」、西方向に「伊都国」、北東方向に「志賀島、能古島」、南西方向には「不彌国」(早良王国)が一望できる。

愛宕山については、小さな古墳(6世紀)が発掘されており、平安時代末期の瓦経の信仰跡がある。また、鎌倉幕府が元寇の後、九州の防衛の拠点とするため、姪浜に奉行所(鎮西探題)を設け、愛宕山に鷲尾城を築いた。このように、古代から現代まで盛んに利用されてきており、残念ながら、卑弥呼の宮殿に繋がる遺跡は発見されていない。

写真 18 愛宕山からの展望



東「奴国」



西「伊都国」



北東「志賀島、能古島」



南西「不彌国、上山門、下山門」

6. おわりに

室見川左岸にある吉武遺跡から、日本で初めて支配者の象徴品である鏡、剣、勾玉をもつ王墓が見つかり、稲作も伝来後、早々に日向川などで行われた。また、伊邪那岐命が御禊祓(みそぎはらえ)の神事を小戸大神宮で行い、すぐ近くの「愛宕山」には卑弥呼の宮殿があった可能性がある。さらに、愛宕山の傍の「姪浜」から神宮皇后が三韓遠征に出発し、姪浜の港から10分で行ける「能古島」を古田武彦は国生みの最初の島「オノゴロ島」に比定している。

このように古代の遺跡や説話が満載した室見川左岸一帯には、今回取り上げた遺跡以外にも「野

方遺跡」や「下山門遺跡」などの重要遺跡をはじめ、発掘済の遺跡だけでも 30 箇所を超える。これらを「不彌国」(早良王国)と捉えて、その古代の事象を関連付けて、考察を続けていきたい。

文献)

小合彬生:邪馬台国地理に対する一考察、土木史研究論文集、土木学会、26、97-106(2007).

福岡市教育委員会:吉武塚原古墳群、福岡市埋蔵文化財調査報告書第 54 集(1980)

古田武彦:盗まれた神話、ミネルヴァ書房(2010)

青山光晴:日本古代史の謎、デザインエッグ株式会社(2016)

愛川順一:「魏志倭人伝」を読み解く、ふくおかアジア、1、24-49(2024)

西谷 正:考古の旅人、西日本新聞、18(2024)



徳永 隆司(とくなが たかし)

1947 年 福岡市生まれ 福岡市在住

現在 (株)ENJEC 技術顧問

工学博士 技術士(水質管理部門)

趣味 テニス 陶芸 家庭菜園 古代史

菜園が吉武・高木遺跡(日本で最初に一つの木棺墓から剣、鏡、勾玉が見つかった)の近くであったことから、古代に興味を抱き、10 年近く古代史の講演を受講している。

吉備の古代史シリーズ 第15回

吉備と出雲<中>墳丘墓から見る 「古墳起源に関わる楯築と四隅」

NPO 法人福岡歴史研究会理事 石合 六郎

<はじめに>

出雲にはヒトデの形、あるいはこたつの形ともいう四隅が突き出た不思議な形のお墓（四隅突出型墳丘墓）がある。まだ、謎が多い。その墳丘には各地の土器が供えられ、その一つに吉備発祥の特殊器台がある。ちなみに他の地区の土器には、丹越型と称されるものなど日本海に面した山陰から若狭に連なる地域の土器がある。さらには朝鮮半島の土器も供えられていた。

古代日本の文化の先進地域は日本海側を中心としている。この日本海文化の影響を受けた吉備にも、後の「前方後円墳の萌芽を思わせる埋葬文化が」あった。

四隅突出型墳丘墓と吉備の双方中円型墳丘がそれである。ふたつはそれぞれ複数の突出部（墓道）を持ち、複数の木槨棺が主体として葬られていた。当時は極めて貴重だった水銀朱を埋葬施設に大量に敷いていた。日本独自の古墳文化のルーツの一つであることは間違いないだろう。

<1> いつどこで見つかる

◎定説ひっくり返した青木遺跡



四隅突出型墳丘墓は、昭和 43（1968）年に弥生時代中期の遺跡、順庵原 1 号（島根県邑南町）で最初に確認され、その後、広島県三次市でも。平成 13（2001）年～同 15（2003）年にかけて発掘された青木遺跡（出雲市）から、三次盆地のものより古い紀元前後のものが見つかかり、出雲平野で発祥、発展、伝播したとみられるようになった。

◎起源は近畿北部の方形貼石墓か



（京都府埋蔵文化財センター肥後弘幸氏の「方形貼石墓概論」から）

起源としては、かつては朝鮮半島起源の高句麗積み石墓説（註 1）なども唱えられたが、年代的に合わないことから、今では京都府の丹後半島など近畿北部のものに起源を求める説が有力だ。

右上図のように日本海側に分布する。「方形貼石墓」は、墳丘斜面に貼石を施しており、突出部こそないが、四隅突出型墳丘墓との共通点が多い。（京都府埋蔵文化財センター肥後弘幸氏「方形貼石墓概論」参照＝註 2）



第4主体供献土器 (写真提供:島根県教育委員会)

◎広範囲な四隅の分布と供献

四隅突出型墳丘墓は日本海側を島根県から富山県までの広範囲な地域にベルト状に分布している。しかも、吉備をはじめ丹越などの土器が供献されている。



写真提供：島根県教育委員会

次にその分布一覧を見てみよう。

◎広範囲に分布する四隅墓

四隅突出型墳丘墓の一覧〔可能性のあるものも含む〕											
名称	所在地	大きさ(m)	貼石・列石	時期	名称	所在地	大きさ(m)	貼石・列石	時期		
[備後]					47	洞ノ原1号	鳥取県淀江町	5.4×6.5	有	V-1	
1	奈祐池西1号	広島県三次市	10.5×5	有	IV	48	洞ノ原3号	鳥取県淀江町	3.9×4.2	有	V-1
2	奈祐池西2号	広島県三次市	3.8	有	IV	49	洞ノ原4号	鳥取県淀江町	3.6×4.3	有	V-1
3	殿山38号	広島県三次市	13.7×7	有	IV	50	洞ノ原5号	鳥取県淀江町	2.1×2.0	有	—
4	殿山39号	広島県三次市	(未調査)	有	-	51	洞ノ原7号	鳥取県大山町	4.4×4.0	有	V-1
5	陣山1号	広島県三次市	5.2×3.5	有	IV	52	洞ノ原8号	鳥取県大山町	4.9×4.4	有	V-2
6	陣山2号	広島県三次市	12.7×6.3	有	IV	53	洞ノ原9号	鳥取県大山町	2.1×2.0	有	V-1か2
7	陣山3号	広島県三次市	5×6.2	有	IV	54	洞ノ原10号	鳥取県大山町	1.95×1.6	有	—
8	陣山4号	広島県三次市	9.0×4.7	有	IV	55	洞ノ原11号	鳥取県淀江町	1.55×1.25	有	—
9	陣山5号	広島県三次市	2.9×4.5	有	IV	56	洞ノ原12号	鳥取県淀江町	1.15×1.25	有	—
10	矢谷1号	広島県三次市	全長18.5	有	V-4	57	洞ノ原13号	鳥取県淀江町	1.4×1.25	有	—
11	岩脇1号	広島県三次市				58	洞ノ原16号	鳥取県淀江町	1.5×1.2	有	—
12	岩脇1号	広島県三次市				59	洞ノ原17号	鳥取県淀江町	1.5×1.25	有	—
13	佐田谷1号	広島県庄原市	19×14	有	V-1	60	仙谷1号	鳥取県大山町	一辺15	有	V-2
14	田尻山1号	広島県庄原市	10.9×9.6	有	V-1	61	仙谷2号	鳥取県大山町	7.4×7.1	有	V-2
[安芸]					62	徳楽	鳥取県大山町	19×18	有	—	
15	熊ノ神3号	広島県千代田町	10.3×3.7	有	V-1~2	63	父原1号	鳥取県溝口町	12×	有	V-4
16	熊ノ神4号	広島県千代田町	10.2×6.4	有	V-1~2	64	父原2号	鳥取県溝口町	9.5×6	無	V-4
[石見]					[東伯]						
17	順庵原1号	鳥取県端穂町	10.8×8.3	有	V-1~2	65	阿弥大寺1号	鳥取県倉吉市	13.6×	有	V-1~2
[出雲]					66	阿弥大寺2号	鳥取県倉吉市	6.4×	有	V-2~3	
18	西谷1号	鳥取県出雲市	9.5×7	有	V-3	67	阿弥大寺3号	鳥取県倉吉市	6.2×	有	V-1~2
19	西谷2号	鳥取県出雲市	35×24	有	V-3	68	藤和鳥取県倉吉市	9.6×8.5	有	V-4	
20	西谷3号	鳥取県出雲市	40×30	有	V-3	69	築葉鳥取県倉吉市	南北7.1以上	有	V-2	
21	西谷4号	鳥取県出雲市	32×26	有	V-3	70	宮内1号	鳥取県東郷町	17×9.25	有	V-2~3
22	西谷36号	鳥取県出雲市	17×8以上	有	V-4	71	糸谷1号	鳥取県国府町	14×12	有	V-4
23	西谷9号	鳥取県出雲市	43×33	有	V-4	72	西桂見鳥取県鳥取市		有	V-2~3	
24	中野美保	鳥取県出雲市	11×9	有	V-3~4	[美作]					
25	青木	鳥取県出雲市		有	V-3	73	竹田8号	岡山県鏡野町	14×5.5	有	V-1
26	布志名大谷川1号	鳥取県玉湯町	10.7×7.7	有	V-3	[備前]					
27	布志名大谷川2号	鳥取県玉湯町	6.5×5以上	有	V-3	74	周遍寺山1号	兵庫県加西市	9.5×6	有	—
28	布志名大谷川3号	鳥取県玉湯町	一辺2.3以上	有	V-3	75	船木南山	兵庫県小野市	14×13.5	有	V?
[因幡]					[越前]						
29	間内越1号	鳥取県松江市	8.8×6.7	有	V-3~4	76	小羽山22号	福井県清水町	9×6	無	V-3
30	米美1号	鳥取県松江市	10×8	有	V-3~4	77	小羽山23号	福井県清水町	8.7×7	無	V-3
31	的場	鳥取県松江市	8×13以上	有	V-3	78	小羽山24号	福井県清水町	13×13	無	V-3
32	灰田	鳥取県松江市	東西10.5	有	V-1?	79	小羽山30号	福井県清水町	26×22	無	V-3
33	南講武小廻	鳥取県鹿島町	—	有	V-4	80	小羽山33号	福井県清水町	7×5	無	V-3
34	仲仙寺8号	鳥取県安来市	(未調査)	—	—	81	小羽山47号	福井県清水町	4.4×4.4	無	V-3
35	仲仙寺9号	鳥取県安来市	18×15	有	V-3	82	高柳2号	福井県高柳町	6.5×5.5	無	—
[加賀]					[加賀]						
36	仲仙寺10号	鳥取県安来市	18×18	有	V-3	83	一塚21号	石川県松任市	一辺18	無	V-4
37	雲山IV号	鳥取県安来市	18.8×15	有	V-4	[越中]					
38	安養寺1号	鳥取県安来市	20×16	有	V-4	84	杉谷4号	富山県富山市	一辺25	無	V-4
39	安養寺3号	鳥取県安来市	(不明)	有	V-4	85	富崎1号	富山県婦中町	一辺21.7	無	V-4
40	摺津山6号	鳥取県安来市	31×27.5	有	—	86	富崎2号	富山県婦中町	一辺17以上	無	—
41	摺津山10号	鳥取県安来市	32×26	有	—	87	富崎3号	富山県婦中町	22×21	無	V-3
42	下山	鳥取県安来市	25×17	有	—	88	六治古墳	富山県婦中町	一辺24.5	無	V-4
43	カワカツ1号	鳥取県伯太町	11×7	有	V-3	89	鏡坂1号	富山県婦中町	一辺24.1	無	V-4
44	大塚	鳥取県西郷町	18.2×	有	V-3~4	90	鏡坂2号	富山県婦中町	一辺14	無	V-4
45	日下1号	鳥取県米子市	一辺10	有	V-2	91	[岩代] 鏡ノ内1号	福島県塩川町	9×8.7	無	周溝蓋弥生末~古墳初
46	尾高浅山1号	鳥取県米子市	9.7×7.1	有	V-1周溝墓古墳初						

上記の表は鳥取県埋蔵文化財センター（鳥取県岩美郡国府町）のHPに掲載されていた「四隅突出型墳丘墓」一覧を引用させていただいた。（註3）全部で91基だった。

◎伯耆で一気に広がる

一覧を引用させていただいた鳥取県埋蔵文化財センターのホームページには、発達過程について次のような示唆的な説明が掲載されていた。

「最初は、規模も小さく突出部もあまり目立たない形でした。しかし、弥生時代後期（約2,000年前）になると、日野川を下り、妻木晩田遺跡の洞ノ原2号墓を端緒にして、伯耆地方を中心に一気に分布を広げます。規模も少しずつ大きなものが造られるようになり、突出部も急速に発達していきました。弥生時代後期の後半（約1,900年前）になると、分布の中心を出雲地方に移して墳丘の一層の大型化が進むとともに、分布する範囲を北陸地方などにも広げていきました。しかし、弥生時代の終わりとともに忽然とその姿を消してしまうのです。」

次いで「このことから、四隅突出型墳丘墓は、前方後円墳に象徴される古墳時代の幕開けを前に、山陰地方や北陸地方などで地域の有力首長の墓として築かれたと考えられています。出雲の王墓、西谷3号墓では、地元の土器とともに吉備（今の岡山県と広島県東部）や北近畿（兵庫県と京都府の北部）などの土器も多量に供えられ、中国の歴史書に『倭国大乱』とするされたこの時期、地域間の交渉が盛んに行われていたことも垣間見えてきました。」

◎倭国大乱ではない

これはすごいコメントだ。倭国大乱が山陰にまで及んでいたという議論はありえない。しかし、弥生時代後期の後半の年代を1900年前（西暦2世紀）としたことは、あとで述べるが、現在の考古学会の年代の錯誤に起因する。したがって倭国大乱より100～200年後の3世紀が舞台と筆者は考えている。次章の築造年代のところで詳述する。

< 2 > 築造年代を考える

◎危険な落とし穴

日本の古代史の年代を考えるうえで落とし穴がある。それは箸墓古墳を卑弥呼の墓と信じている人たちが、箸墓古墳と同時代でやや古いホケノ山古墳から出土した小型丸底土器について、庄内式期のものだととらえ、炭素14Cの年代測定で3世紀以前となっており、ホケノ山古墳は3世紀に築造されたとの自説を主張している。これにより、ほぼ同時代の箸墓古墳も3世紀だというのだ。

これに対し檀原考古学研究所の関川尚功氏は「庄内期にはまったく出土しない小型丸底土器が出土しているので、土器から判断すると、ホケノ山古墳の築造は布留式の古い時期である。」と断言している。たとえ古い土器があっても、同時代の新しい土器があれば、その遺跡の年代は新しい土器の製作時代に引っ張られる。

したがって、邪馬台国畿内説を唱える人たちは関川氏の意見を取り入れないまま永遠に議論している。例えば吉備の場合、著名な考古学者である松木武彦氏（国立歴史民俗博物館教授、岡山大学教授、2024年9月死去）は楯築遺跡について、後漢書に登場する帥升の墓だと主張してきた。本当にそうであろうか？同書には「安帝の永初元年（107年）冬十月、倭国が使いを遣わして貢献した。（本紀）安帝の永初元年、倭国王帥升等が生口160人を献じ、謁見を請うた。（列伝）」（wikipediaから）とある。2世紀の人物である。ところが、同遺跡からは吉備の土器編年の指標となる「鬼川市Ⅲ」（弥生時代後期後半3世紀の土器とされている）が出土している。かつては「オノ町」が古墳時代といわれ、3世紀の終わり、すなわち西暦300年前後の土器だった。これをホケノ山の時と同じ手法で、「鬼川市Ⅲ」を「庄内」に、「オノ町」を「布留」に対応していることにして100年から200年古くみせ、倭国王帥升に偽造して空想の世界を作り上げたといしか言いようがない。

◎四隅突出型墳丘墓は大丈夫か

この手法は四隅突出型墳丘墓でも実行されているかもしれない。いくつかの年代表を見比べてみよう。まず渡辺氏の見解を見てみる。渡辺氏作成の年代分布表（次ページの①）では四隅突出型墳丘墓の年代を弥生時代中期から終末期に設

定されている。これについて渡辺氏は「西谷3号墓の発掘調査が終わった後、市の教育委員会がこれらについて調査した。各墳丘墓で土器などが出土し、それぞれおおよその築造時期が突き止められた。それによると弥生時代後期後葉の二世紀中ごろから弥生時代終末期の三世紀前半にかけ、

3号墓(第4主体→第1主体)→2号墓→4号墓→9号墓

という順番で推移したことがわかっている」(同書p42)という。

終焉を「弥生時代終末期の三世紀前半」と表現されている。国譲りを西暦260年前後とみる、筆者からすれば微妙である。でも、誤差の範囲とみることが出来る。この点は今後さらに検証することとする。

◎鳥取県埋蔵文化財センターの見解

これに対して鳥取県埋蔵文化財センターでは、終焉を弥生時代の編年方式＝註4＝で「V-4」とだけ記している。「V-4」とは「中期後葉」とされる。解釈が一定でないが、西暦で「紀元前1～紀元後3世紀の時期」(googleAI検索)を指す。あまりに幅が広く特定できない。

① 渡辺貞幸氏著「出雲王と四隅突出型墳丘墓西谷墳墓群」から

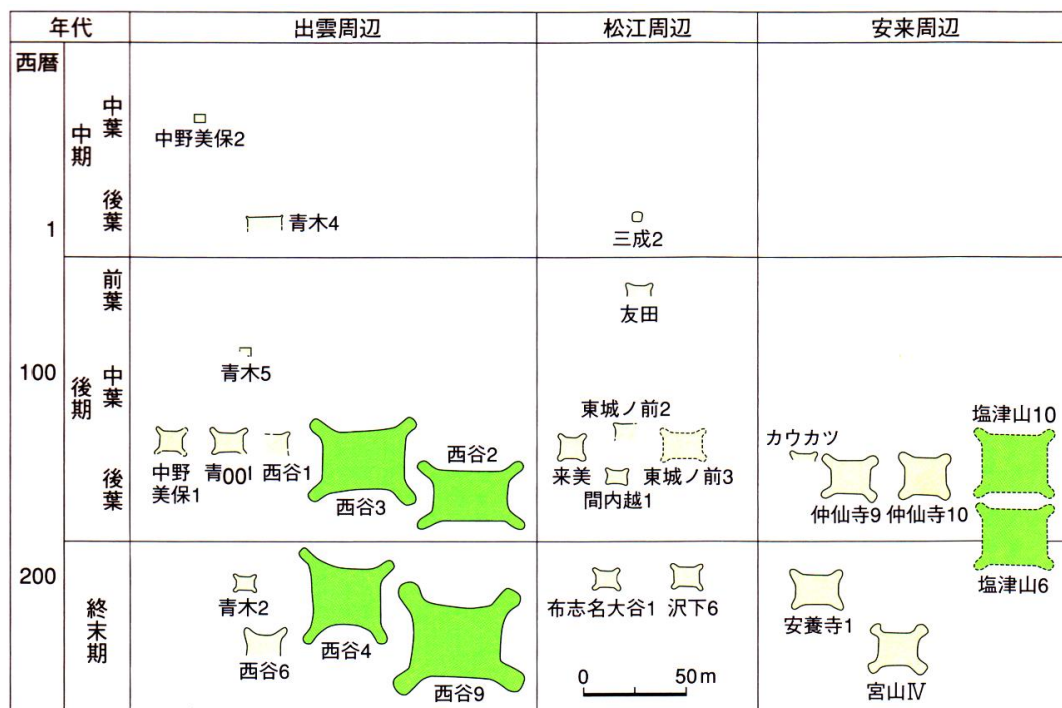
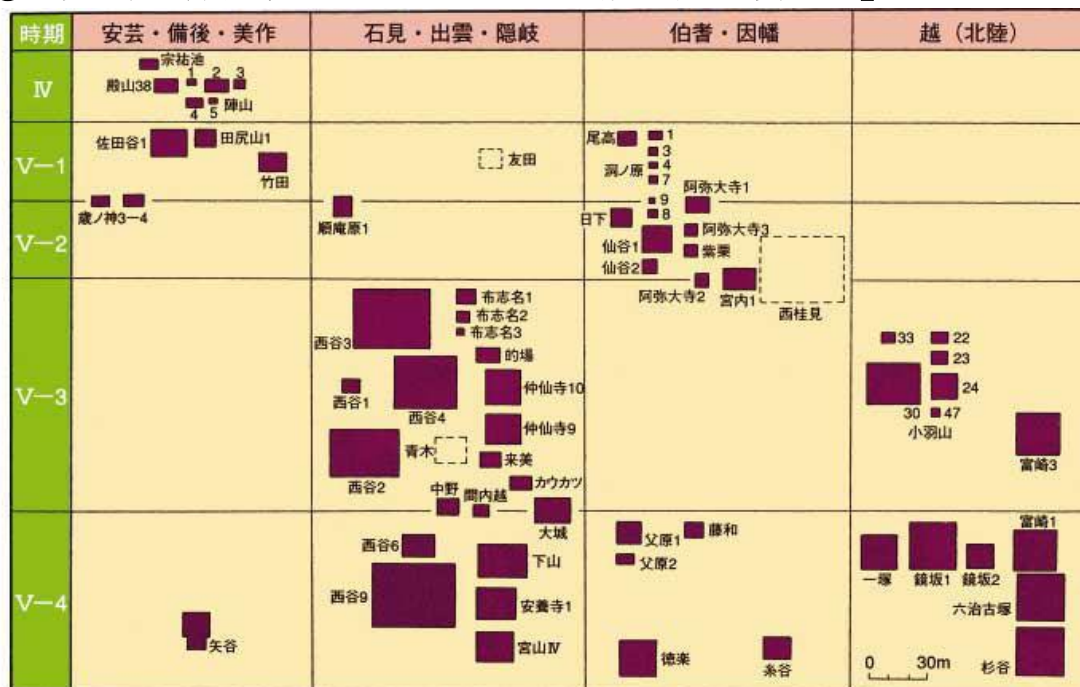


図57・出雲の弥生墳丘墓の変遷

破線で墳形を示したものは正確な時期が不明。出雲では後期後葉に出雲市の西谷墳墓群と安来市の荒島墳墓群で、突然巨大な墳墓が出現する。左欄の西暦年代はおおよその目安を示す。

② 鳥取県埋蔵文化センターHP「四隅突出型墳丘墓」から



2つの年代分布図でいくつかの違いがあるようだ。完全な編年は無理なのだろう。四隅突出型墳丘墓に関しては渡辺氏がプロフェッショナルである。当面は同氏の年代分布表を中心に考えていきたい。

◎年代を決める手がかりは？

渡辺氏の著書「出雲王と四隅突出型墳丘墓西谷墳墓群」（2018年刊）には同氏の年代観が記されていた。それによると、「西谷墳墓群は銅剣が358本と銅鐸6個、銅矛16本が発見された荒神谷遺跡、さらに銅鐸39個が出た加茂岩倉遺跡からそれぞれ7キロ、9.5キロしか離れてない。（中略）埋納されたのは実年代で示すのは難しいが、大まかに西暦紀元前後、遅くとも一世紀前半ぐらいまでのころではなかろうか。」（同書p60～61、要約）と筆者の想定とはかなり異なっている。

さらに同氏は「弥生時代の中期末から後期はじめにかけての時期には、山陰の社会は大きく変化する。青銅器の大量埋納のほか、四隅突出型墳丘墓が広がりはじめ、山陰独特の土器様式が生まれる。松江の田和山遺跡では三重の塚に囲まれたなんらかの施設が大量の礫石や石鏃が散乱する状態で放棄され、隣の伯耆

では妻木晩田遺跡という高地性の大規模集落が成立する。何か尋常ならざる不安定な社会状況、たとえば、他集団との接触による強い緊張状態というような事態が生じていたのではないか。緊張した状況は地域の結束を促し、強いリーダーを生み出す。青銅器の埋納もこうした社会状況と深く関係した呪的なパフォーマンスだったのではなかろうか。」(同 p 6 2) とこの時期の社会状況の急激な変化を述べている。

筆者は青銅器の大量埋納の時期は、前回のこのシリーズ「吉備と出雲・銅鐸文化」のなかで述べたように国譲りと関係あるとした。その国譲りは西暦260年プラスマイナス5年と設定してきた。中でも銅鐸については、2度にわたる埋納があり、第1次が国譲りの時、第2次が饒速日命の神武天皇への帰順の時とした。この考えに従うなら、「四隅突出型墳丘墓の突然の終焉」こそが「国譲り」の時であろう。

◎渡辺編年では「国譲り」と一致

渡辺氏の編年表①を見ると、最後で最大の四隅突出型墳丘墓9号墳の位置が終末期の最後に設定されている。また、「西谷王朝四代の王」の項目(同書 p 4 2)にも「墳墓が巨大化したのは、弥生時代後期から終末期にかけての一時期だけだった。」とのべ、9号墳がまさに弥生時代終末期の位置に描かれている。西暦の数字表示からも260年プラスマイナス5年に近い位置とみてよさそうだ。

これらの混乱を避けるために神話を含めいろいろの事象をまとめたのが下の表である。

	290	280	270	260	250	240	230	220	210	200	190	180	170	160
橋梁遺跡														
西谷3号墳														
同9号墳														
平原遺跡														
		神武天皇	★神武東遷(270年)	266 倭女王西遊に遣使 遷遷雲命 穗穗出見命 鸕鷀草薙不合尊	★出雲国譲り(260年)	豊秋津師比売命・大忍穗耳命	248 卑弥呼没す。素戔嗚尊追放(出雲)	247 狗奴国と交戦に告げる 248 2年続けて皆既日食	239 卑弥呼魏に朝貢金印授く	天照大御神(卑弥呼)			伊邪那岐・伊邪那美神	
			神代三代		邪馬台国の時代						移行期 邪馬台国		神代7代 奴国の時代	
	赤字は海外事象から絶対年がわかる事象、黒字は支配者名、★付き事象は日本の古典のみに記載された事象だが、海外文献から前後関係もとに年代が推定できる事象													

神話と実在の歴史が矛盾なく一つの表におさまった。記紀に書かれた日本神話の神が実在したのだ。次に古墳時代直前の同時代の墳丘墓を比較しながら、どのように古墳時代に繋がるかを見てみよう。

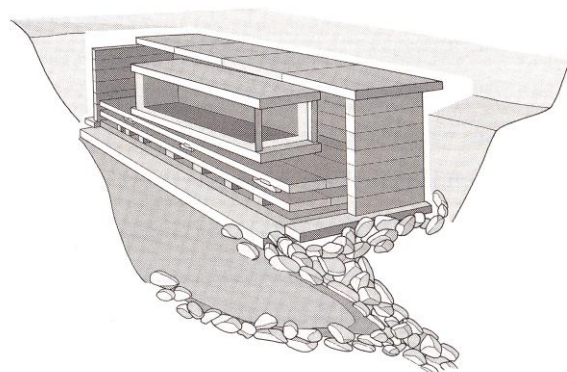
< 3 > 弥生時代墳丘墓を比較

これまでの論考で四隅突出型墳丘墓のうち代表的な西谷3号墳、その3号墳に特殊器台を供献した吉備の王であった人物の墓と想像させられる楯築遺跡、同時代の築造とされる筑紫の平原遺跡について、比較することで当時の地域差や、共通性を見てみよう。

◎共通点多い四隅と双方中円墳

	楯築遺跡	西谷3号墳	平原遺跡	
基本項目	墳丘の形	双方中円墳	四隅突出型	方形周溝墓
	棺槨	木槨墓	木槨墓	割竹形木棺
	墳長×墳幅×高さ	全長83m、円丘部直径49m、高さ4.5m	東西40m×南北30m、高さ4.5m	東西18m、南北14m、高さ不明
	設置場所	丘陵	丘陵	平地
	貼石、立石	立石	貼石	なし

葬送儀礼で最も特徴的なのが棺槨で、楯築と四隅（西谷3号墳）は、ともに木槨墓で細部は異なるがよく似ている。朱をともに大量（楯築32Kg、西谷10Kg）に敷きつめていたことも共通していた。



楯築遺跡の棺槨復元図

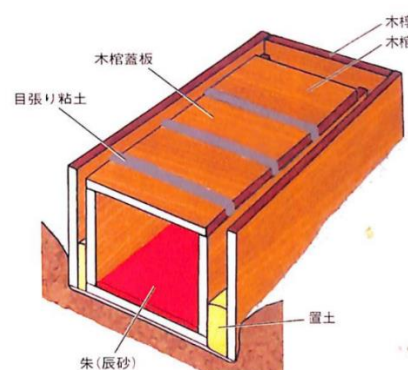
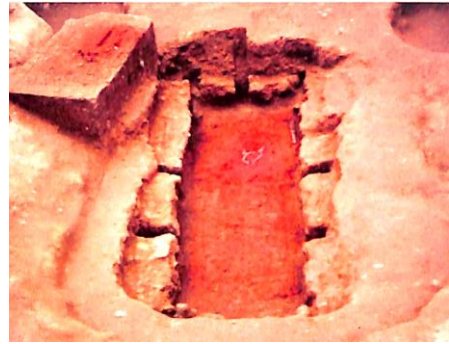


図30・第4主体の主槨の復元模式図
棺槨の側板が一枚板だったのかどうかは不明だが、棺蓋は数枚の板からなっていた。上に槨の蓋が置かれ、最終的にはすべて埋め戻された。

西谷3号墳の棺槨（第4主体）

楯築遺跡の棺槨全景



西谷 3 号墳の棺槨全景

◎副葬品では平原のみ鏡

		楯築遺跡	西谷 3 号墳	平原遺跡
副葬品	鏡	×	×	鏡 ○
	鉄剣（刀）	○	○	○
	玉類	○	○	○
	器台	○	○	不明
	土器（器、壺類）	○	○	不明

副葬品は玉類、刀剣はいずれもあるのに対して、鏡が筑紫の墓制では不可欠なのに、出雲、吉備とも所有していない。後の古墳時代には、列島全体で鏡が重要かつ、大量に埋納されることは極めて示唆的だ。すなわち、大和政権が筑紫に起源を持つことは、他の事象と共にほとんどの人が認めるところだ。

また、刀剣については平原、楯築、西谷の 3 墳墓とも所有。西谷の刀剣の存在があまり知られてない

ので付記すると「外観＝長さ 39 cm，幅 3.8 cm，厚み 2.5 cm で，片面には外装の



平原遺跡の大鏡とその他の鏡

木質が付着しているが他面にはほとんど付着していない。金属部分は全面錆化し、錆による膨れが認められる」とある。

平原がやや新しい形だが、先進的なものが入る地理的条件があるので、同時代と考えてもよいだろう。

長さ 75 cmの平原鉄刀



長さ 47 cmの楯築の鉄剣

第 121 回 鉄剣の切断

西谷3号墳鉄剣
長さは39cm、
写真は断面

◎楯築と四隅の突出部

	楯築遺跡	西谷3号墳	平原遺跡	
墳丘周辺施設等	埴輪類	○ (特殊器台)	○ (特殊器台)	不明
	造出し	○ 双方	○ 四方	×
	墳丘上の構築物	○	○	○
	墓道	2方向	4方向	なし
	棺上の供貢	弧帯石等の破壊片□	土器の破壊石□	鉄刀をおく
	殉葬	×	×	○?
	周溝	×	×	○

四隅突出型墳丘墓の突出部分は、墓道とする有力な説がある。確かに墓道のためを思わせるものもあるようだが、すべての墳丘がそうではないだろう。しかし起源に墓道であった可能性はある。そう考えると楯築遺跡の双方突出部もその名残とみることができそうだ。

◎埴輪の起源は吉備か

埴輪の起源とされる吉備の特殊器台が、出雲で飾られたことは、おそらく吉備と出雲で婚姻関係が結ばれていたのだろう。そこで使われた呪術的要素を持つ土器が、結界を示す道具として、吉備と大和朝廷との蜜月時代になった古墳時代に採用されたのかもしれない。

棺上か棺の周辺に呪術的な行為が見られる。平原遺跡では鏡の破碎片、楯築遺跡では弧帯文石（亀石）の破碎片、西谷3号墳では土器の破壊片で棺を覆っていた。霊に対する呪術的な共通点を持っていたのかもしれない。墳丘上での祭祀、そのための施設がそれぞれあった可能性がある。（下図参照）



<4> 古墳文化へ流れ込む

◎吉備と大和朝廷

日本の弥生時代を考えると、古代吉備は出雲から大きな影響を受けていることはたしかだ。この論考のメインテーマでもあった。しかし、出雲は筑紫勢力（高天原勢力あるいは邪馬台国勢力といってもよい）に国譲りをした。このことは記紀に神話（古事記は上つ巻、書紀は神代記）に書かれている。力を失った出

<おわりに>

今回は四隅突出型墳丘墓にスポットを当てて考えてきたが、これらの墳墓がどんな人、どんなグループが築いたかが知りたかったのである。この文書を読んでもくださった方も同じ思いだろう。

いつ築かれたかがわからなければならない。筆者は神話と結びつけるべきと考えた。この墳丘が突然終了することから、「出雲の国譲り神話」を第一の候補とした。しかし、他の選択肢はなかった。

これまでの論考でも銅鐸は大国主の農耕祭祀の道具であった。荒神谷の358本の銅剣も、加茂岩倉遺跡の39個の銅鐸も大国主命の宝物であり、彼の日本海文化地域の支配終焉と共に埋納された。この四隅突出型墳丘墓も大国主一族のものであることは否定できないだろう。これが結論だ。

さて、どこに大国主は眠るのか？ 四隅最後の墳丘である西谷9号墳であろう。それを確かめるにはまだ手続きが必要だろう。今回の「吉備と出雲」シリーズでは<上>で銅鐸、<下>で分銅型土器と特殊器台を取り上げる予定だったが、今回は四隅突出型墳丘墓に絞ったが、それでも書ききれなかった。したがって<下>として「大国主命の墓」を追加することにした。次号にご期待ください。

<註釈一覧>

<註1> **高句麗墓の積石塚** 新羅の積石木槨墳に影響を与えたとされ、紀元前2世紀ごろ、桓仁（現中国・遼寧省）から集安にかけての地域で発達した。

<註2> 「方形貼石墓概論」肥後弘幸著



<註3> 鳥取県埋蔵文化財センターホームページのURLは下記の通り。

(<https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/76301/yosumi.pdf>) から抽出加工したものの。

<註4> 弥生時代の編年方式 一般によくつかわれるのが弥生時代をI期からVI期に分ける考え方で、IV期は中期後葉、V期が後期、VI期は終末期でほぼ庄内式に併行するとされる。可能な場合は、V期は3つに、VI期は2つに分けるばあいもある。

プロフィール

いしあい・ろくろう NPO 法人福岡歴史研究会理事 石合 六郎 昭和 20 年 4



月、岡山県倉敷市児島田の口に生まれる。児島高校を経て立教大学文学部史学科を昭和 44 年に卒業。同年山陽新聞社入社、政治部、整理部、東京支社編集部などを経て、システム部署で新聞データベース構築に携わり、平成 17 年システム局次長で退職。同社嘱託を経て、川崎医科大学に勤務、同 19 年退職する。

東京支社時代、取材で同郷の安本美典氏と知り合い、邪馬台国九州説に共感、その後、九州の遺跡探訪中に福岡歴史研究会の大谷賢二理事長と出会い、同研究会古代史講座を立ち上げ、講師も務める。同会の古代史イベントを担当、歴史ツアーなどを企画、運営。地元吉備にも興味を持ち、伝承を調査研究。現在、同研究会副理事長。現住所は岡山市中区。

<出版物のお知らせ>

「吉備津彦命と温羅」 AMAZON で販売中

(ペーパーバック=1200 円 Kindle 版=デジタル 650 円)



吉備の古代史シリーズ 執筆記事一覧

第 1 回 二人の天皇が行幸された谷 (2020.07)

第 2 回 巨大古墳を考える (上) 吉備津彦の時代 (4 世紀) (2020.10)

第 3 回 巨大古墳を考える (下) 御友別の時代 (5 世紀) (2021.01)

第 4 回 温羅伝説を考える (上) —こんな物語だった (2021.04)

第 5 回 温羅伝説を考える (中) —成立過程とその起原「神仏習合の中から誕生」
(2021.07)

第 6 回 温羅伝説を考える (下) —桃太郎伝説の誕生「日本人の心映す鏡」
(2021.10)

第 7 回 素戔嗚尊の剣 (上) —吉備のどこにあった? 「十握の剣流転の真実」
(2022.01)

第8回 素戔鳴尊の剣（下）—どんな形だったか？「邪馬台国時代の北部九州と類似」（2022.04）

第9回 造山古墳の被葬者を探る（上）「吉備海部の娘・黒日売命か」（2023.07）

第10回 造山古墳の被葬者を探る（中）「吉備海部は備中にいた」（2023.10）

第11回 造山古墳の被葬者を探る（下）「謎を解く肥後系古墳と血脈」（2024.01）

第12回 播磨の戦いはあった!!—片山神社伝承が証明「稚武彦は再度播磨へ」

（2024.04）第13回 卑弥呼の剣と楯築の王「日本海ルートでつながる筑紫と吉備」（2024.07）

第14回 吉備と出雲<上>「大国主命の祭祀受け入れる」（2024.10）

後期・邪馬台国の時代⑭

出雲の銅剣・銅矛・銅戈

河村哲夫

銅鐸についてのまとめ

前号において、出雲の加茂岩倉遺跡から出土した39個の銅鐸は、北部九州において製造された可能性が高いことについて述べた。

しかも、39個のうち27個の銅鐸がおなじ鋳型で造られた——「同範」の銅鐸である。

下表のとおり、荒神谷遺跡から出土した6号鐸もまた、淡路島(兵庫県)の松帆5号銅鐸と同範とされている。

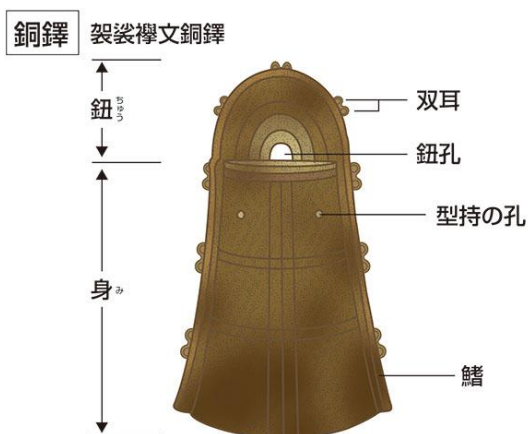
加茂岩倉・荒神谷遺跡出土銅鐸		他地域に所在する同範銅鐸
加茂岩倉銅鐸	1号鐸・26号鐸	
	3号鐸・30号鐸	
	4号鐸・7号鐸・19号鐸・22号鐸	太田黒田銅鐸(和歌山県)
	5号鐸	気比2号銅鐸(兵庫県)
	6号鐸・9号鐸	辰馬419号銅鐸
	11号鐸	川島神後銅鐸(徳島県)
	13号鐸	下坂銅鐸(鳥取県)
	14号鐸・33号鐸	
	15号鐸	伝淡路国銅鐸(兵庫県・本興寺蔵)
	16号鐸	岐阜県銅鐸(所在不明)
	17号鐸	上牧銅鐸(奈良県)
	21号鐸	気比4号銅鐸(兵庫県)・伝陶器銅鐸(大阪府)・伝福井銅鐸(明大1号銅鐸)
	24号鐸・38号鐸・39号鐸	
	27号鐸	松帆3号銅鐸(兵庫県)
	31号鐸・32号鐸・34号鐸	上屋敷銅鐸(鳥取県)・桜ヶ丘3号銅鐸(兵庫県)
	36号鐸	念仏塚銅鐸(岡山県)
荒神谷銅鐸	2号鐸	梅ヶ畑4号銅鐸(京都府)
	3号鐸	出土地不明銅鐸2個
	6号鐸	松帆5号銅鐸(兵庫県)

加茂岩倉銅鐸・荒神谷銅鐸同範関係図


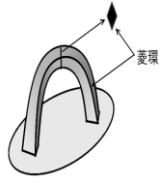
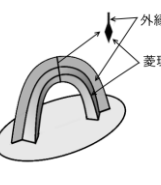
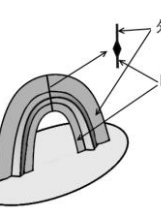
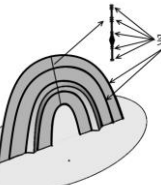
『加茂岩倉遺跡』2002 島根県教育委員会・加茂町教育委員会 に加筆
参考文献 『難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成』2007 難波洋三

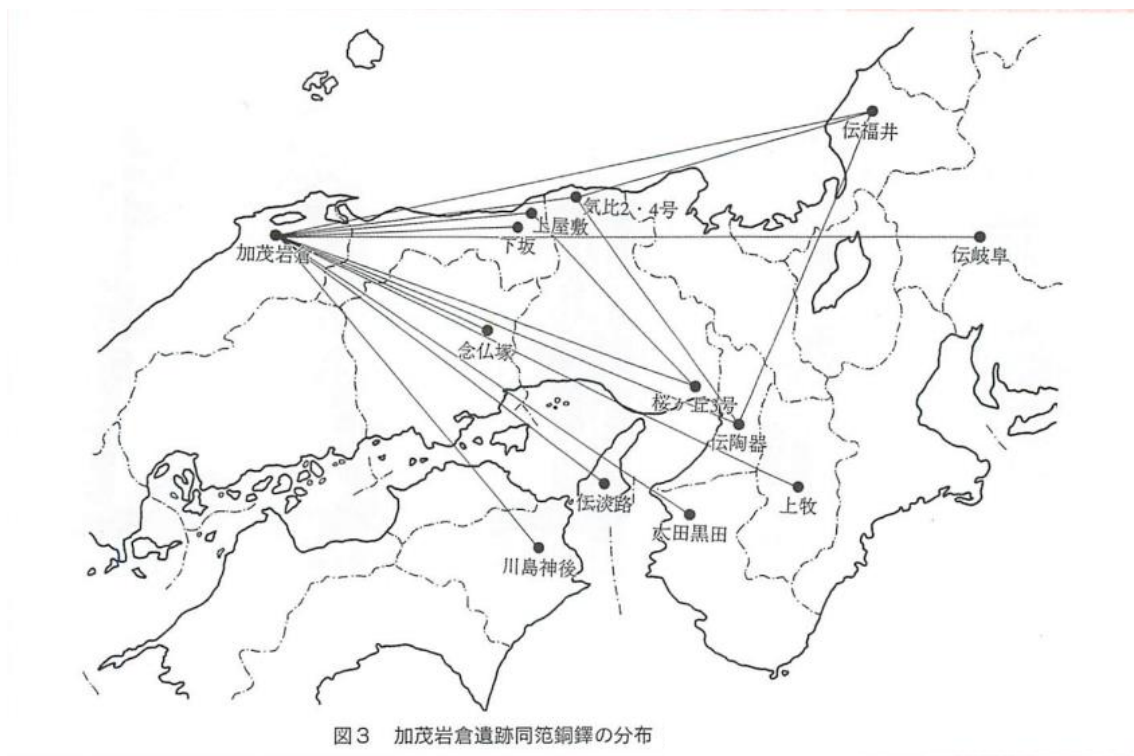
○加茂岩倉遺跡から出土した銅鐸の同範関係

NO	加茂岩倉遺跡から出土した銅鐸	計	他地域から出土した銅鐸	計
1	1号鐸・26号鐸(扁平鈕式)	2		
2	3号鐸・30号鐸(外縁付鈕1式)	2		
3	14号鐸・33号鐸(外縁付鈕1式)	2		
4	24号鐸・38号鐸・39号鐸 (外縁付鈕1式)	3		
計	4組	9個		
5	4号鐸・7号鐸・19号鐸・22号鐸 (外縁付鈕1式)	4	和歌山県太田黒田鐸	1
6	5号鐸(外縁付鈕2式)	1	気比2号鐸	1
7	6号鐸・9号鐸(外縁付鈕1式)	2	辰馬419号鐸	1
8	11号鐸(外縁付鈕2式)	1	川島神後鐸(徳島県)	1
9	13号鐸(外縁付鈕2式)	1	下坂鐸	1
10	15号鐸(外縁付鈕2式～扁平鈕式)	1	伝淡路鐸【本興寺蔵】(兵庫県)	1
11	16号鐸(外縁付鈕1式)	1	岐阜銅鐸【所在不明】	1
12	17号鐸(外縁付鈕1式)	1	上牧鐸(奈良県)	1
13	21号鐸(外縁付鈕2式)	1	気比4号鐸(兵庫県) 伝陶器鐸(大阪府) 伝福井明大1号鐸(福井県)	3
14	27号鐸(外縁付鈕1式)	1	松帆3号鐸(兵庫県)	1
15	31号鐸・32号鐸・34号鐸 (外縁付鈕2式)	3	上屋敷鐸(鳥取県) 桜ヶ丘3号鐸(兵庫県)	2
16	36号鐸(外縁付鈕1式)	1	念仏塚鐸(岡山県)	1
計	12組	18個		15個
合計	16組	27個		15個



加茂岩倉遺跡出土の 39 個の銅鐸の型式

型 式	個数	概 要
朝鮮式銅鐸	0	<ul style="list-style-type: none"> ・吊り手は円形 ・鱗がない ・身に文様なし 
菱環鈕式	0	<ul style="list-style-type: none"> ・吊り手の鈕の断面が菱形 ・鈕が逆 U 字型 
外縁付鈕1式	19	<ul style="list-style-type: none"> ・菱環の外側に薄板をつける 
外縁付鈕2式	9	
外縁付鈕2式～扁平鈕1式	2	<ul style="list-style-type: none"> ・釣り手の内側にも薄板 ・菱環自体が小型化 ・鈕全体が扁平化 
扁平鈕2式	6	
扁平鈕2式～突線鈕1式	3	<ul style="list-style-type: none"> ・突線と呼ばれる 2 本、3 本の太い区切り線 ・菱環はさらに小さく薄く 
計	39	



なお、出雲以外から出土した出雲と同範の銅鐸は、出雲から授与されたもの、あるいは出雲から伝搬したものと考えているが、矢印を逆に見て、近畿から出雲に下げ渡したとする近畿中心主義者が議論を混乱させているので注意が必要である。

たとえば、奈良文化財研究所の石橋茂登氏の『山陰地方の青銅器をめぐって』には、
 「伯耆の銅鐸はⅡ～Ⅲ式銅鐸が大半を占めている。泊銅鐸について近畿地方との同範関係が明らかとなっている一方、伝ではあるが九州産の福田型銅鐸がある点に、東西両方の青銅器が入っていた山陰地方の特色が現れているといえよう」

と、同範銅鐸が近畿からも流入しているかのような説明がなされている。

しかしながら、別の箇所では、

「畿内の集団が銅鐸を与えたために銅鐸が分布しているとして理解しようとするのは、やはり困難だと思われる」

と書くなど、その立場が揺れ動いているようにおもえる。

そして、かの佐原真氏の説(『祭りのカネ銅鐸』講談社)を紹介される。

「島根・鳥取県は、はじめ畿内の銅鐸、ついで北部九州の銅矛と銅鐸をもち、畿内・北部九州双方の祭器をあわせもって、両方に顔を立てた」

「東西の祭器に対抗して出雲は自前の象徴として大量の銅剣を作ったが、各地に配るには及ばず、一箇所に埋納したのが荒神谷遺跡である」

「そして畿内・北部九州は自らの象徴である祭器を所有させることによって、自らとのつながりを明らかにさせることを意図した」

この佐原眞氏の立論に対して、石橋茂登氏は、

「近畿や北部九州勢力に属することの象徴として青銅器を理解しようとするれば、荒神谷遺跡は北部九州(銅矛)にも近畿(銅鐸)にも、そして出雲という第三の勢力(銅劍)にも属していることになり、おかしな話となるだろう」

「どうして埋めたのかという理由は明らかにしがたいが、すくなくとも青銅器は服属の証といった意味をもっておらず、それが故に古墳時代には存続しなかったと考えるほうが理解しやすいであろう。出雲では、旧石器時代・縄文時代からすでに、東北地方とも九州とも交流していたことが、遺物から明らかとなっている。日本海側の各地は、時代を超えて連綿と広域の交流を続けていた。銅鐸でも、福田型とよばれる横帯文銅鐸は、福岡市赤穂浦遺跡でみつかった鑄型に鹿と鉤の絵があらわされており、常松幹男によればこのモチーフは北部九州の甕棺の線刻画に起源し、瀬戸内地域に分布する平形銅劍にも受け継がれた。福田型である伝出雲出土と伝伯耆出土の横帯文銅鐸も北部九州産と考えられ、製品が移動してきただけでなく、福田型銅鐸を受容した思想的背景には北部九州と共通する価値観が存在したことを想定してよいだろう」

とまとめられている。

ところが、その一方で石橋茂登氏の論は揺れ続け、

「特に青銅器については、出雲の持つ地理的特性によって、西からの文物も東からの文物も集積され、出雲独自の文物も多量に製作されていたのだと、出雲の主体的立場を重視して考えるべきである」

と、「東からの文物」という表現で近畿の顔を立てられる。

筆者としては、弥生時代までの奈良県を中心とした領域は、残念ながら、歴史の主役ではなく、脇役に過ぎないとおもっている。主役になるのは、大和王権成立以降である。

あえていえば、ニギハヤヒの東遷以降であり、それ以前は出雲の勢力下にあったとみている。

しかも、奈良出土の青銅器の貧弱さをおもえば、兵庫・大阪・滋賀・岡山あたりにくらべたら、はるかに下位の国である。

×印の意味

加茂岩倉遺跡の銅鐸 39 個のうち 13 個、荒神谷遺跡の銅劍 358 本のうち 344 本に、鑄造後に×印が刻印されている。

そして、加茂岩倉遺跡の 27 号鐸(外縁付鈕 1 式)と同範とされる淡路島(兵庫県)の松帆 3 号鐸にも×印が付されている。

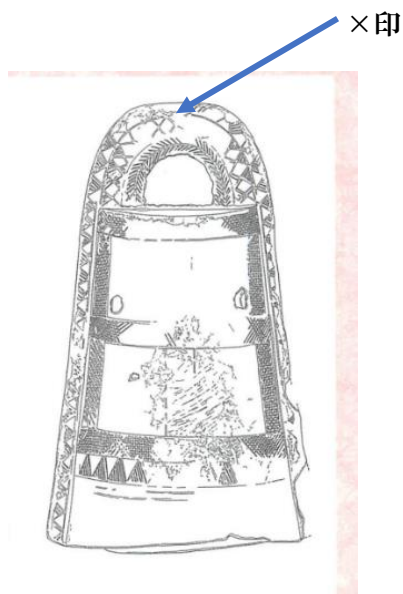
いったい誰が×印を付したのか。所有者か製造者か。

そもそも、×印には、どういう意味があるのか。

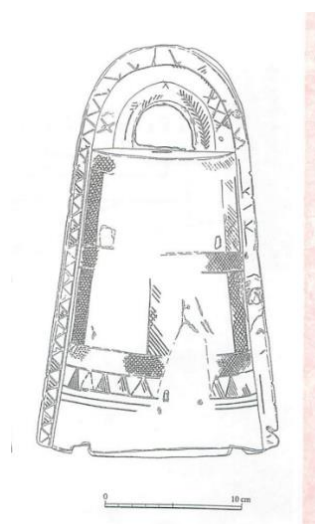
遺跡	青銅器	×印が付されたもの	備考
加茂岩倉遺跡	銅鐸 39 個	13 個	
荒神谷遺跡	銅剣 358 本	344 本	
松帆銅鐸	銅鐸 7 個	1 個	松帆3号銅鐸

松帆銅鐸(兵庫県淡路島)

	銅 鐸			舌	備 考
	形式	文様	高さcm		
1号銅鐸	菱環鈕2式	横帯文	26.6	○	
2号銅鐸	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	22.4	○	1号内に入れ子。4号銅鐸と同范 他に同范銅鐸あり
3号銅鐸	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	31.5	○	×印あり。加茂岩倉 27 号鐸と同范
4号銅鐸	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	約 22.6	○	3号内に入れ子。2号銅鐸と同范 他に同范銅鐸あり。舌が7号舌と同范
5号銅鐸	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	23.8	○	舌は別の銅鐸のもの可能性。 荒神谷 6 号鐸と同范
6号銅鐸	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	31.8	○	
7号銅鐸	外縁付鈕1式	4区袈裟禪文	約 21.1	○	6号内に入れ子。舌が4号舌と同范



淡路島(兵庫県)の松帆 3 号鐸



加茂岩倉遺跡の 27 号鐸

現代の製品であれば、ほとんどすべてに製造者のマークが施される。

日本でいえば、刀剣類や焼物などに銘が刻まれることがあるが、すべて製造者を示す。

したがって、製造者が付したマークとみるのが自然であろうが、それを裏づける証拠もない。

しかしながら、荒神谷遺跡の344本というのは、当時としてきわめて大量の発注である。一つの工房で、短期間に対応できる量ではない。

したがって、×印は複数の工房で生産された製品が出雲向けであることを示すためのマーク(印)であった可能性が高いといえよう。

淡路島の銅鐸に×印が刻印されているのは、出雲の大王から淡路島の王に分与されたことを示すものといえよう。

×印に関する説

説	説明	×印の意味	評価
所有者刻印説	所有者の所有物であることを示すために所有者が刻印	所有者を表わす印	△
製造者刻印説	製造者が製造元を示すために刻印	製造元を示す印	○
	製造者が出雲向けの製品であることを示すために刻印	製造元による発注者(所有者)向けの製品であることを印	◎

なお、同範銅鐸の分布図をみても、銅鐸文化が出雲から日本海側の福井方面および近畿・瀬戸内方面に広がったことは明らかである。近畿方面から出雲に広がったのではない。ざっくりいえば、大国主命の活動領域とも重なっている。



銅鐸の埋納時期

以上をまとめていえば、第一期の銅鐸文化は北部九州で始まり、第二期の銅鐸文化は出雲で勃興し、近畿や瀬戸内地方にも波及した。

やがて、第三期の銅鐸文化が近畿・東海地方で盛行した。

それをまとめたのが、次の表である。

	製造時期	銅鐸の種別	使用地域	製造地	埋納の時期
第一期	BC.3~BC. 2	朝鮮式銅鐸 仿製小銅鐸	北部九州	朝鮮 北部九州	
第二期	BC.1~AD. 2	出雲式銅鐸 (菱環鈕式・扁平鈕式 ・外縁付鈕式)	出雲 近畿 瀬戸内	北部九州	出雲の国譲り 260 年ごろ
第三期	AD.3~AD.4	近畿式銅鐸・三遠式銅鐸 (突線鈕式)	近畿 東海	近畿 東海	神武東遷 300 年ごろ

このような推移は、決して自然発生的な先験的な現象ではない。

出雲式銅鐸も、近畿式銅鐸・三遠式銅鐸も、その当時の為政者の意志をあらわしている。

出雲式銅鐸は、イザナミからスサノオと大国主命に至る出雲王朝において採用された祭祀用具である——とみている。

近畿式・三遠式銅鐸は、ずっと先のほうで述べるように、出雲の残存勢力や近畿に進出したニギハヤヒ勢力によって採用された祭祀用具である。

しかしながら、前者は「出雲の国譲り」によって、後者は「神武東遷」によって、銅鐸はすべて地中に埋もれてしまった。

出雲式銅鐸の衰退は、九州の高天原勢力による出雲篡奪の結果であり、近畿式・三遠式銅鐸の衰退は、日向を含めた九州勢力による近畿地方への進出の結果である。

このことを終始一貫主張しつづけてこられたのは、安本美典氏である。

安本美典氏は、『邪馬台国と出雲神話』(勉誠出版・2004)のなかで、

「加茂岩倉遺跡に銅鐸が地中に埋められたのは、おそらくは、西暦二六〇年前後、近畿式銅鐸や三遠式銅鐸が地中に埋められたのは、西暦二七〇～三〇〇年ごろであろうと考える」

と述べられている。

『古事記』『日本書紀』などに記された文献的情報と考古学的情報を総合的に考察すれば、このような結論にならざるを得ない。

日本最初の青銅器

日本に最初にもたらされた青銅器は、今川遺跡(福岡県福津市)の銅鏃と銅鑿(のみ)といわれている。同時に出土した今川Ⅱ式の土器は、稲作が開始された時期の板付Ⅰ式土器(前期)の時代に相当するから、紀元前3世紀ごろの遺跡ということになる。

炭素十四年代測定法に基づき、紀元前 8 世紀とみる向きもあるが、本稿においては、基本的に土器編年に基づく古典的な年代論を採用しているため、その説は採らない。



銅鏃



銅鏃(のみ)

本格的な青銅器の伝来は、紀元前 2 世紀(弥生前期末)の細形の銅劍・銅矛・銅戈・銅鏃などである。北部九州の玄界灘沿岸部のカメ棺から出土する。

そして、北部九州において、青銅器の生産が開始される。

当初、朝鮮半島から日本へもたらされた銅劍・銅矛・銅戈などの青銅武器はいずれも実戦用の武器であり、鋭利な細形であった。

しかしながら、細形から、中細形、中広形、広形(銅劍は平形)へと形態変化しつつ大型化していく。すなわち、実用品から祭祀道具へと変化していった。

そして、弥生時代の終幕とともに、青銅の武器は姿を消す。

出雲の銅劍・銅矛・銅戈

下表は、弥生時代の出雲における青銅器の出土状況である。

	出土地	銅鐸	銅劍	銅矛	銅戈
出雲	①加茂町 加茂岩倉遺跡	39			
	②斐川町 神庭荒神谷遺跡	6	358	16	
	③鹿島町 志谷奥遺跡	2	6		
	④松江市竹矢町		1		
	⑤(伝)八雲村熊野	1			
	⑥(伝)出雲地方	1			
	⑦横田町 横田八幡宮		1		
	⑧(伝)木次町	1			
	⑨大社町 真名井遺跡				1
	⑩松江市 西川津遺跡	1			
石見	⑪石見町 中野飯屋	2			
	⑫浜田市上府町城山	2			
	⑬匹見町 水田ノ上遺跡				1
隠岐	⑭海士町 竹田遺跡		1		
	⑮(伝)島根県		1		
	合計	55	371	16	2

()は推定

(1998年7月1日現在)

●島根県の青銅器出土一覧表

第2表 島根県内の弥生時代青銅器一覽(荒神谷遺跡を除く)

出土地	種類	型式	長さ 高さ (cm)	所蔵・保管	備考	文献 (註に同じ)
八束郡鹿島町志谷奥遺跡	劍	中細C	53.9	文化庁 (風土記の丘保管)		(22)
	〃	〃	50.8	〃		
	〃	〃	50.7	〃		
	〃	〃	50.5	〃		
	〃	〃	50.4	〃		
	〃	〃	49.3	〃		
	鐸	外縁付 鈕I式	現30.7	〃	4区袈裟襷文	
〃	扁平鈕	〃20.8	〃	〃		
松江市竹矢町平浜八幡宮藏品	劍	細形IIb	〃26.5	平浜八幡宮 (風土記の丘保管)		(25)
仁多郡横田町横田八幡宮藏品	〃	中細C	50.9	横田八幡宮 (風土記の丘保管)		〃
簸川郡大社町命主神社境内	戈	中細b	31.2	出雲大社	硬玉勾玉共伴	〃
(伝)簸川郡大社町出雲大社境内	矛	広形		長野県護国神社 (松本市日本民俗博物館出陳)		(36)
(伝)島根県	劍	細形II	31.0	風土記の丘保管		
(伝)八束郡八雲村熊野	鐸	扁平鈕	20.5	熊野大社 (風土記の丘保管)		(36)
(伝)大原郡木次町	〃	外縁付 鈕	20.6			(36)・(37)
(伝)出雲国	〃	外縁付 鈕I式	22.3	木幡家	邪視文	(25)
隠岐郡海士町竹田遺跡	劍	中細b	現32.0	隠岐島前教育委員会 (風土記の丘保管)	九重式土器を伴う溝	(36)
邑智郡石見町中野仮屋	鐸	扁平鈕	47.3	東京国立博物館	全面1区流水文	(18)
	〃	突線鈕 I式	42.5	〃	6区袈裟襷文	
浜田市上府町	〃	扁平鈕		〃	4区袈裟襷文	(38)
	〃	〃	26.5	〃	4区袈裟襷文	
江津市後地町波来浜遺跡	鐵		6.4	江津市教育委員会 (風土記の丘保管)	B区1号石囲い墓	(39)
	〃		4.9	〃	〃	
	〃		4.4	〃	B区2号石囲い墓第3主体	
	〃		4.0	〃	〃	
	〃		5.4	〃	B区2号石囲い墓第4主体	
〃		6.4	〃			

『荒神谷遺跡～銅劍発掘調査概報～』(島根県教育委員会・1985)

荒神谷遺跡の銅剣と銅矛

すでに述べたとおり、1983年(昭和58)、広域農道(出雲ロマン街道)の建設に伴い遺跡調査が行われたのがきっかけであった。調査員が古墳時代の須恵器の破片を発見したことから、発掘調査が開始された。



銅剣：A列 34本 + B列 111本 + C列 120本 + D列 93本 = 計 358本

この結果、銅剣 358本、銅矛 16本、銅鐸 6個が出土した。

銅剣 358本は、一か所からの出土数としては日本最多の記録で、戦後、『古事記』『日本書紀』の出雲神話を軽んじてきた古代史・考古学界に大きな衝撃を与えた。

銅剣の出土状況

荒神谷遺跡の銅剣 358本は、丘陵の斜面に作られた上下2段の下の段に、刃を起こした状態で4列に並べられて埋められていた。

すべて中細形c類の銅剣で、長さ50cm前後、重さ約500gであった。

弥生時代中期後半——すなわち、古典的な年代論でいえば紀元前後の作とみられよう。

形式が単一であり、同一の地域で作られたことは確実である。その圧倒的な数から「出雲型銅剣」とも呼ばれる。

なお、すでに述べたとおり、344本の銅剣の基部には、鑄造後に工具で×印が刻まれている。

加茂岩倉遺跡の銅鐸にも刻まれており、両遺跡の青銅器が同一の生産集団によって製造された可能性が高いことについても、すでに述べたとおりである。

第3表 中細銅劍出土地名表(荒神谷遺跡を除く)

No.	出土地名	型式	数	遺構	備考
1	福岡県筑紫野市二日市峰	b	1	甕 棺	現在せず
2	〃 田川市楠上の原	a	1	箱式石棺	
3	大分県大分市浜283	b	4		鋒重ね
4	伝大分県	b	1		茎に紐のあと
5	広島県尾道市久山田町大峰916大峰山	b	2	石 の 下	関孔
6	島根県仁多郡横田町横田八幡宮境内	c	1		
7	〃 隠岐郡海士町竹田遺跡	b	1	溝 内 ?	
8	〃 八束郡鹿島町志谷奥遺跡	c	6	埋 納 塚	外縁付鈕 I 式扁平鈕式銅鐸各 1
9	鳥取県東伯郡東伯町八橋田越イヅチ頭	c	4	箱式石箱 の 下	(小円墳)
10	〃 〃	c	1		
11	岡山県久米郡久米南町別所勝負田	?	1		尾根上
12	愛媛県周桑郡丹原町願蓮寺扇田	a	1		関孔
13	香川県観音寺市粟井町藤ノ谷	a	1	石 積 下	細形 I 2 が伴出
14	〃 普通寺市普通寺町瓦谷	b	1		} 平形 I 2、変形 1、中細矛伴出
		c	3		
15	高知県高岡郡葉山村白雲神社蔵品	b	1		所在不明
16	〃 〃 〃 三島 〃	a	1		〃 細形 II 1 あり
17	〃 須崎市新莊波介	a	2		関孔
		c	1		
18	〃 吾川郡伊野町天神溝田	a	1		中広戈 1 伴出
19	兵庫県佐用郡南光町平松五郎丸	b	1	積 石 底	
20	〃 三木市別所町正法寺	c	1		関部のみ、関孔あり
21	〃 三原郡西淡町古津路	b	13		

『荒神谷遺跡～銅劍発掘調査概報～』(島根県教育委員会・1985)



細形銅劍



中細形銅劍



中広形銅劍



平形銅劍

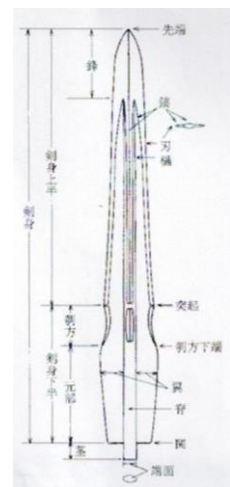


表1 銅剣の型式分類

細形	全長20～30cm	I	しのぎ くりかた 鑄が削方まで
		II	しのぎ まち なかこ 鑄が関や茎までのびる
中細	剣身長32～52cm 扁平板状化削方部以下の幅がひろがる削方部の背上の研ぎが次第に離れる。 葉部縁辺は面取りされない。	a	剣身長32～37cm
		b	剣身長40～46cm
		c	剣身長48～54cm
中広	しめん ひ くりかたぶ 匙面状の樋が生じる。削方部の付刃と対応する背上の研ぎ出しが、いずれもなくなる長大化と身幅の増大傾向は頂点にたつする。		
平形	くりかたぶ とげ 削方部消滅し棘状突起をもつ	I	しのぎ 背上に鑄あり、先膨らみにならない
		II	しのぎ 背上に鑄なし、先膨らみになる

- (注) ①細形の型式・形式名は朝鮮半島で使用されているもので、仿製(国産)青銅器と区別する意味で常用されている。
 ②細形の型式分類は下條信行氏の論考「弥生時代における青銅器の舶載」(『稲と青銅と鉄』日本書籍・1986年)による。
 ③仿製青銅武器の型式分類は岩永省三氏の論考「弥生時代青銅器型式分類編年再考」(『九州考古学』No 55・1980年)による。



荒神谷遺跡出土の銅劍

下表のとおり、荒神谷出土の銅劍は、中細形 c 類に属する。

ちなみに、昭和 48 年(1973)に島根半島中央部の志谷奥遺跡から出土した 6 本の銅劍もまた、中細形 c 類であった。

	概 要
細形	<ul style="list-style-type: none"> •中国東北地方の遼寧式銅劍が変化したもの •節状部と刃方部を持つ •<u>劍身長は 32 cm以下</u> •大部分は朝鮮製。ただし弥生中期前半には日本でも製作(<u>志賀島の鑄型</u>) •<u>須玖岡本遺跡や大谷遺跡からも鑄型が出土</u> •<u>唐津・糸島・福岡・佐賀のカメ棺より出土</u>、中国・四国からの出土は少ない。 •これまで 100 本以上が出土
中細形	<ul style="list-style-type: none"> •中期前半には北部九州での銅劍の生産が本格化、その一部が中国・四国地方に流入し、北部九州の古式第一形式をもとに、瀬戸内地方で中細形銅劍が流通。外見上では細形銅劍の形態をとどめているが、劍身長は 32~52 cmと増大し、扁平化していく。 a 類・劍身長 32~37 cm【<u>佐賀県姉遺跡・兵庫県田熊遺跡から鑄型出土</u>】 b 類・劍身長 40~46 cm【<u>大阪府鬼虎川遺跡から鑄型出土(ただし、型式については諸説あり)</u>】 c 類・劍身長 48~54 cm【<u>荒神谷遺跡出土の 358 本の銅劍</u>】
中広形	<ul style="list-style-type: none"> •長大化と幅広化が頂点に達する •福岡県と四国に分布 •<u>福岡市東区八田から鑄型出土</u>
平形	<ul style="list-style-type: none"> •I 式・背上に鑄(小高くなった稜)があるが、先膨らみにならない。 •II 式・背上に鑄がないが、先膨らみになる。 •出土総数は 110 本以上、2 遺跡で銅鐸を伴う •中国・四国の瀬戸内海沿岸地域に分布(瀬戸内海航海用の祭祀具か) •九州では大分県浜遺跡と福岡県津屋崎遺跡から出土 •鑄型は出土していないが、幾何学文様や動物の絵画が扁平紐式銅鐸と類似しているため、銅鐸鑄造職人が関与している可能性あり

荒神谷遺跡出土の銅矛

	中細形	中広形	研ぎ分け	長さ cm
1号	○a			(67.5)
2号	○a			69.6
3号		○a		74.9
4号		○b	○	(82.3)
5号		○b	○	83.5
6号		○b	○	79.9
7号		○b	○	82.1
8号		○b		(79.4)
9号		○b		83.1
10号		○		83.1
11号		○b		84.1
12号		○b		74.6
13号		○b	○	82.3
14号		○a	○	71.4
15号		○b	○	83.6
16号		○b	○	78.8
計	2	14	8	

()は一部欠損

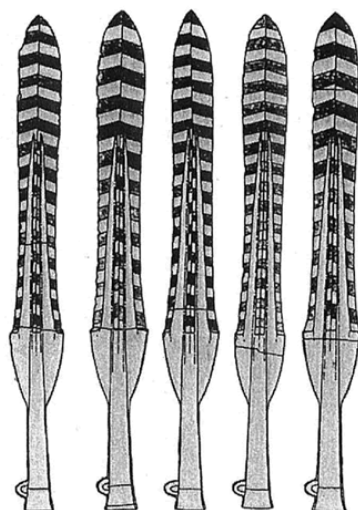


図 佐賀県みやき町検見谷遺跡出土の「綾杉状の研ぎ分け文様」をもつ銅矛
けみたに
 (藤瀬禎博著『九州の銅鐸工房 安永田遺跡』[新泉社、2016年刊])による。

概 要	
細形	<ul style="list-style-type: none"> ・長さ 16～46 cm ・I 式・長さ 16.2～22.4 cm。柄を挿入する袋部の末端に 3 条の隆起帯がつき、これに環耳がつく。耳の孔は最も上の隆起帯の上に位置し、上下橋は隆起帯と柄にまたがる。 ・II 式・37～46 cm。一条の節帯とこの節帯に接する環耳を持つ。
中細形	<ul style="list-style-type: none"> ・細形 II 式が長大化したもの。全長 50～69 cm ・幅の大小と長さによって、a 類、b 類、c 類に再区分されている。 ・<u>福岡・佐賀・熊本、中国・四国の瀬戸内海沿岸部に分布</u> ・<u>荒神谷遺跡から 2 本出土(中細形 a 類)</u> ・<u>鋳型は大谷遺跡(春日市出土)</u>
中広形	<ul style="list-style-type: none"> ・全長 79 cm 以上。幅の大小によって a 類、b 類の 2 種に区分される。 ・<u>筑後川上流の大分県に至る区域と四国地方および対馬に分布</u> ・<u>荒神谷遺跡から 14 本出土(a 類 2 本、b 類 12 本) 8 本の銅矛に綾杉状の砥ぎ分け</u> ・<u>鋳型は須玖岡本遺跡(春日市)、大谷遺跡(春日市)、赤井手遺跡(春日市)、安永田遺跡(鳥栖市)から出土</u>
広形	<ul style="list-style-type: none"> ・さらに幅が広がる。幅の大小によって a、b の 2 種に区分される。 ・<u>遠賀川流域、福岡県・大分県地域、四国に分布</u> ・<u>鋳型は高宮(福岡市)、五十川(福岡市)、板付(福岡市)、井尻(福岡市)、須玖岡本(春日市)、赤井手遺跡(春日市)、三雲(糸島市)、柏崎(唐津市)から出土</u> ・<u>北部九州・対馬・四国の瀬戸内海地方から出土するが、特に対馬から大量に出土している。</u>

銅戈

銅戈については、荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡いずれからも出土していないので、江戸時代に出雲大社の境外摂社「命主社(いのちぬしのやしろ)」(出雲市大社町杵築東 195)の真名井遺跡から出土した銅戈について検証してみよう。

寛文 5 年(1665)の出雲大社御造営にあたり、命主社の裏の大石を石材として切り出したところ、下から中細形の銅戈とヒスイの勾玉が発見された。

銅戈は中細形 b 類で、茎(なかご)が短く、身に対し斜めに関(まち)がついているタイプであった。

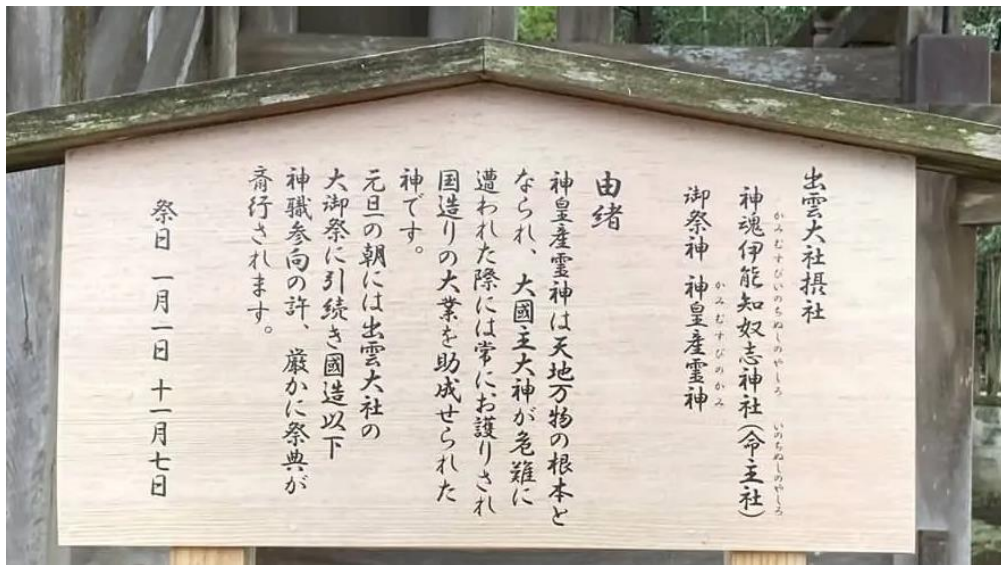
ヒスイの勾玉は、もちろん新潟県糸魚川産である。

2 つの遺物は、昭和 28 年(1953)に重要文化財に指定され、出雲大社の宝物殿に展示されている。

島根県立古代出雲歴史博物館(出雲市大社町杵築東 99-4)にはレプリカが展示されている。



祭神はカミムスビ



中細形銅戈
 (長さ 33.7 cm、幅 10.3 cm)



ヒスイの勾玉
 (大縦 33 mm × 幅 22.5 mm × 厚み 11 mm)

	概 要
細形	<ul style="list-style-type: none"> ・A式・・・併行した樋がある。 ・B式・・・樋が先端で合わさる ・a・・・大きな基と厚い身 ・b・・・小さな基と薄い身 ・岡山県の一例を除き、<u>ほとんど北部九州の玄界灘沿岸地域とその隣接地域から出土</u> ・熊本県と大分県にも多少分布
中細形	<ul style="list-style-type: none"> ・樋のない鋒部が長くなり、先膨らみになる。長さにより、a類、b類、c類に区分 ・分布地域が拡大し、筑後川流域以南に広がり、その量も多い。 ・<u>鑄型は八田(福岡)、永岡(筑紫野市)、久保長崎(古賀市)、立岩(飯塚市)・櫛木(いちのき・佐賀市)から出土</u> ・真名井遺跡の銅戈(出雲市) 中細形 b類
中広形	<ul style="list-style-type: none"> ・長大化して 35 cm前後となる。 ・須玖(春日市)で 27 口、原口(春日市)で 48 口出土 ・遠賀川をさかのぼり、大分県へ広がる。 ・<u>鑄型は春日市の大谷・大南・須玖、福岡市の板付・那珂八幡、東小田峯(筑前町)、吉木(岡垣町)、西石動(吉野ヶ里町)から出土</u>
広形	<ul style="list-style-type: none"> ・50 cm前後 ・<u>鑄型は福岡市の高宮・多々良、大南(春日市)、三雲(糸島市)から出土</u> ・製品の出土は極端に少ない。
大阪湾形	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪湾岸地域 ・北部九州の銅戈と細かな差異がある。 ・樋の先端が離れ、樋に複合鋸歯文や斜格子を施す特徴 ・製品のみならず、<u>鑄型も東奈良遺跡(大阪府茨木市)や瓜生堂遺跡(東大阪市)から出土</u> ・<u>東奈良遺跡からは銅戈の鑄型とともに銅鐸の鑄型も出土</u> ・大阪府、兵庫県、和歌山県から限定的に出土



第1巻の「奴国の時代」でも紹介したが、東京大学教授後藤直氏の『弥生時代の青銅器生産—九州—』によれば、九州における青銅器鑄型の出土状況は次のとおりとされている。

【福岡+春日地域】、すなわち旧奴国の領域が圧倒的1位であり、2位の【佐賀+鳥栖地域】を大きく引き離している。

弥生時代の青銅器生産地—九州—

表2 地域ごとの鑄型個数（九州）

地 域	細形						細形 / 中細形	中細形																								
	劍		矛		戈			劍		矛		矛/戈		戈				戈か 中細形か														
	細形か	劍か	I	II a	細別不明	II b		細別不明	a	a?	細別不明	劍か	a	a/b	b	b/c	c	細別不明	中細形か	矛か	中細形か	a	a/b	b	b/c	c	中細形か	中細形か				
福岡	1	1							1			1	1	1	1	2	2		4	1	1	1	1	1	2	4		1				
春日	6	3																														
唐津																																
糸島																																
早良	1																										6					
粕屋																												1				
筑紫																																
遠賀																																
鳥栖	5	1																										1				
佐賀	5	2																										2				
熊本																																
合計	18	2	5	1	3	1	3	2	1	1	1	2	1	2	1	1	5	1	3	2	1	4	1	2	1	2	2	7	5	13	1	1

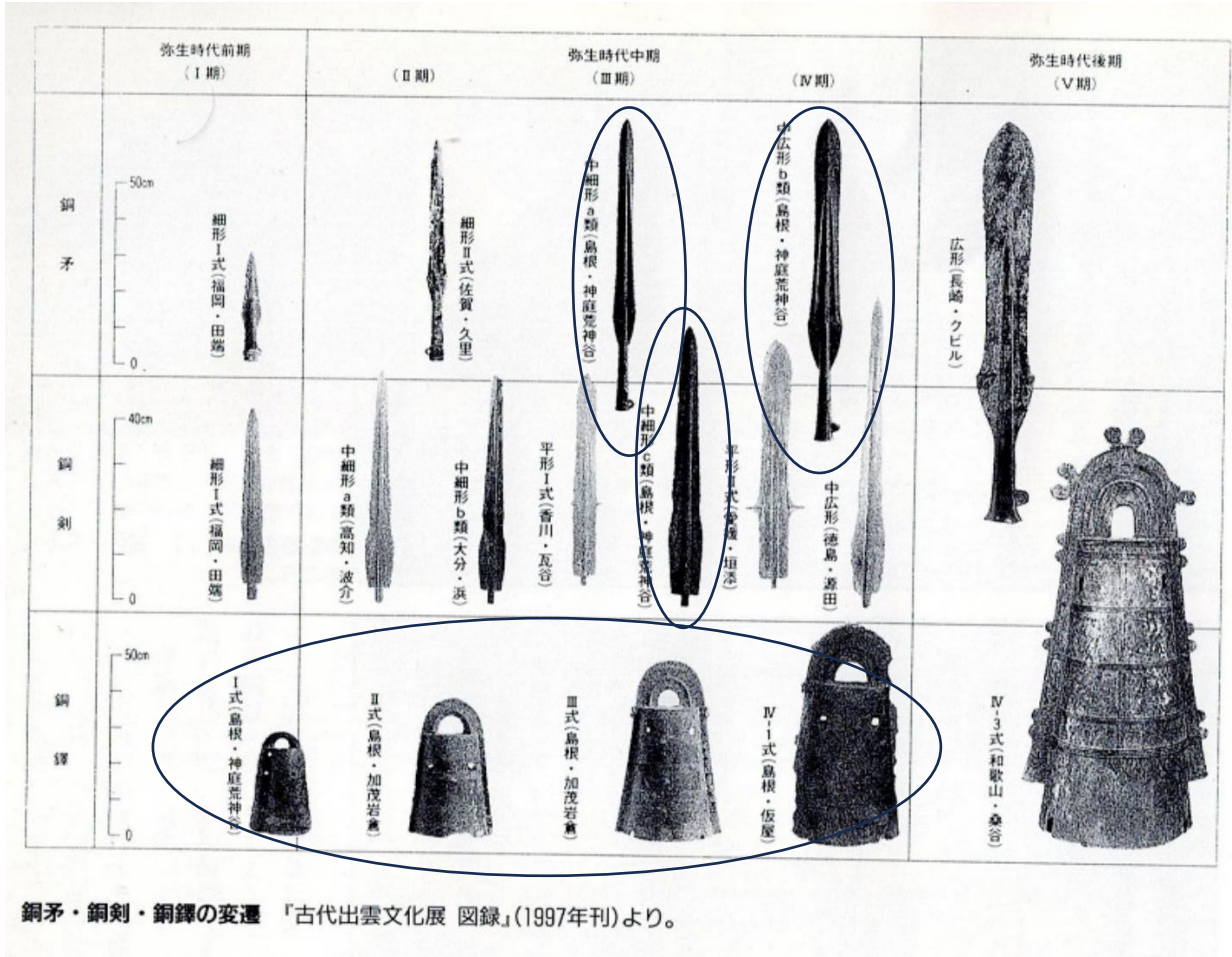
地 域	中細形		中広形						中広/広形						深掘式劍		型式不明				武器										
	矛	戈	矛		矛/戈		戈		矛		矛/戈		戈		劍か	矛か	矛/戈	戈か	戈か	武器	武器										
	a/b	b/c	b/c	c/d	細別不明	中広形か	矛か	中広形か	a	b	細別不明	広形か	矛/戈	a	b	深掘式劍	劍か	矛か	矛/戈	戈か	武器	武器									
福岡			3					3	1	6	3			1	1			1	1			2	3								
春日	2	5	1	2	1	1	2	8	1	3	2	1	2	1	2	1	1	3	3	10	2	3	11	8							
唐津																															
糸島																							2								
早良	1																														
粕屋			1																				2								
筑紫																															
遠賀																															
鳥栖																							1								
佐賀			2	1																			2								
熊本																															
合計	1	2	6	1	1	7	1	1	1	2	1	13	2	3	4	8	11	1	2	2	1	6	1	7	4	12	2	3	3	14	15

地 域	その										他の				武器合計	その他合計(A)	その他合計(B)	型個数(A)+(B)	鑄型枚数	
	鎧	棒状品	小銅鐸	銅外縁付鈕	横符文	鐸不明	銅鏡	銅劍	巴形銅器	小形做製鏡	十字形金具	筒状品	異形品	不明品						不明品
福岡							4		1					2	5	38	14	52	40	
春日		1	4	2			65	1	1	5			1	36	7	112	123	235	149	
唐津																2	0	2	1	
糸島															1	6	1	7	7	
早良									2							8	3	11	9	
粕屋						1		3								10	4	14	11	
筑紫							4	1		2						10	9	19	13	
遠賀									2							0	5	5	2	
鳥栖	1		2													1	1	2	2	
佐賀		3			1	5										3	4	7	7	
熊本	1	1														22	12	34	25	
合計	2	5	6	2	1	6	1	73	5	2	11	2	1	5	45	14	235	181	416	282

* 数字は鑄型に彫り込んだ型の数
鑄型枚数は末尾

出雲から出土した青銅器

弥生時代中期の古代日本においては、北部九州において奴国が盟主であった BC.2 世紀から AD.2 世紀ごろに製造された青銅器が主流である。したがって、出雲の青銅器についても、奴国など北部九州から流入したとみるのが最も自然である。



区分	出雲出土	説明	産地
銅剣	中細形 c 類	剣身長 48~54 cm【荒神谷遺跡出土の 358 本の銅剣】	
銅矛	中細形 a 類 中広形 a 類 中広形 b 類	2 本 2 本 } <u>綾杉状に研ぎだした銅矛 8 本</u> 12 本 } 【荒神谷遺跡出土の 16 本の銅矛】	北部九州
銅戈	中細形 b 類	真名井遺跡の銅戈 1 本	

北部九州において、青銅製の武器は【細形→中細形→中広形→広形(銅剣は平形)】という流れで推移しており、銅矛の綾杉状の研ぎだし文様は、まさしく北部九州産の特徴であり、九州産であることは明らかである。

同範銅鐸の存在もまた、同一生産地での製造を明示している。

前述したように、銅剣と銅鐸に付された×印の刻印も、同一地生産説を強く示唆している。

しかしながら、現状はといえば、銅矛を除いた銅剣・銅戈・銅鐸——とりわけ銅鐸の生産地をめぐる、①出雲説②近畿説③九州説で諸説紛々といった状態で、さらには製造時期、埋納時期などをめぐって、これまた混沌とした状態である。

『古代出雲と風土記世界』(瀧音能之編・河出書房新社・1998)のなかに、早稲田大学名誉教授であった水野裕氏(1918～2000)が、「古代の出雲的世界」という論考を掲載されているので、その一部を紹介しよう。

は、従来の文化圏論の影響や、あるいは大和説論の立場から、やはり出雲の銅鐸は大和な
いし近畿地域からの銅鐸の移入であるとする
説が盛行しているようであるが、私は納得で
きない。現在までのところ統計学的にみても
出雲こそ銅鐸の発祥地であったとみるべきで
あると信じている。銅鐸についての私見も多々
あるが、いざいざも確実な傍証となるべき事実す
らの確につかめていないので、それらの見解
は公表していかないが、ただ基本的には私は銅
鐸をもって大地母神にまつわる一つの象徴物
と考えているのである。目下のところ私とし
ては出雲国内から破片でもよいから銅鐸の鑄
型の出土を鶴首しているというのが真実であ
る。

銅鐸ばかりが出雲を象徴するわけではない。
古代の出雲世界の実態は、何といたっても出雲
に関する絶対的な権威をもっている『出雲国
風土記』の記述の正確なる理解の一言に尽き
るといというのが私の信念である。

水野裕氏は2000年(平成12)に亡くなられたが、もちろん出雲において銅鐸の鑄型を目にされることはなかった。

水野裕氏は銅鐸近畿説に対して強い警戒心をしめしておられるが、何ゆえか、九州への関心が完全に欠落している。

1980年(昭和55)に佐賀県鳥栖市の安永田遺跡から銅鐸の鑄型が出土し、考古学界・歴史学界に大きな衝撃をあたえ、テレビ・新聞などマスコミでも大きく報道されたことはご存じだったはずである。

にもかかわらず、九州から目をそむけ、「出雲国内から破片でもよいから銅鐸の鑄型の出土を鶴首している」と嘆かれたのは、その18年後なのである。

戦後、『古事記』『日本書紀』の出雲神話が否定されるなかで、『出雲風土記』のなかに学問の拠

り所を置いて古代出雲学に関する第一級の研究者であったが、ひょっとしたら戦後史学の犠牲者のお一人であったかもしれない。

鉛同位体比測定法

東アジアで青銅器が使用されるのは、紀元前 2300～2000 年の中国甘肅省の齐家文化(黄河上流域の新石器時代末期～青銅器時代初期の文化)といわれる。そして、紀元前 1500～1200 年の商(殷)時代に、青銅器の全盛時代を迎えた。

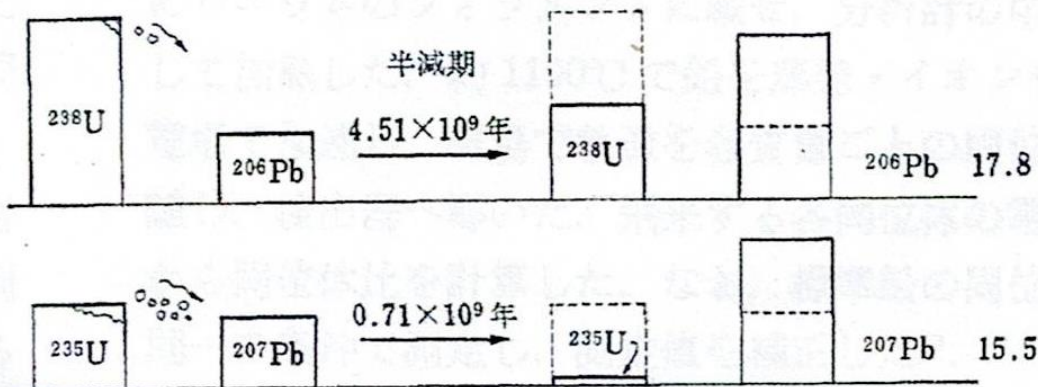
朝鮮半島に青銅器が伝来した時期については、紀元前 1000 年～紀元前 500 年と大きな幅があり、その実態が解明されているとはいえないが、古典的な年代論に従えば、日本に伝来したのは、おそらく紀元前 300 年ごろであろう。

自然界の鉛には、 ^{204}Pb 、 ^{206}Pb 、 ^{207}Pb 、 ^{208}Pb という同位体が 4 種ある。

このうち、 ^{206}Pb 、 ^{207}Pb 、 ^{208}Pb は、それぞれ同じ岩石中に含まれる放射性の ^{238}U (ウラン)、 ^{235}U 、 ^{232}Th (トリウム)が長い年月をかけて壊変し、 ^{206}Pb 、 ^{207}Pb 、 ^{208}Pb が増加する。

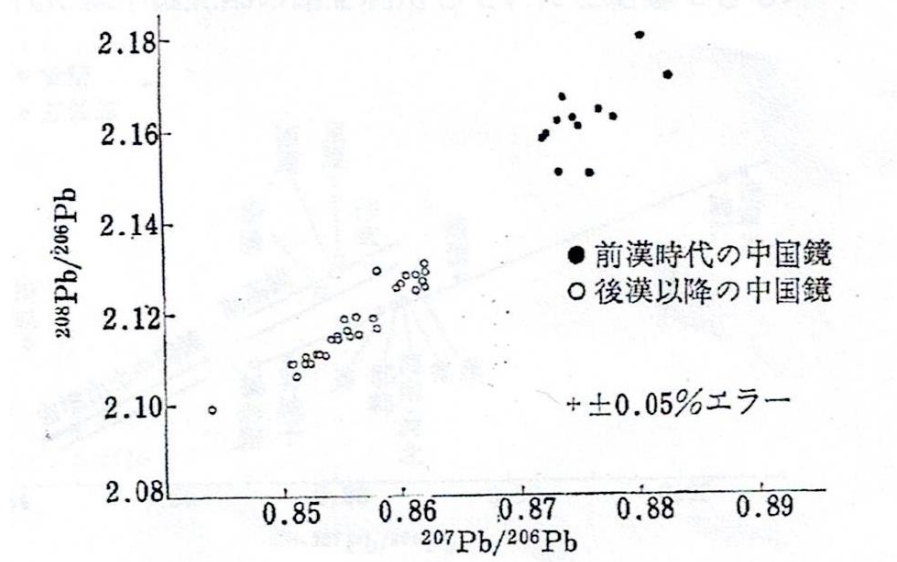
この原理を利用して、青銅器の年代を探る手法を鉛同位体比測定法という。

^{238}U	合計 8 回の α 崩壊と 6 回の β 崩壊を繰り返して ^{206}Pb に壊変する	半減期 45.1 億年
^{235}U	合計 7 回の α 崩壊と 4 回の β 崩壊を繰り返して ^{207}Pb に壊変する	半減期 7.1 億年



なお、以下に掲げる鉛同位体比に関する各図表は平尾良光「古代日本の青銅器の原料産地を訪ねて」より転載したものである。

前漢鏡と後漢鏡・魏鏡の鉛同位体比



- ・結論①・・・前漢と後漢・三国時代の銅鏡は明確に異なったグループの鉛を使用している。
- ・結論②・・・後漢と三国時代の銅鏡はほとんど同一のグループの鉛を使用している。

弥生時代の仿製鏡

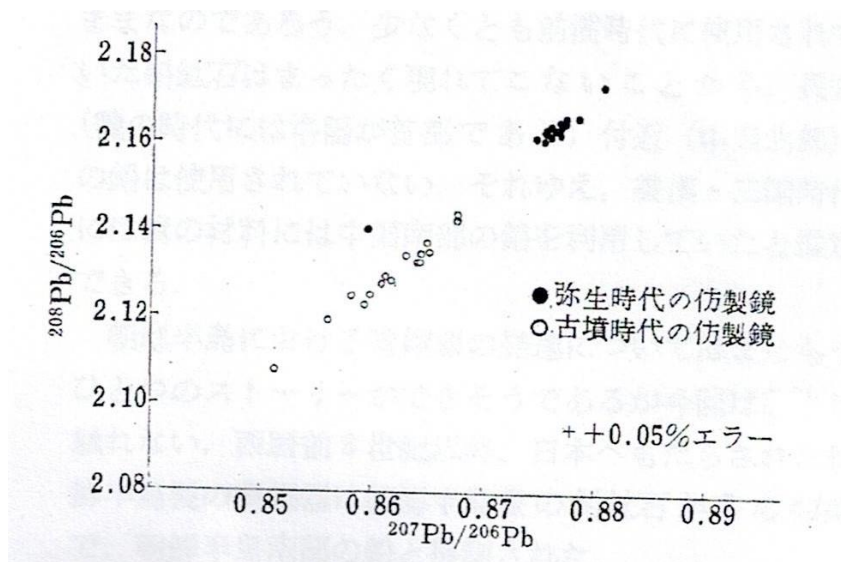


図 5 弥生時代と古墳時代の仿製鏡が示す鉛同位体比

- 結論①・・・弥生時代の仿製鏡は前漢鏡と同じ領域
- 結論②・・・したがって、仿製の青銅器(銅剣・銅矛・銅戈・銅鐸など)も同じ領域とみられる。

銅鐸

前期は①朝鮮式銅鐸・仿製朝鮮式銅鐸、中期は②菱環鈕式・扁平鈕式・外縁付鈕式、後期は③突線紐式(近畿式・三遠式)と読み替えていただきたい。

表 2 銅鐸の主成分組成 (%)

時 期	銅鐸名	銅	スズ	鉛
前 期	泊	74.46	14.25	7.65
	神 於	75.9	12.5	5.92
中 期	神 戸	83.84	7.62	7.63
	倭 文	85.88	3.49	8.89
後 期	栄 根	90.87	4.17	4.27
	(伝)羽曳野	87.91	4.52	3.38
	堂 道	89.14	4.93	2.66

上表のとおり、①②③の種類によって、銅・スズ・鉛の組成が大きく異なっている。

時代とともに、スズ・鉛の含有量が減少し、最終段階では青銅器というより、銅器というべきものになっている。

① 前期の鉛同位体比

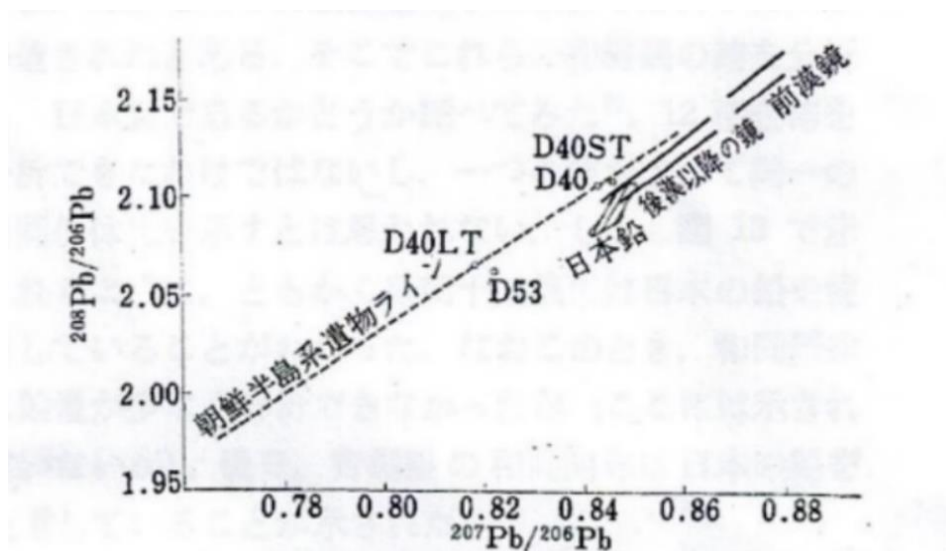


図 9 前期銅鐸が示す鉛同位体比

結論・・・初期の銅鐸は朝鮮半島の遺物に近い鉛同位体比を示している。

② 中期の鉛同位体比

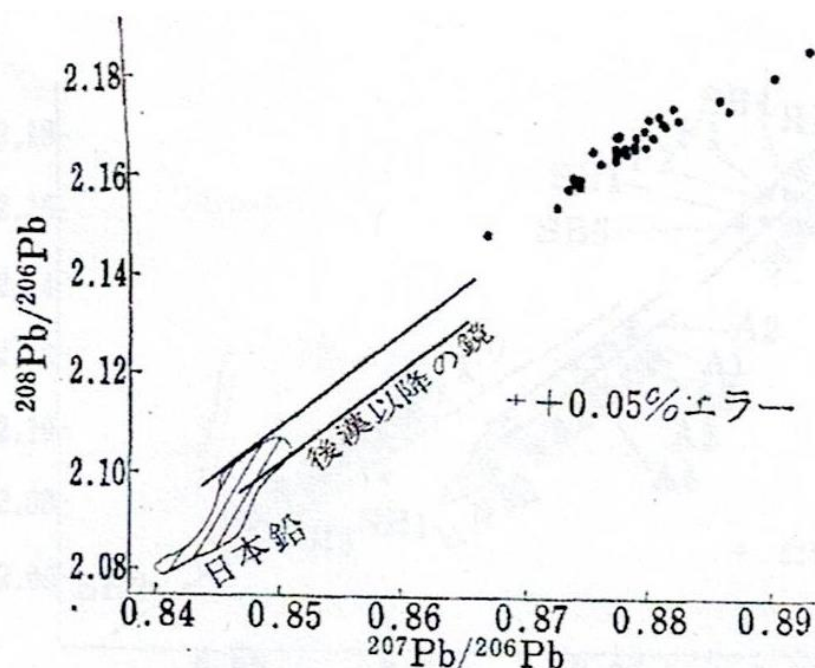


図 10 中期銅鐸が示す鉛同位体比

結論・前漢鏡の分布と一致する。

馬淵久夫氏によれば、前漢時代の五銖銭(ごしゅせん)や貨泉もまったく同じ領域を占めるという(「鉛同位体比による青銅器研究の30年」)。

したがって、奴国で生産された青銅器は、前漢からもたらされた青銅鏡や五銖銭、貨泉などを鋳つぶして製造した可能性があるということになる。

前漢時代の青銅器が最も出土するのは、旧奴国を中心とした北部九州である。

出雲の大量の青銅器は、やはり北部九州で生産された可能性が高い。

なお、後期の銅鐸については、ニギハヤヒの東遷あるいは神武天皇の東遷とも関連するので、ずっと先の方で述べることにしたい。

(以下、つづく)

後期・邪馬台国の時代⑮

出雲の古代文化

河村哲夫

玉の文化

出雲の特産は、玉である。

その代表的な玉の産地は、玉造温泉の東南にそびえる花仙山(松江市玉湯町布志名)である。

火山性の溶岩——安山岩が噴出してできた標高約 200 メートルの低くてなだらかな山で、西側に玉湯川が北に流れて宍道湖に注いでいる。

『出雲国風土記』の意宇郡の条には、「玉作山、玉作川」と記され、よく知られているとおり、玉造りにちなむ名称が数多く残っている。



花仙山からは、碧玉・メノウ (瑪瑙)・水晶などの原石が大量に産出される。



出雲の碧玉(玉造石)



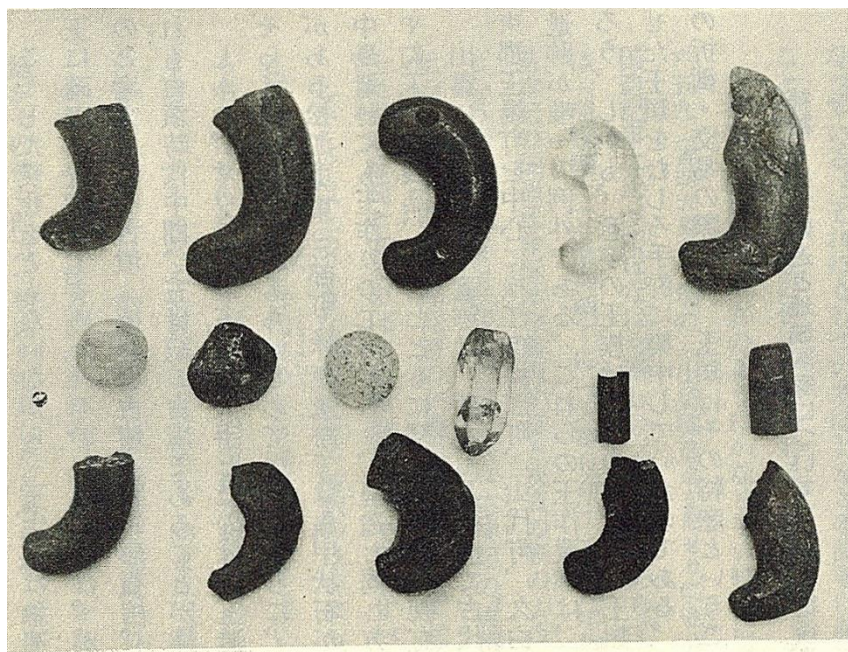
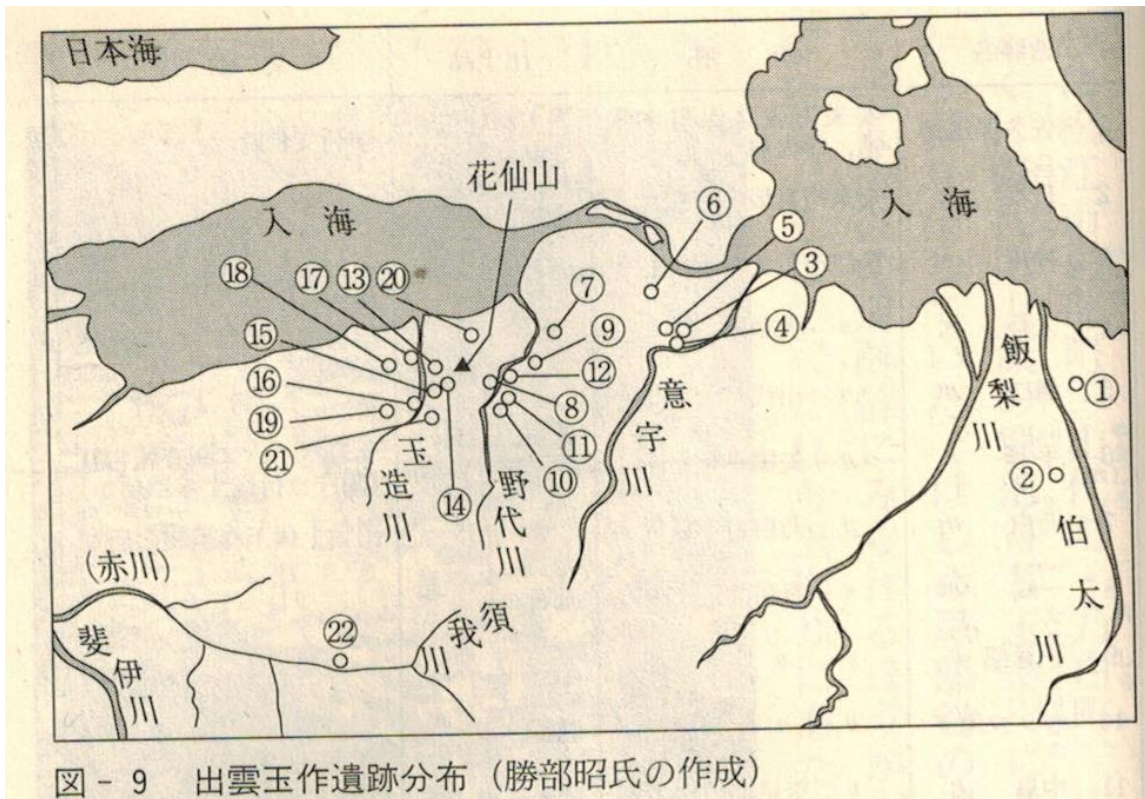
出雲の赤メノウ

種類	成分等	用途等
碧玉	<ul style="list-style-type: none"> •SiO₂(二酸化ケイ素) •硬度は7 •微細な石英の結晶が集まってできた鉱物(潜晶質石英) •メノウと同じ種類であるが、それより不純物を多く含んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> •勾玉、管玉、丸玉、平玉など
メノウ (瑪瑙)	<ul style="list-style-type: none"> •主成分は SiO₂(二酸化ケイ素) •硬度は 6.5～7 •無色(内包物により多彩な色) 	<ul style="list-style-type: none"> •勾玉、丸玉など •弥生時代後晩期の平原遺跡から瑪瑙製管玉が出土している。 •仏教の『無量寿経』・七宝の一つ •「孝徳が即位して白雉と年号を改めた。大きな斗のような琥珀と五升の器のような瑪瑙(メノウ)を献じた」(『新唐書』日本伝) •「永徽5年(654年)、(日本が)使を遣して琥珀、瑪瑙を献ず」(『宋史』)
水晶	<ul style="list-style-type: none"> •主成分は SiO₂(二酸化ケイ素) •規則的に結晶化したもの・水晶 •不規則な塊状のもの・石英 •硬度は7.0 •無色透明・半透明(内包物により多彩な色) 	<ul style="list-style-type: none"> •勾玉、管玉、算盤玉、切子玉など •弥生時代西日本における副葬された水晶製玉類は19遺跡82点。その分布は、玄界灘沿岸地域、瀬戸内海地域、日本海沿岸地域の3区域 •中期中葉の吉武高木遺跡 D7号土壙墓出土の水晶製玉類の副葬(最古の例) •弥生中期後葉の吉武樋渡遺跡1号木棺出土品からの水晶製玉類。ただし、早良・福岡平野のみの少数の例。 •弥生後期から西日本において本格的な水晶製玉類の副葬 •弥生後期後半から終末期に、北部九州・瀬戸内海沿岸の遺跡において【水晶製玉類+翡翠製勾玉+碧玉製管玉+ガラス小玉】のセットでの副葬

出雲の玉造り遺跡

遺跡名	所在	出土品	文献等
1 佐久保遺跡	安来市佐久保町字玉造, 字大原	碧玉製管玉未成品, 碧玉原石, 筋砥石, 水晶, メノウ	季刊文化財
2 折坂 <small>おりきか</small> "	安来市折坂町字鍵尾		
3 神田 "	松江市竹矢町字上竹矢	砥石	出雲上代玉作遺物の研究 } 史跡出雲 出雲国庁跡調 } 国府跡地 査概報 } 内
4 大草 "	〃 大草町	〃	
5 樋口 "	〃 山代町	〃	
6 平所 <small>ひらどころ</small> "	〃 矢田町字平所	砥石, 工具, 碧玉材, 水晶材, 工房跡	9号バイパス調査報告II (国庁に付属する工房か)
7 乃白 <small>のしろ</small> "	〃 乃白町字袋尻	〃	出雲上代玉作遺物の研究
8 一崎 <small>いつきま</small> "	〃 西忌部町字一崎	砥石	〃
9 下忌部 "	〃 〃 字下忌部	〃	〃 (○? 所在は不確か)
10 ウシロ原 "	〃 〃 字後原	砥石, 玉	〃
11 中島 "	〃 東忌部町字中島	砥石, 玉未成品, 白玉, 工房跡砥石	古代玉作の研究
12 千本 <small>せんぼん</small> "	〃 〃 字千本		出雲上代玉作遺物の研究
13 史跡公園玉作跡 "	八東郡玉湯町大字玉造字宮垣向畑青木原	玉, 砥石, 未成品, 工房跡	出雲玉作跡調査概報
14 向新宮 "	〃 〃 大字玉造	砥石, 未成品	出雲上代玉作遺物の研究
15 宮の上 "	〃 〃 大字玉造	砥石, 未成品	〃
16 廻原 "	〃 〃 大字玉造	〃	〃
17 波止・平原 "	〃 〃 大字玉造	〃	〃
18 根尾 "	〃 〃 大字林	〃	
19 ソリ田 "	〃 〃 大字林別所	〃	
20 布志名狐廻 "	〃 〃 大字布志名	〃	最近発見
21 玉の宮別所谷 "	〃 〃 大字玉造	砥石, るつぽ未成品	〃
22 大東高校グランド "	大原郡大東町字織部大字大東輪ノ内	砥石, 玉未成品	古代玉作の研究

表 - 3 出雲玉作遺跡一覧表



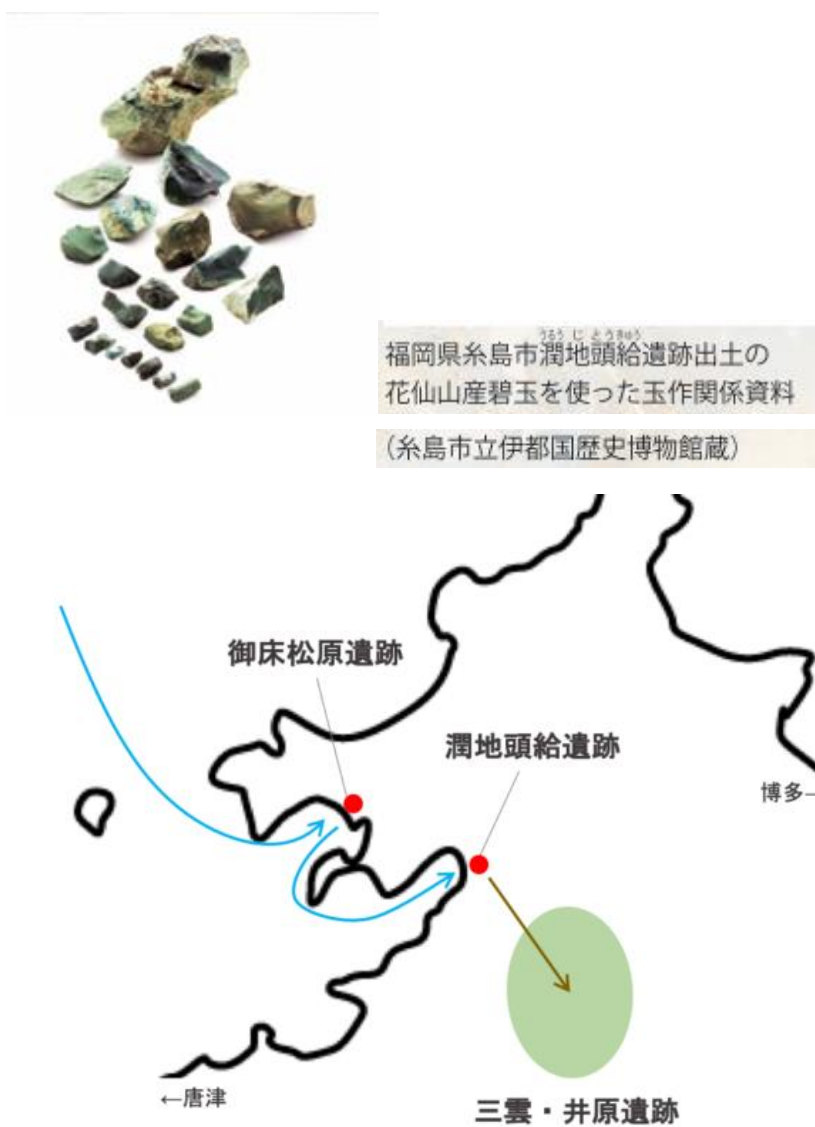
出雲国玉作遺跡から出土した玉類未製品 (島根県教育委員会提供)

ちなみに、北部九州において、はじめて玉造りの集落が確認されたのは、2003年(平成15)のことである。

糸島市——伊都国の潤地頭給(うるうじとうきゅう)遺跡の工房跡から、加工用の工具類などとも

に、花仙山の碧玉・水晶・メノウなどが出土した。

弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺跡とみられている(西谷正編『伊都国の研究』)。



また、2009年(平成21)から2010年(平成22)の調査によって、城野遺跡(北九州市小倉南区城野)から九州2例目の玉作り工房が出土し、これまた出雲産とみられる碧玉や新潟糸魚川産のヒスイの勾玉が出土した。

弥生時代中期～後期の集落遺跡で、40軒ほどのうち2軒で玉作りが行われていた。

城野遺跡の南側の重留遺跡からは、広形銅矛も見つかっている。

この二つの事例を踏まえ、これまで発掘された遺跡の再検証も進められており、弥生時代における北部九州と出雲との玉づくり交流を裏づける遺跡が、北部九州において今後ますます増加するにちがいない。

古代出雲の特色

以上、縷々述べたとおり、出雲の弥生時代の特徴は、

(一)銅鐸などの青銅器文化

(二)花仙山を中心とした玉造り文化

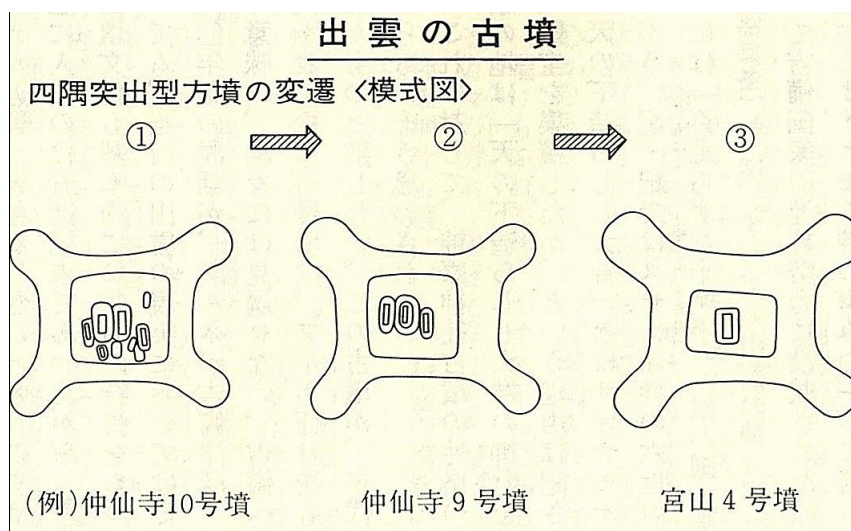
が指摘されよう。

むろん、その前提としての強大な出雲王朝の存在と『古事記』『日本書紀』等に記された膨大な出雲神話を忘れてはならない。

さらには、古代出雲の特色の(三)として、出雲独自の墓制——四隅突出型墳墓を列挙すべきことはいらまでもなからう。

四隅突出型墳墓

四隅突出型墳墓は、方形墳丘墓の四隅がヒトデのように長く伸びた特異な形の墳墓である。



弥生時代中期後葉から弥生時代終末期にかけて(2~3世紀)、出雲を中心に中国山間部や北陸地方で採用された墓制である。

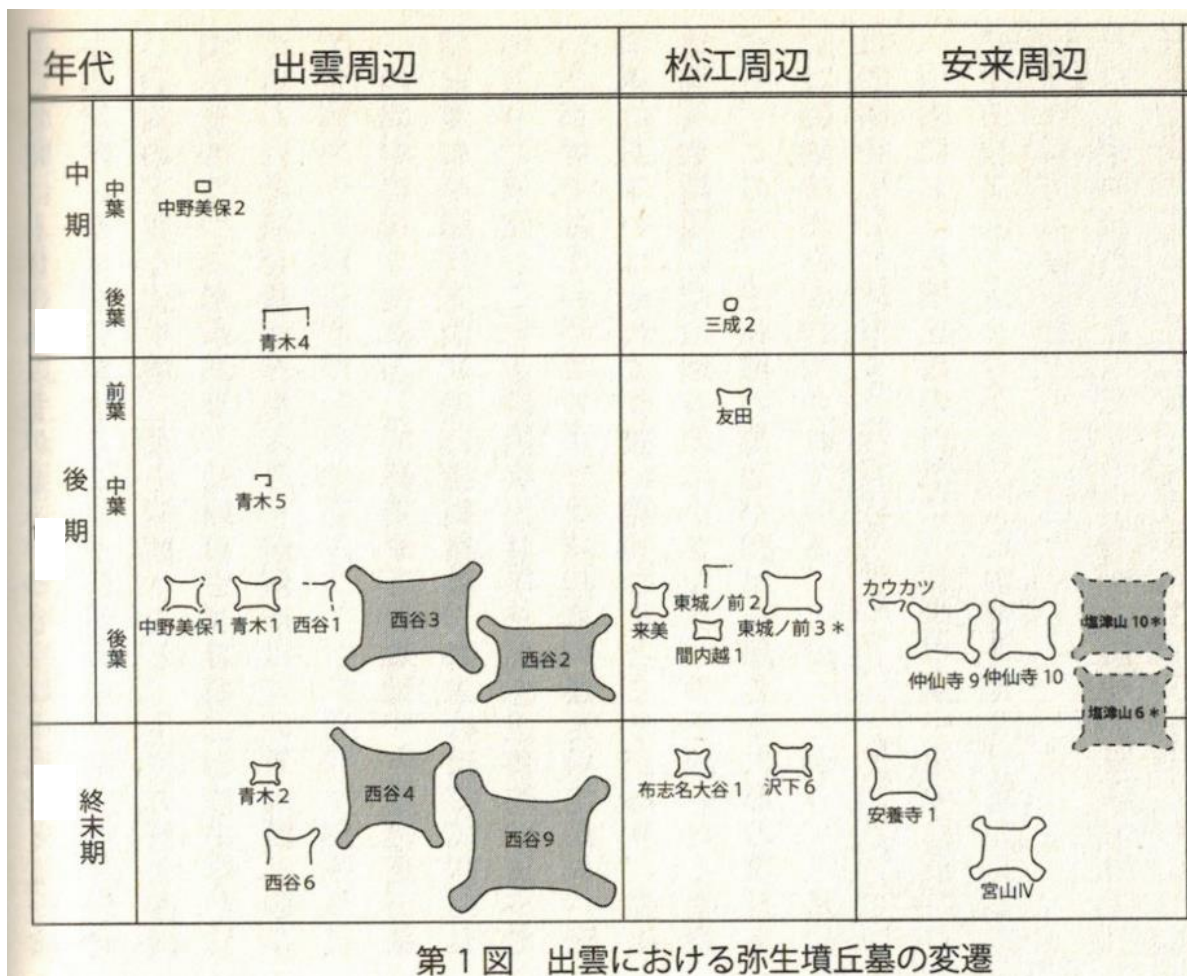


1968年に順庵原1号(島根県邑智郡邑南町)で最初に確認された。

その後、出雲地方で相次いで発見され、島根大学教授であった山本清氏によって四隅突出型方墳と名づけられた。

かつては、弥生中期後半(紀元前後)の広島県の三次盆地に最も古い例とされていたが、出雲の青木4号墓がおなじく弥生中期後半の四隅突出型墳墓であることが明らかになり、また中野美保2号墳が中期中葉にさかのぼることが確認されるなど、出雲ルーツの古墳である可能性が高まっている。

邪馬台国時代と重なる弥生後期後葉から美作・備後の北部地域や後期後半から出雲(島根県東部)・伯耆(鳥取県西部)に広まり、北陸では少し遅れ能登半島などで造られている。出雲を中心に約90基が確認され、北陸地方(福井県・石川県・富山県)を含めると全体で約100基が確認されている。



起源としては、かつては(一)朝鮮半島起源説(二)方形周溝墓起源説などが唱えられたが、中野美保遺跡(出雲市)の四隅突出型墳丘墓(1号墳)の墳丘下から時代の古い方形貼石(はりいし)墓(2号墳)が確認されたことから、現在では、方形貼石墓起源説がほぼ定説となっている。



(1) 四隅突出型墳丘墓の規模(突出部を含まず)

種別	墳丘長辺の長さ	備考
超小型	1～2m	妻木晩田遺跡の洞ノ原 11号墓など
小型	10～15m	西谷 6号
中型	20m前後	
大型	30～40m	西谷 9号・西谷 3号

(2) 中国タイプと北陸タイプ

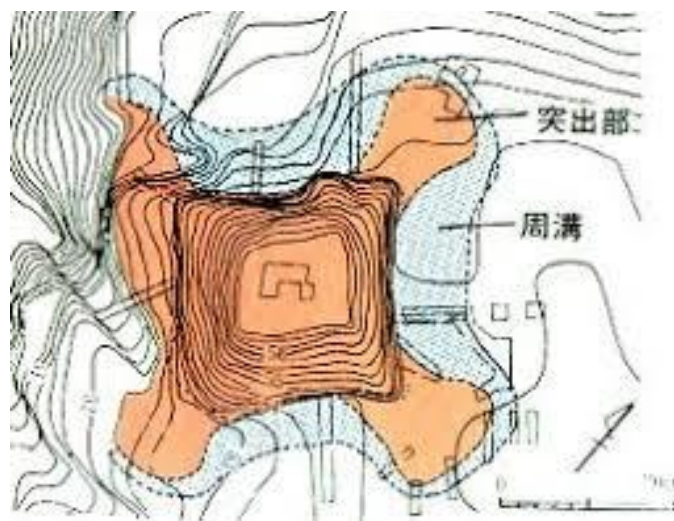
種別	特徴	備考
中国タイプ	<ul style="list-style-type: none"> 墳丘の平面が方形 四隅が突出 	石材を使用・・墳丘斜面に貼石 立石列の有無
北陸タイプ	<ul style="list-style-type: none"> 時代により拡大化 	石材を使用せず 自然地形を利用して突出部を形成



方形貼石墓



中国タイプの四隅突出型墳丘墓(出雲市)



北陸タイプの四隅突出型墳丘墓(富山市)

なお、広島県立歴史博物館の桑原隆博氏の『四隅突出型墳墓の新展開』(季刊『考古学』第 92 号)に掲載された県別の分布状況は次のとおりである。

四隅突出型墳墓一覧

名称(所在地)	外部施設	埋葬施設	出土遺物	時期
【広島県】				
歳ノ神 3号(山県郡千代田町)	貼石, 列石	土壌 1, 箱式石棺 2	棺内) 土器, 溝・墳裾) 土器	V-1~2
歳ノ神 4号(山県郡千代田町)	貼石, 列石	土壌 2, 箱式石棺 6	溝・墳裾) 土器	V-1~2
殿山 38号(三次市大田幸町)	貼石, 列石	土壌 1	棺内) 石鏡, 溝内) 土器	IV
殿山 39号(三次市大田幸町)				
陣山 1号(三次市向江田町)	貼石, 列石	埋葬施設 2 確認	溝内) 土器	IV
陣山 2号(三次市向江田町)	貼石, 列石	埋葬施設 9 確認(内 1 は張り出し部)	貼石・列石間) 土器, 溝内) 土器	IV
陣山 3号(三次市向江田町)	貼石, 列石	埋葬施設 2 確認	溝・墳裾) 土器	IV
陣山 4号(三次市向江田町)	貼石, 列石	埋葬施設 3 確認(内 1 は張り出し部)	溝内) 土器	IV
陣山 5号(三次市向江田町)	貼石, 列石	埋葬施設 1 確認	溝内) 土器	IV
宗祐池西 1号(三次市東酒屋町)	貼石	土壌 3	溝内) 土器	IV
宗祐池西 2号(三次市東酒屋町)	貼石, 列石	土壌 3		IV
矢谷 MD 1号(三次市東酒屋町)	貼石, 列石	木棺 8, 土壌 1, 箱式石棺 2	棺内) 鉞, 刀子, 小玉・管玉 棺直上) 土器(吉備特殊土器含)・礫群 溝内) 土器(吉備特殊土器含)	V-4
岩脇(三次市粟屋町)	貼石, 石列			V-?
佐田谷 1号(庄原市高町)	貼石, 列石	木棺・木槨 1, 土壌 3	棺直上) 土器・礫群, 溝内) 土器	V-1
田尻山 1号(庄原市山内町)	貼石, 列石	木棺 1, 箱式石棺 1 (墳裾) 箱式石棺	墳裾) 土器	V-1
【島根県】				
順庵原 1号(邑智郡瑞穂町)	貼石, 列石 ストーンサークル 3	土壌 1, 箱式石棺 2	棺内) 小玉, 管玉 ストーンサークル周辺) 土器, 溝内) 土器	V-1~2
西谷 1号(出雲市大津町)	貼石, 列石	土壌 4	溝内) 土器	V-3
西谷 2号(出雲市大津町)	貼石, 列石	埋葬施設 2 以上(未調査)	土器	V-3
西谷 3号(出雲市大津町)	貼石, 列石(二重)	埋葬施設 8(木棺・木槨)	棺内) 勾玉, 管玉, 棺直上) 土器(吉備特殊土器含)・礫群 墳丘斜面・裾) 土器(吉備特殊土器含)	V-3
西谷 4号(出雲市大津町)	(未調査)		土器(吉備特殊土器含)	V-3
西谷 6号(出雲市大津町)	(未調査)	埋葬施設 2(土壌)		V-4
西谷 9号(出雲市大津町)	(未調査)			V-4
青木 1号(出雲市東林木町)	貼石, 列石	埋葬施設 4?	埋葬施設) 人骨, 銅鐸片 土器	V-3
青木 2号(出雲市東林木町)	貼石, 列石			
青木 3号(出雲市東林木町)	貼石, 列石			
青木 4号(出雲市東林木町)	貼石		墳丘周辺) 土器	IV
中野美保 1号(出雲市中野町)	貼石, 列石 円形状石組遺構数基		墳丘裾) 土器 円形状石組遺構) 土器	V-3~4
布志名大谷Ⅲ-1号(八束郡玉湯町)	貼石	埋葬施設 4(木棺 1, 土壌)		V-3
布志名大谷Ⅲ-2号(八束郡玉湯町)	貼石	埋葬施設 1(土壌 1)		V-3
布志名大谷Ⅲ-3号(八束郡玉湯町)	貼石	埋葬施設 1(土壌 1)		
来美 1号(松江市矢田町)	貼石, 列石	埋葬施設 7(木棺 1, 土壌 6)	棺直上) 土器, 墳裾) 土器	V-3~4
間内越 1号(松江市矢田町)	貼石	(未調査)	墳頂) 土器, 墳裾) 土器	V-3~4
的場(松江市八幡町)	貼石, 列石?	土壌 1	棺直上) 土器, 石	V-3
南講武小廻(八束郡鹿島町)	貼石, 列石			V-4
仲仙寺 8号(安来市西赤江町)	(未調査)			
仲仙寺 9号(安来市西赤江町)	貼石, 列石(二重)	埋葬施設 3(木棺) (墳裾) 箱式石棺 3	棺内) 管玉, 棺直上) 土器, 石 墳丘斜面・裾) 土器	V-3
仲仙寺 10号(安来市西赤江町)	貼石, 列石(二重)	埋葬施設 11(木棺 4, 土壌 7) (墳裾) 箱式石棺 2, 石蓋土壌 1	棺内) 管玉, 棺直上) 土器, 石 墳丘斜面・裾) 土器	V-3
宮山 4号(安来市西赤江町)	貼石, 列石(二重)	埋葬施設 1(木棺) (墳裾) 土壌 1	棺内) 鉄刀, 墳丘斜面・裾) 土器	V-4

安養寺1号(安来市西赤江町)	貼石, 列石(二重)	埋葬施設4(木棺, 土壇)	棺直上) 土器, 石	V-4
安養寺3号(安来市西赤江町)	貼石, 列石(二重)		墳丘斜面・裾) 土器	V-4
カウカツE-1の1号(能義郡伯太町)	貼石		墳頂) 土器(吉備特殊土器含), 板石	V-3
塩津6号(安来市久白町)	貼石	(未調査)		
塩津10号(安来市久白町) 〔旧塩津1号〕	貼石, 列石	(未調査)		
下山(安来市西赤江町)	貼石, 列石	(未調査)		V-4
大城(隠岐郡西郷町)	貼石	埋葬施設(土壇)4	墳内) 管玉・土器, 墳丘裾) 土器	V-3~4
【鳥取県】				
父原1号(日野郡溝口町)	貼石	埋葬施設1(箱式石棺?)	墳丘斜面・溝) 土器	V-4
日下1号(米子市日下)	貼石	埋葬施設4(木棺)	溝内) 土器	V-2
尾高浅山1号(米子市尾高)	貼石, 列石		墳裾) 土器	V-1
洞ノ原1号(西伯郡淀江町)	貼石	埋葬施設1	溝内) 土器	V-1
洞ノ原3号(西伯郡淀江町)	貼石	(未調査)	溝内) 土器	V-1
洞ノ原4号(西伯郡淀江町)	貼石	(未調査)	溝内) 土器	V-1
洞ノ原5号(西伯郡淀江町)	貼石	(未調査, 埋葬施設1確認)		
洞ノ原7号(西伯郡大山町)	貼石, 列石		溝内?) 土器	V-1
洞ノ原8号(西伯郡大山町)	貼石	(未調査, 墳裾に土壇4)	溝内) 土器	V-2
洞ノ原9号(西伯郡大山町)	貼石	(未調査)		V-1 or 2
洞ノ原10号(西伯郡大山町)	貼石	(未調査)		
洞ノ原11号(西伯郡淀江町)	貼石	(未調査)	溝内) 土器	
洞ノ原12号(西伯郡淀江町)	貼石	(未調査)		
洞ノ原13号(西伯郡淀江町)	貼石	(未調査)		
洞ノ原16号(西伯郡淀江町)	貼石	(未調査)		
洞ノ原17号(西伯郡淀江町)	貼石	埋葬施設1		
仙谷1号(西伯郡大山町)	貼石, 列石	(未調査)	墳裾) 土器	V-2
仙谷2号(西伯郡大山町)	貼石, 集石遺構	埋葬施設3(木棺2, 土壇1) (墳丘外) 埋葬施設2(土壇)	墓壇直上) 土器, 墳裾) 土器	V-2
徳楽(西伯郡淀江町)	(未調査)		土器	V-4
阿弥大寺1号(倉吉市下福田)	貼石, 列石	埋葬施設2(木棺) (墳裾) 土壇12	墳裾・突出部) 土器	V-1~2
阿弥大寺2号(倉吉市下福田)	貼石, 列石	埋葬施設1(土壇)	墳裾・突出部) 土器	V-2~3
阿弥大寺3号(倉吉市下福田)	貼石, 列石		墳裾・突出部) 土器	V-1~2
藤和(倉吉市山根)	貼石	埋葬施設1(割竹形木棺)	墳裾) 土器	V-4
柴栗(倉吉市上神)	貼石		墳丘斜面・溝) 土器	V-2
糸谷1号(岩美郡国府町)	貼石	埋葬施設11(木棺2, 土壇9)	棺内) 剣・鏡・土器, 墳裾) 土器	V-4
西桂見(鳥取市桂見)	貼石, 列石	埋葬施設1(木棺)	土器	V-2~3
【福井県】				
小羽山22号(丹生郡清水町)	周溝		砥石, 土器	V-3
小羽山23号(丹生郡清水町)	周溝	埋葬施設1(木棺)	棺内) 鉄刀 棺直上) 土器	V-3
小羽山24号(丹生郡清水町)	周溝	埋葬施設2(木棺)	棺内) 管玉 棺直上) 土器, 鉄製品	V-3
小羽山30号(丹生郡清水町)	周溝	埋葬施設1(木棺)	棺内) 管玉・勾玉・剣 棺直上) 土器, 石斧, 土器	V-3
小羽山33号(丹生郡清水町)	周溝	埋葬施設1(木棺)	棺内) 勾玉 溝内) 土器	V-3
小羽山47号(丹生郡清水町)	周溝		土器	V-3
高柳2号(福井市高柳町)				
【石川県】				
一塚21号(松任市一塚)	周溝		溝内) 土器	V-4
【富山県】				
杉谷4号(富山市杉谷)	周溝	埋葬施設(土壇?)	墳頂) 土器, 溝内) 土器	V-4
富崎1号(婦負郡婦中町)	周溝	(未調査)	周辺採集土器	V-3
富崎2号(婦負郡婦中町)	周溝	(未調査)	周溝) 土器	V-3~4
富崎3号(婦負郡婦中町)	周溝	(未調査)	墳丘裾) 土器	V-3
六治古塚(婦負郡婦中町)	周溝	埋葬施設(土壇?)	土壇直上) 土器 墳丘斜面・周溝) 土器	V-4
鏡坂1号(婦負郡婦中町)	周溝	(未調査)	墳丘裾) 土器	V-4
鏡坂2号(婦負郡婦中町)	周溝	(未調査)	墳丘裾・周溝) 土器	V-4

平成の大合併により所在地の市町村名が変更のものもあるが、旧市町村名を使用した。

また、『京都府埋蔵文化財論集 第6集 創立30周年記念誌』(2010)に掲載された方形貼石墓の分布状況は次のとおりである。ただし、近畿北部とそれ以外の地域という区分はやや紛らわしい。近畿北部は丹波と読み替えた方がわかりやすいであろう。出雲・丹波いずれも日本海側に位置するという共通性が浮かび上がるからである。

付表2 弥生時代中期～後期前葉の主要な方形貼石墓(近畿北部を除く)

遺跡名	所在地	遺構名	立地	墳丘規模	墳丘高さ	貼石状況	貼石高さ	貼石	周溝	埋葬施設	供献土器等	時期
波来浜遺跡	鳥根県江津市	A調査区2号墳	砂丘	南北4m、東西5m	0.9m	各辺に貼石但し粗密あり	約0.6m	3～4段	なし	3基	墓域内及び墳丘上	中期後葉
		B地区1号墳	砂丘	北辺6m、東辺5m以上	0.3m	北辺、東辺あり、西辺なし	0.3m	1段	なし	9基	墳丘上銅鉄共伴	後期前葉
中野美保遺跡	鳥根県出雲市	2号墓	後背低地	東西5.5m、南北4.5m	0.4m	全面にはなかった可能性大。南辺に集中	0.3m	1～4段	なし	不明	盛土内から土器片	中期中葉?
青木遺跡	鳥根県出雲市	5号墓	低地標高3.8m	南北約6m以上、東西約7m	流失	南辺を除く3辺で部分的に確認	0.3m	1段	なし	不明	なし	後期前葉～後葉
友田遺跡	鳥根県松江市	B区1号墳丘墓	丘陵	東西11m余、南北6.26m	1.2m	原位置をとどめず。4辺で確認	不明	不明	4辺	7基	北溝・西溝内多数	中期後葉?
		B区2号墳丘墓		東西10.5m、南北4.1～4.2m	0.5m	原位置をとどめず。西辺なし	不明	不明	3辺	6基	北溝内多数	中期後葉?
		B区3号墳丘墓		東西11.3m、南北9.1m	1.06m	北辺と東辺にあり	不明	1段以上	3辺	1基	なし	不明
		B区4号墳丘墓		東西12.25m、南北9.25m	0.68m	まばらに3辺あり。周溝のない南辺のなし	不明	2段以上	3辺	不明	なし	不明
		B区5号墳丘墓		東西13.15m、南北9.75m	1.39m	北辺と西辺にあり	0.3m	2～3段	不明	なし	不明	中期後葉?
妻木晩田遺跡群洞ノ原墳墓群	鳥取県米子市	2号墓	丘陵	A軸6.9m、B軸8.4m	0.5m	南東辺と南西辺に顕著、墳裾の列石	0.2m	1・2段	なし	不明	墳丘上?	中期末
梅田堂峯遺跡	鳥取県大山町	梅田堂峯墳丘墓	丘陵	南北11.3m、東西8.6m	0.63m	4辺良好に遺存墳丘斜面上部に巡る	0.4m	1～3段	なし	2基	墳頂部ほか	中期後葉
花園遺跡	広島県三次市	第1号台状墓	丘陵	東西31.3m、南北19.8m	約1.6m	3辺のみ確認	1.3m	3～6段	2辺	215基	なし	前期後半～後期前葉
		第2号台状墓		東西14.14m、南北9.03m	約1.3m	南辺のみ立石。他の3辺に貼石	1.3m	3～4段	なし	21基	なし	前期後半～後期前葉
新井三鶴谷墳丘墓	鳥取県鳥取市	1号墳丘墓	丘陵	南北26.5m、東西17m	約3m	西辺に円礫による貼石	約2m	-	なし	4基	墓域上	後期初頭
布勢鶴指奥墳墓群	鳥取県鳥取市	1号墳丘墓	丘陵	南北17.8m、東西10.6m	2.36m	ほとんどが転落しており、不明	不明	不明	なし	2基	墓域上	後期前葉～中葉

付表1 中期～後期前葉の方形貼石墓(近畿北部)

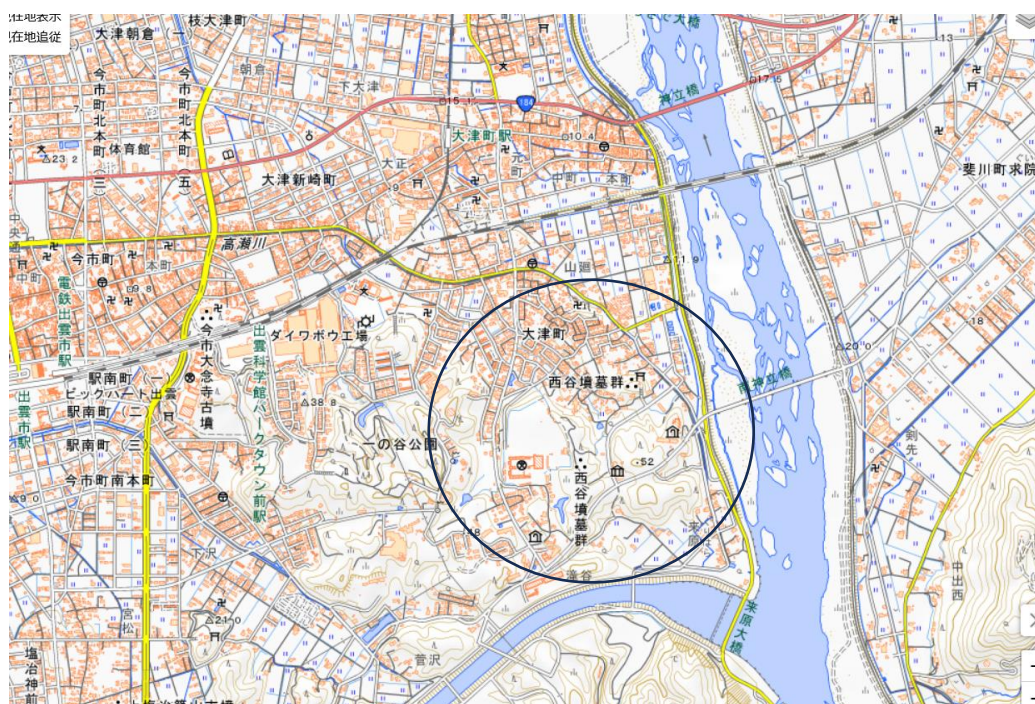
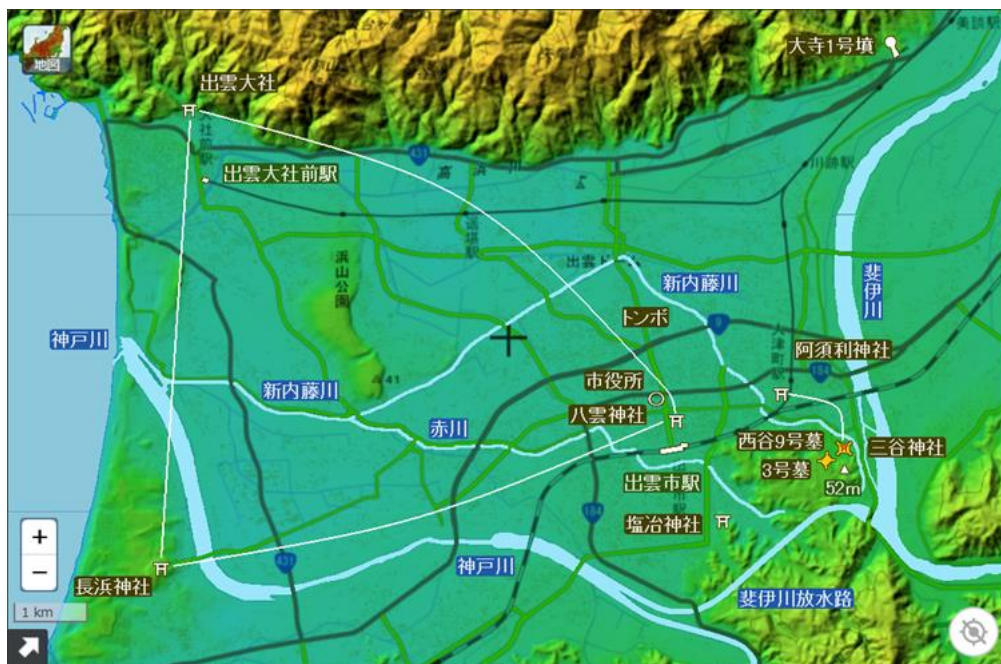
遺跡名	遺構名	立地	墳丘規模	墳丘高さ	貼石状況	貼石高さ	貼石	周溝	埋葬施設	供献土器等	時期
志高遺跡	1号墓	自然堤防上	西辺6.3m 北辺及び南辺 およそ9m	1.1m	北西斜面のみ	0.6m	2段	あり	2基以上	墳丘上溝内	中期後葉
	2号墓		東辺15.5m 北辺2.2m以上 南辺2.2m以上	1.3m	東辺、北辺あり 南辺なし	0.8m	4段	あり	不明	なし	中期後葉?
	3号墓		5.0m × (約9m)	1.3m	北西斜面のみ	0.5m	2段	あり	3基	なし	中期後葉?
難波野遺跡	S X 22 (1号墓)	扇状地	南辺16.2m 東辺7.8m以上 西辺2.8m以上	1.0m	調査した3面あり、 北辺のみ未確認	0.6m	4段	あり	不明	なし	中期後葉?
	S X 25(2号墓)		北辺6.0m以上 西辺1.5m以上	0.3～0.4m	調査した北辺と 西辺にあり	0.3m	2～3段	あり	不明	なし	中期後葉?
寺岡遺跡	方形周溝墓 S X 56	台地	南北33m 東西20m	0.9m以上	原位置をとどめず不明	不明	不明	あり	3基	第3主体内周溝内	中期後葉
日吉ヶ丘遺跡	S Z 01	台地	32m 20m	1.6m以上	3面で確認。西辺は削 堀のため不明	0.5m	3段	あり	1基	なし	中期中葉?
千原遺跡	グリッド16	扇状地	東辺2.9m以上	0.6m以上	1辺のみ確認	0.5m	1～2段	あり	不明	なし	中期後葉?
	グリッド27		北辺3.4m以上	0.5m以上	1辺のみ確認	0.5m	1段	不明	不明	なし	不明
小池古墳群	12号墓	丘陵	不明	不明	石材が散乱			不明			中期後葉
	13号墓		長辺6.5m 短辺3.7m	0.4m	丘陵側を除く3辺	0.3～0.4m	3～5段	なし	2基	墳丘上	中期後葉
奈具岡遺跡	方形区画1	台地	西辺16m以上 南辺6.1m以上	0.6m以上	検出した2辺で確認	0.6m	2段	あり	不明	なし	不明
	方形区画2		西辺5.4m、 南辺1.6m	0.8m以上	西辺のみで確認 南辺には貼石がない	0.8m	4段	あり	不明	なし	後期前葉?
粟鹿遺跡	方形貼石墓 E-S X 01	河岸段丘(扇状地)	東西13.2m 南北9.3m以上	0.5m以上	西辺と南辺の一部で確認 東辺にはない	0.5m	2段	あり	不明	溝内	中期後葉

西谷墳墓群

出雲大社から東南 9.5 キロの斐伊川左岸(出雲市大津町字西谷) に、標高 40m 程度の丘陵地がある。

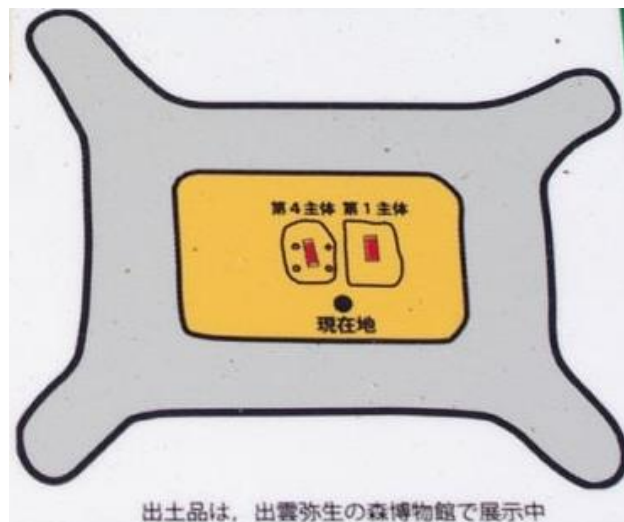
弥生時代後期・古墳時代・奈良時代の墳墓が密集し、西谷墳墓群と呼ばれている。

1953 年(昭和 28)に発見され、現在まで 32 基の墳墓が確認されている。そのうち、1 号・2 号・3 号・4 号・6 号・9 号の 6 基が四隅突出型墳丘墓である。



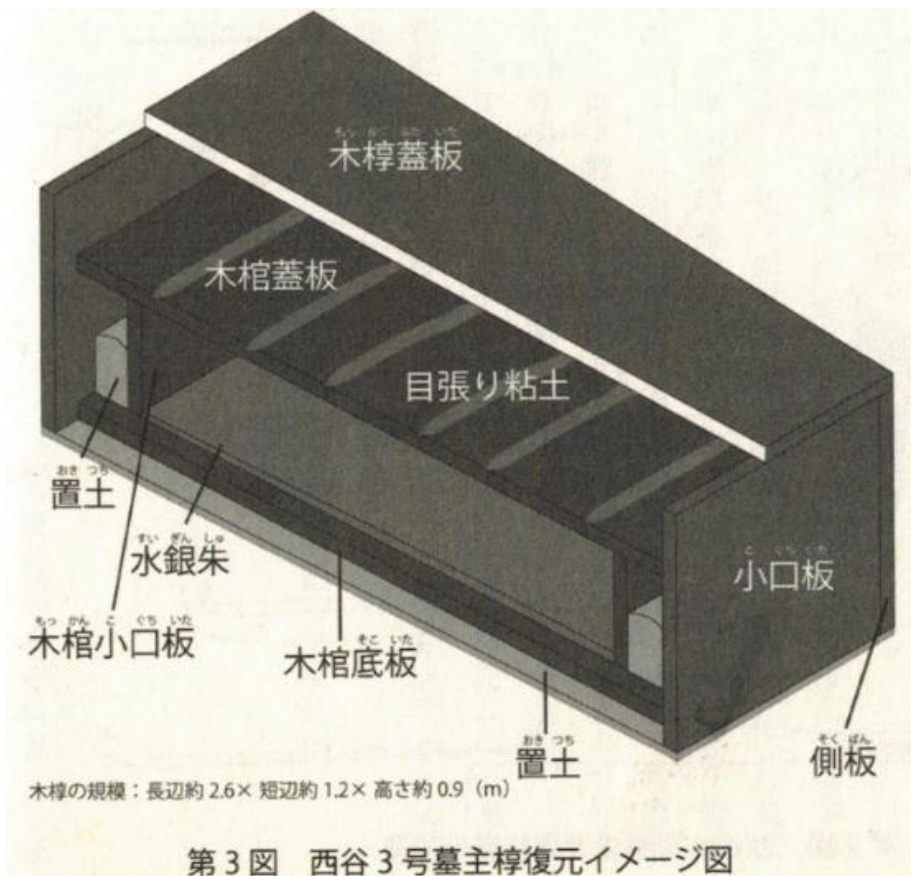
西谷 3 号墓

そのうち、2 世紀末といわれる西谷 3 号墓は一辺 40m ほどの規模で、朱で真っ赤に塗られた主体部からはコバルトブルーのガラス製の巴型勾玉が出土している。これは、丹後の大風呂南 1 号墳(京都府与謝野町岩滝)のガラス釧と同じ材質ともいわれている。

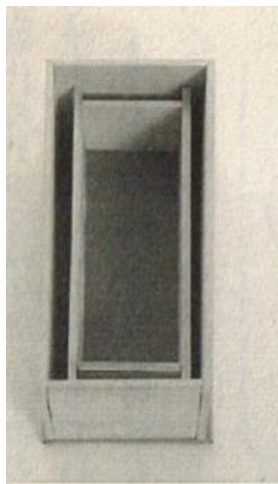


大風呂南 1 号墳(京都府与謝野町岩滝)のガラス釧

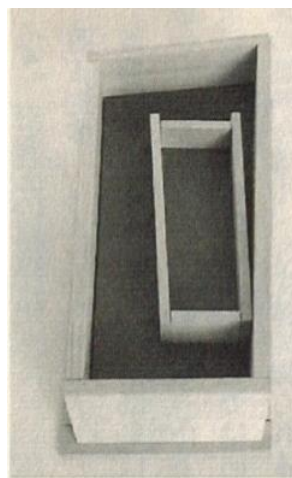
そして、西谷 3 号墳丘墓の埋葬施設(第 4 主体)は、下図のような構造の木槨墓であり、埋葬儀礼に用いた土器の中に吉備の特殊器台・特殊壺や山陰東部や北陸南部からの器台・高杯などが大量に混入していた。



しかも、吉備の楯築墳丘墓(岡山県倉敷市矢部)の木槨墓ときわめて類似している。



西谷 3 号墳丘墓



楯築墳丘墓

このことから、出雲の西谷 3 号墳丘墓と吉備の楯築墳丘墓がほぼ同じ時期の墳墓という推測も成り立つ。

しかしながら、出雲の西谷 3 号墳丘墓四隅突出型墳丘墓、吉備の楯築墳丘墓は双方中円墳といふまったく異なる形式の墳墓である。

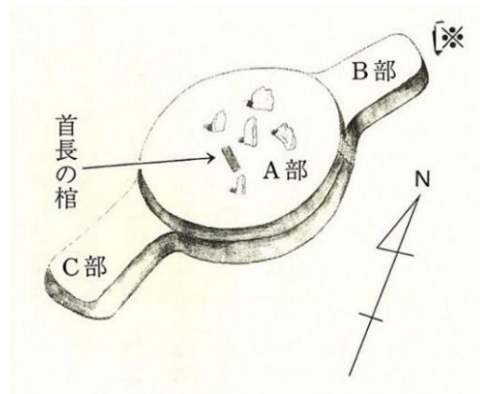
このことから、吉備の大王と出雲の大王とは異なる系列である可能性が高いが、どういわけか吉備の大王については、出雲のスサノオや大国主命のような具体的な大王名はまったく伝わっていない。

吉備の国の風土記が散逸したことと関連があるろうが、不思議なことに社伝や地域伝承にもそれらしき人物は見当たらない。

		楯築遺跡	西谷 3 号墳
基本項目	墳丘の形	双方中円墳	四隅突出型
	棺槨	木槨墓	木槨墓
	墳長×墳幅×高さ	全長83m、円丘部直径49m、高さ4.5m	東西40m×南北30m、高さ4.5m
	設置場所	丘陵	丘陵
	貼石、立石	立石	貼石

楯築墳丘墓の位置





楯築墳丘墓は双方中円墳

なお、双方中円墳は石清尾山古墳群(香川県高松市)のうち猫塚古墳・鏡塚古墳・稲荷山北端1号墳積石塚・明合古墳(三重県津市)などにもみられ、また、近畿大和(奈良県)でもみられる墳墓であるため、前方後円墳の先駆的な墳墓であった可能性も考えられる。

双方中円墳	所在地	備考
楯築墳丘墓	岡山県倉敷市	
猫塚古墳	香川県高松市	石清尾山古墳群
鏡塚古墳	香川県高松市	石清尾山古墳群
稲荷山北端1号墳	香川県高松市	石清尾山古墳群
櫛山古墳	奈良県天理市	
中山大塚古墳	奈良県天理市	
明合古墳	三重県津市	



櫛山古墳(奈良県天理市)

また、中山大塚古墳(奈良県天理市中山町大塚)も後円部北側の墳丘裾に扇型に開く張り出し部分が確認されているため、双方中円墳の可能性が高いとみられている。

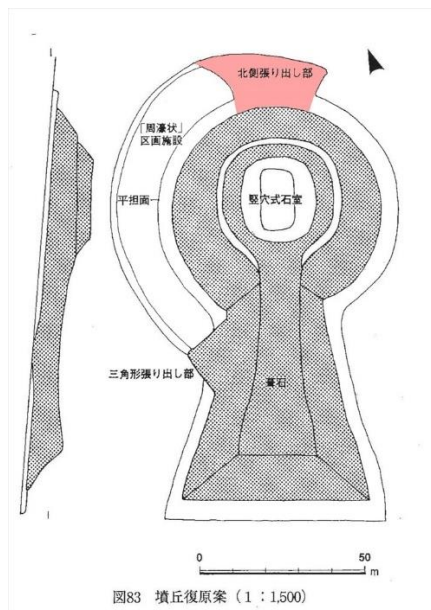
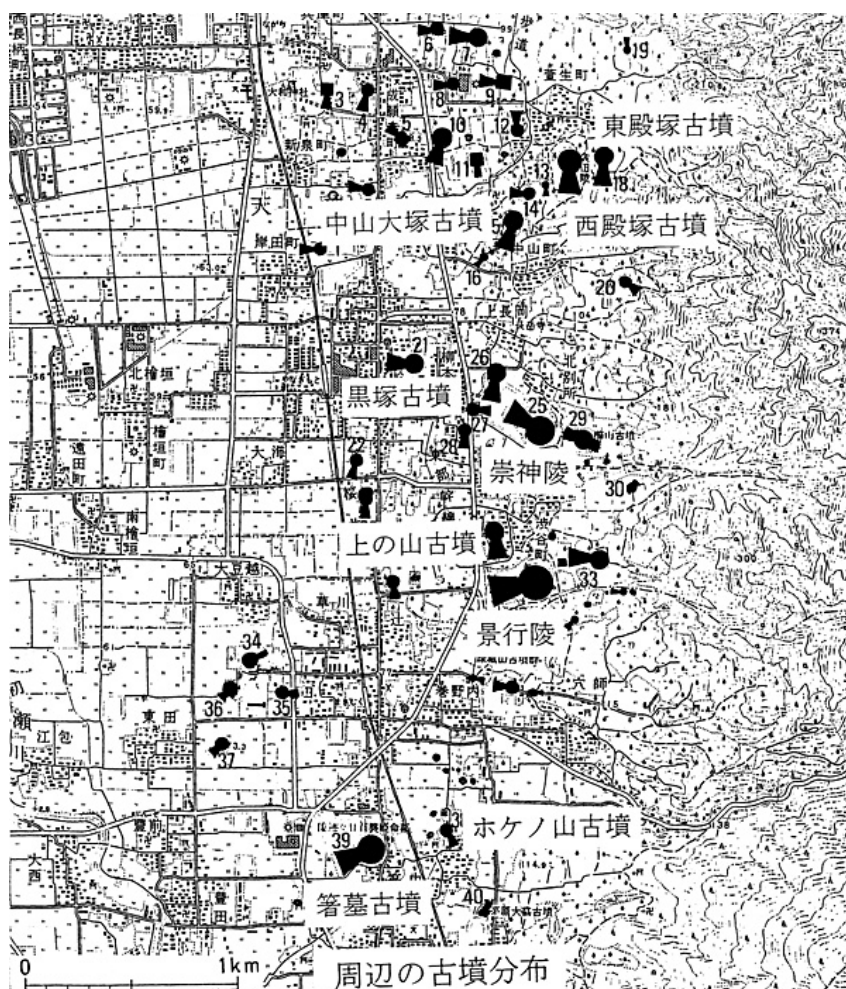
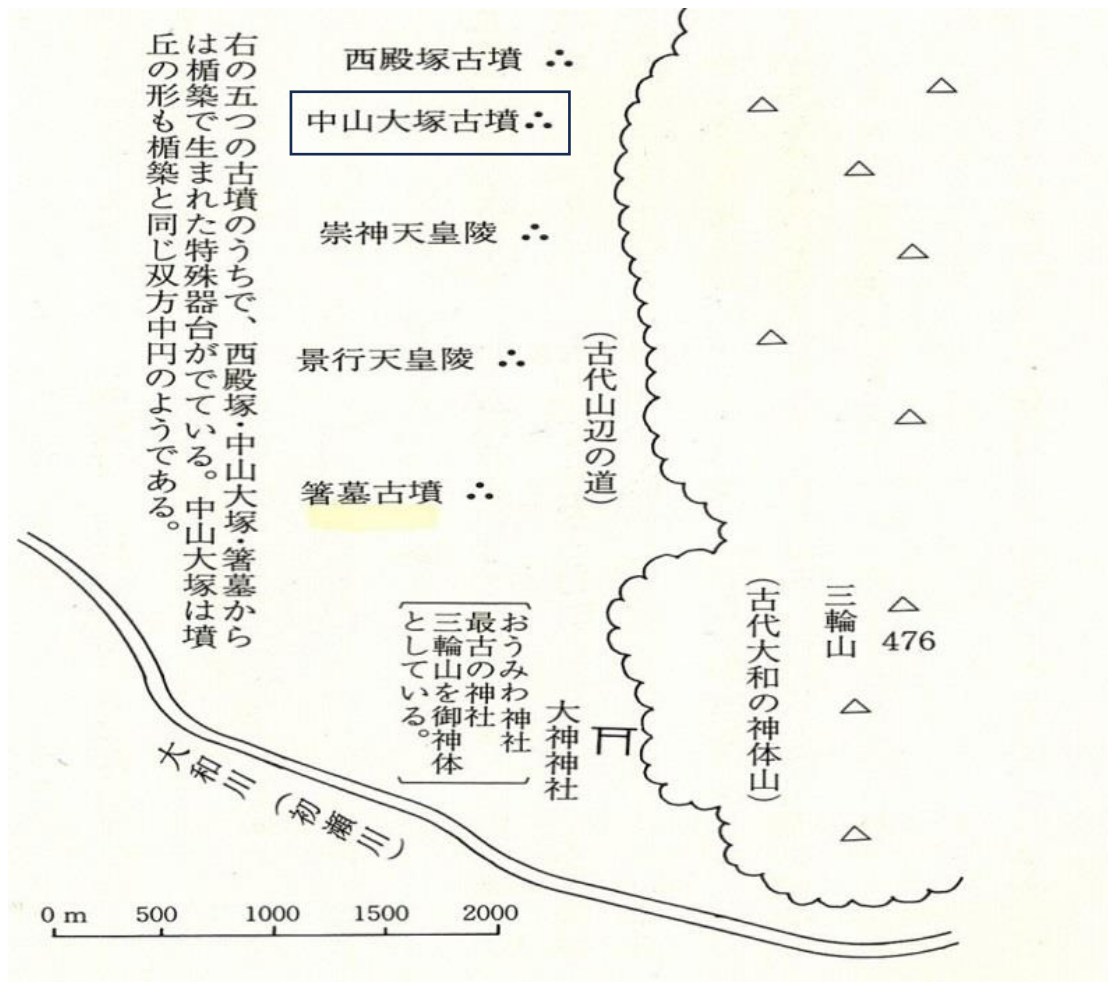


図83 墳丘復原案 (1 : 1,500)





特殊器台

首長層の埋葬祭祀に用いられる大型の特殊器台は、弥生後期になって吉備地方で勃興した。

そのルーツは、おそらく北部九州において埋葬祭祀のために用いられた「丹塗磨研(にぬりまけん)土器」であったろう。紀元前後の奴国の時代の祭具である。

ベンガラで赤く塗り、ヘラで丁寧に磨いた土器類で、高坏・壺・筒型器台などで構成される。

福岡県筑前町の栗田遺跡(旧三輪町)・峯遺跡(旧夜須町)・七板遺跡(旧夜須町)や筑紫野市の貝元遺跡、久留米市の安国寺遺跡、佐賀県の吉野ヶ里遺跡などからも出土している。

墓域内から出土するケースが多いが、墓域外の住居跡から出土する例もあり、日常祭祀でも用いられていたようである。

おそらく朝鮮半島に由来するものであろうが、北部九州の小型銅鐸が出雲で大きく進化したように、北部九州の筒型器台が、吉備の大型特殊器台へと進化した。



筒型器台

吉備において大きく進化した大型特殊器台は、たちまち出雲へと伝搬し、近畿地方へも伝搬した。さらには、大和王権成立後においては、円筒埴輪(および朝顔形埴輪)として定着した。

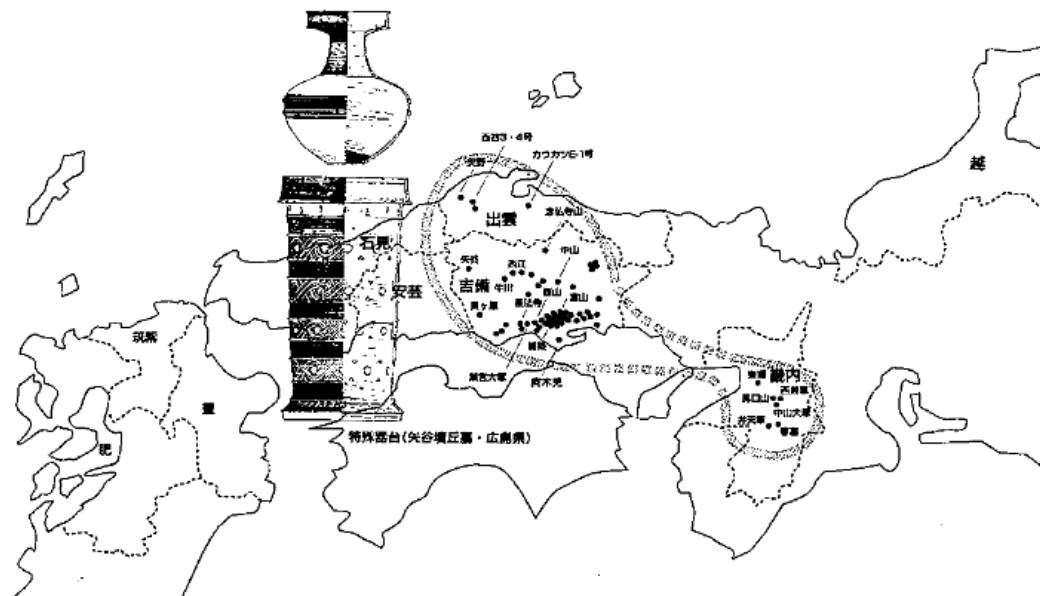
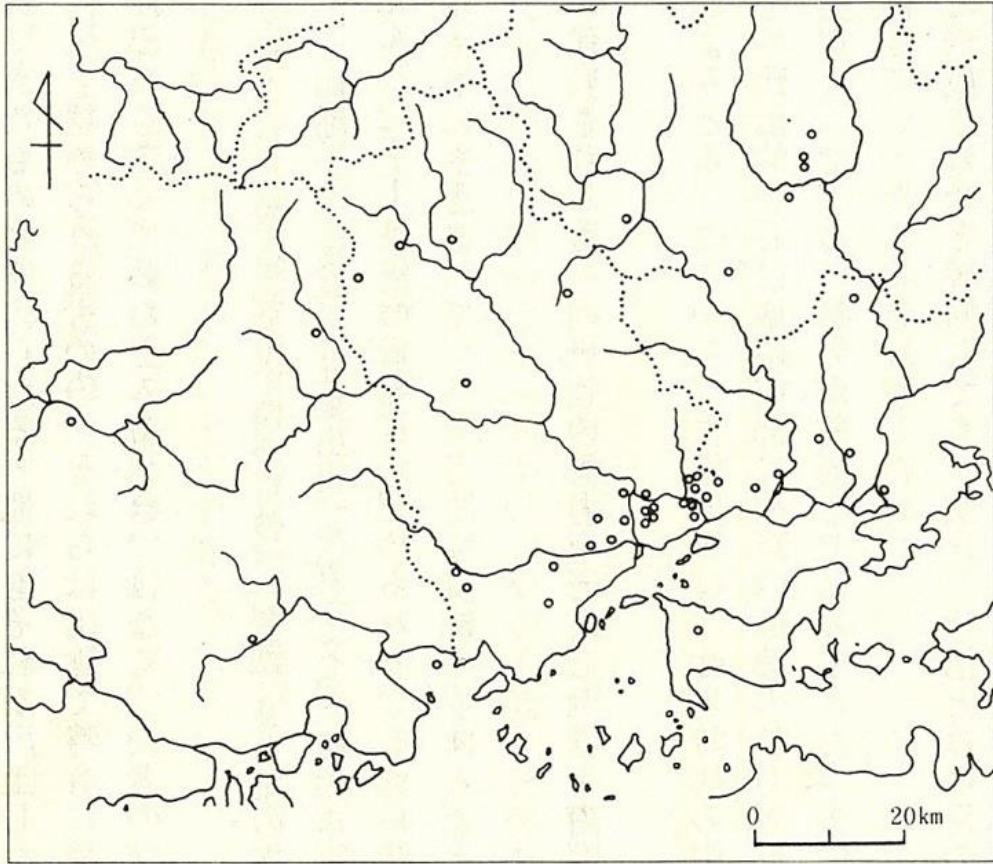


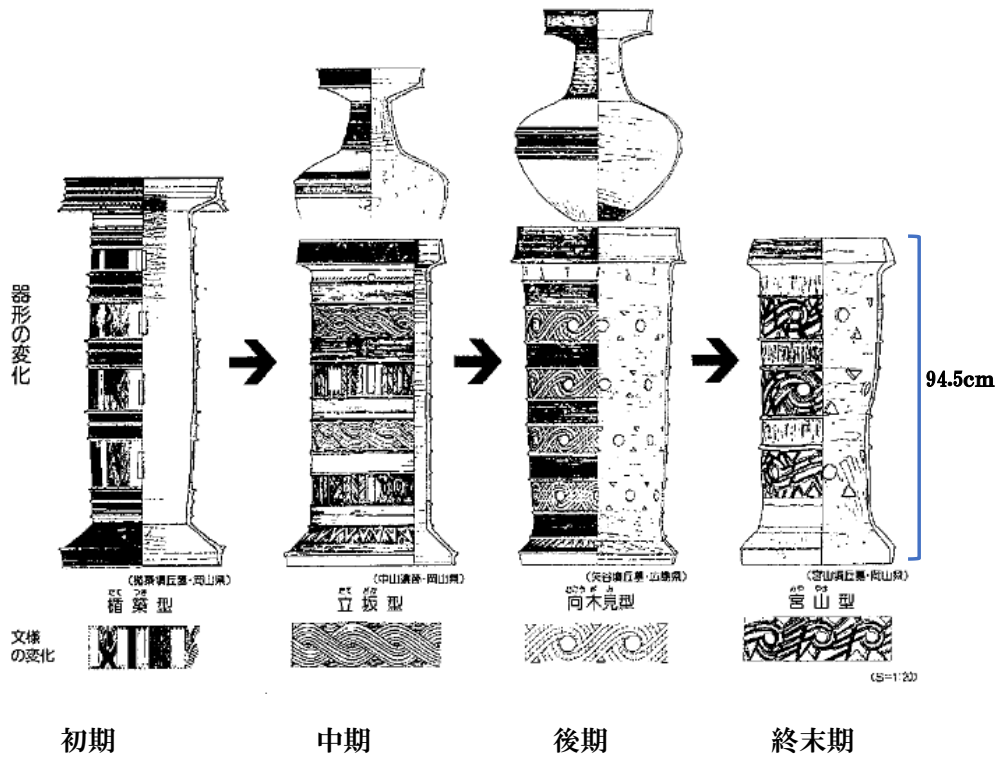
図17 特殊器台と壺の変化(上)と分布(下) (広島県立歴史民俗資料館1995)

吉備における特殊器台の変化

型 式	概 要
楯築型 (初期)	<ul style="list-style-type: none"> ・綾杉文、鋸歯文、綾杉文と三角形の組み合わせ、横に走る文様は見られない。 ・弧帯文様は帯をぐるぐる巻きにしたり、帯を潜らしたり、帯を折って反転させたり、帯を結んだりしたようにみえる。 ・横に走る弧帯文がまだ現れていない。 ・口縁部は 10 センチメートルくらいの幅があり、そこに幾つもの突帯文がめぐり突帯と突帯の間に文様を施している。
立坂型(立坂) (中期)	<ul style="list-style-type: none"> ・毛糸の束を捻ったような、あるいは波を抽象的に描いたような弧帯文様
立坂型(中山) (中期)	<ul style="list-style-type: none"> ・弧帯文と縦に分割した綾杉文が交互に付けられている。 ・綾杉の文様は全く施されず、横に展開する弧帯文様のみ。 ・矢谷墳丘墓(広島県三次市)
向木見(むこうぎみ)型 (後期)	<ul style="list-style-type: none"> ・立坂型と比べて線がやや太めで硬直している。 ・向木見遺跡(倉敷市)・矢谷墳丘墓(広島県三次市)・西江遺跡(岡山県新見市)・西山遺跡(倉敷市)など 30 数遺跡から出土
宮山型 (終末期)	<ul style="list-style-type: none"> ・特殊器台の口縁は分厚く、先が内に傾いており、特別な口縁部をしている。 ・文様は矢藤治山型を拡大したような文様で、弧帯文の線を 2 本、3 本と平行に重ねて横へ展開させて、それを短い直線で結んでいる。 ・文様が非常に複雑。新しく考え出された文様 ・特殊壺の口縁帯や頸には刷毛目が施され、二重口縁の土師器に似てきている。 ・壺の底は焼く前から穴を開けて酒などが入らないように作られていた。 ・宮山遺跡(古墳・岡山県総社市)
矢藤治(やとうじ)山型 (終末期)	<ul style="list-style-type: none"> ・向木見型が崩れ、省略された終末期の型式の一つ ・矢藤治山遺跡(古墳・岡山市)のみの出土例 ・特殊壺の口縁帯には鋸歯文が描かれている。



吉備地域の特殊器台形および特殊壺形土器出土遺跡の分布（近藤義郎「特殊器台と弥生墳丘墓」『えとのす』25号より）



なお、宮山型特殊器台は、次表のとおり、吉備で1遺跡、奈良県(大和)で4遺跡から出土しており、驚くべきことにそのなかに箸墓古墳が含まれている。

地域	遺跡	所在地	備考
吉備	宮山遺跡	岡山県総社市	前方後円墳(38m)
大和	箸墓古墳	奈良県桜井市	前方後円墳(280m) 撥形
	西殿塚古墳	奈良県天理市	前方後円墳(219m) 撥形
	中山大塚古墳	奈良県天理市	双方中円墳(120m) 撥形
	弁天塚古墳	奈良県橿原市	前方後円墳(100m超) 撥形

ご承知のように、箸墓古墳は邪馬台国近畿説において卑弥呼の墓とされている。

ということは、3世紀半ばの古墳ということになる。

しかしながら、前方後円墳は大和政権成立後の墓である。——と筆者はみている。

何故ならば、『日本書紀』が箸墓古墳の被葬者を倭迹迹日百襲姫命と記しているからである。

倭迹迹日百襲姫命の兄は吉備津彦である。

箸墓の宮山型特殊器台は、四道將軍として吉備に赴任した吉備津彦が妹の倭迹迹日百襲姫命のために供えたものである。——と、『日本書紀』を読めば当然そう解釈できる。『魏志倭人伝』を持ち出す必要などまったくない。

すると、撥形の前方後円墳は4世紀型の古墳ということになる。時間的にいえば、前方部の狭い柄鏡式から前方部が開いた撥型の順である。前方部が開くほど時代が遅くなる。

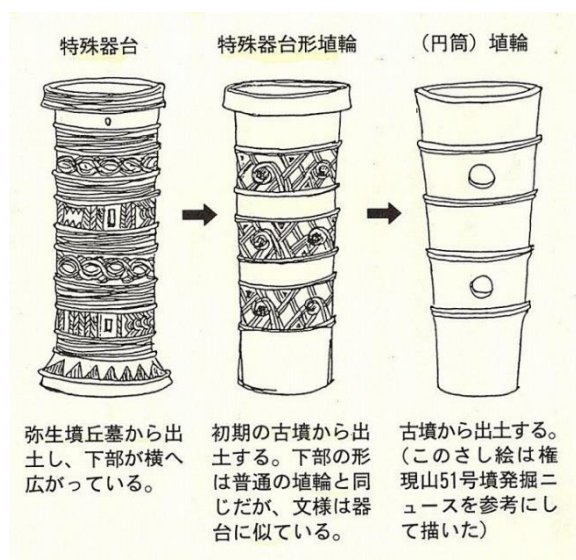
このように、『日本書紀』に基づいて考えを巡らせば、芋づる式に答えが見つかっていく。

そろそろ、『魏志倭人伝』を捨てて、『日本書紀』を古代史のバイブルとされたらいかがであろうか。

戦後80年、「戦後史観」の賞味期限はすでに過ぎてしまったのではないか。

新しい未来史観を築くべき時期がすでに到来しているのではないか。

そろそろ、新しい扉を開こうではないか。



楯築型

宮山型

出雲最大の西谷 9 号墓

出雲にもどろう。

3 号墓などが所在する「出雲弥生の森」から東へ伸びた丘陵先端部に、西谷 9 号墓がある。

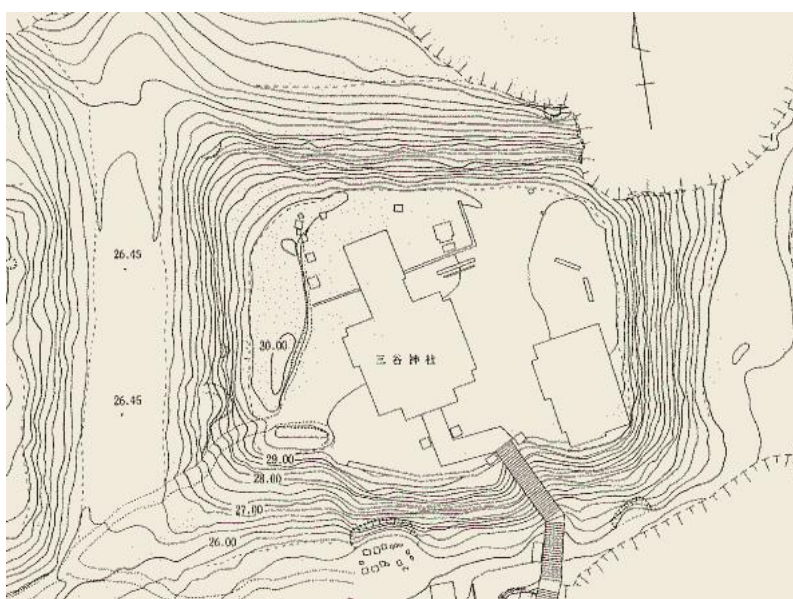
現時点における日本最大の四隅突出型墳丘墓である(42m×35m、高さ4.5m、突出部を含めると一辺約 60m)。

築造時期については、弥生時代終末期新段階(3 世紀前半)とみる説が一般的のようであるが、ご承知のとおり、弥生時代の年代論については従来の土器編年を捨てて、炭素十四年代測定法に基づく大幅な年代遡及を行なった結果、考古学界は取り返しのつかない誤りを犯してしまった。——と筆者はみている。

したがって、通説的な年代観は当てにならないとおもっているが、出雲の国譲りと大国主命の死が 260 年ごろとする安本美典氏の説を前提にすれば、岡山の石合六郎氏などが唱えられているように、出雲で最も大きい西谷 9 号墳が大国主命の墳墓である可能性もあり得る。



西谷 9 号墓



西谷墳墓群の四隅突出型墳丘墓

西谷墳墓群の概要

	説 明
1号	<ul style="list-style-type: none"> ・土砂崩れなどにより規模は不明であるが、一辺 15mを超えない規模か ・西谷墳墓群では最も小規模 ・4基の木棺(直葬)
2号	<ul style="list-style-type: none"> ・全体の4分の3が破壊された状況 ・南北 35m×東西 24m ・木棺もしくは木槨の土壙の底に砂利と朱 ・ガラス腕輪や吉備の特殊器台・特殊壺などが出土
3号	<ul style="list-style-type: none"> ・東西 40m×南北 30m、高さ 4.5m ・9号墓に次ぐ規模 ・斜面は貼石で覆われ、突出部から墳頂にかけての稜線部分は石を敷き詰めた道のようになっている。 ・墳丘頂上に8つの埋葬施設があり、首長とその一族の墓か ・首長とみられる第4主体は深さ 1.4メートルの土壙。木槨の内側に木棺を置く。 ・木棺内は水銀朱が敷き詰められ、ガラス管玉 20個と鉄剣 ・家族とみられる第1主体からは碧玉製管玉、ガラス製品(小玉、垂玉、管玉、勾玉など)が大量に出土 ・埋土上から 200 数十個の土器が検出。吉備の特殊器台・特殊壺や丹波・北陸系の土器
4号	<ul style="list-style-type: none"> ・東西 34m×南北 27m。埋葬施設は未調査 ・出雲の土器のほか吉備の特殊器台・特殊壺、山口県西部の土器が出土
6号	<ul style="list-style-type: none"> ・墳丘の大半が消失 ・東西約 17m×南北 8m以上、高さ約 2m(推測)
9号	<ul style="list-style-type: none"> ・東西 42m×南北 35m、高さ 5m ・出雲最大の規模 ・特別な被葬者を葬った可能性が大きい。 →大国主命か

大国主命の伝承地と考古学的な遺物との関連性

なお、大国主命の伝承地と銅鐸や四隅突出古墳と方形貼石墓の分布は、下表のとおりである。

日本海側で重複しているケースが多い。

これまた、大国主命の活動範囲あるいは出雲文化圏の核心的な領域を示すものであろう。

大国主命の伝承地および銅鐸・四隅突出古墳・方形貼石墓の分布状況

府 県	大国主命伝承地		銅 鐸		四隅突出古墳		方形貼石墓	
島根県	○	『出雲国風土記』	○	50	○	30	○	4
鳥取県	○	『古事記』	○	9	○	26	○	4
兵庫県	○	『播磨国風土記』	○	40			○	8
京都府	○	籠神社『勘注系図』	○	7			○	1
福井県			○	6	○	6	○	7
石川県	○	能登生国玉比古神社			○	1		
富山県	○	高瀬神社、気多神社			○	7		
新潟県	○	糸魚川の奴奈川姫						
岡山県	○	中山神社	○	11				
広島県			○	1	○	15		
香川県			○	12			○	1
愛媛県	○	『伊予国風土記』逸文						
徳島県			○	19				
高知県			○	1				
滋賀県			○	4				
岐阜県			○	4				
長野県			○	5				
大阪府			○	20				
奈良県	○	『古事記』	○	10				
和歌山県			○	13				
三重県			○	5				
愛知県			○	6				
静岡県			○	1				
福岡県	○	宗像三女神	○	鑄型				
佐賀県			○	鑄型				

(以下、つづく)

後期・邪馬台国の時代⑩

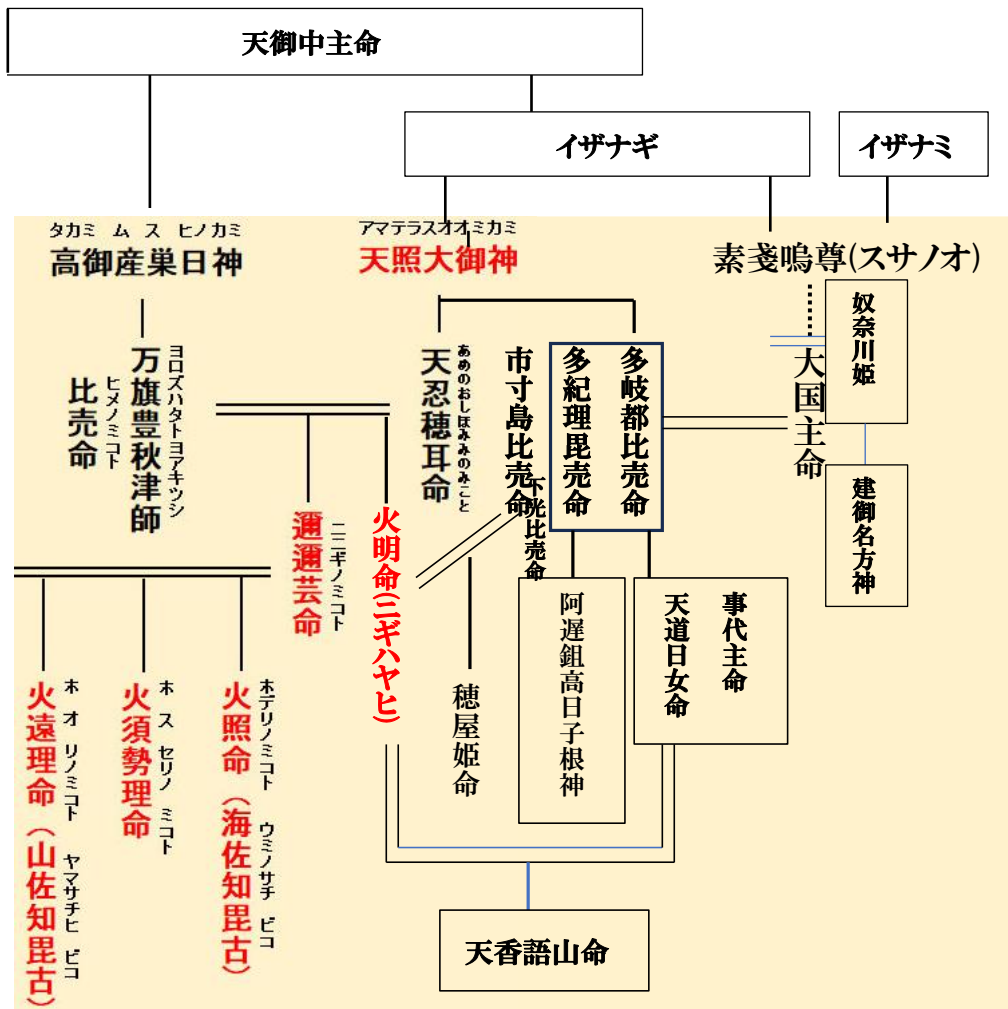
ニギハヤヒと丹波

河村哲夫

宗像三女神・ニギハヤヒ・大国主命の三者同盟の顛末

『日本古代通史』第 4 巻「後期・邪馬台国の時代」のなか(p91～)で、宗像三女神・ニギハヤヒ・大国主命の三者同盟について述べた。

ニギハヤヒはニニギノミコトの兄弟で、九州北部の鞍手郡あたりを根拠として、宗像三女神のうち市杵嶋姫命(イチキシマヒメ)を妃とし、大国主命は宗像三女神のうち多岐都比売命(タギツヒメ)と多紀理毘売命(タギリヒメ)を妃とした。



ところが、前述したように高天原勢力は大国主命に対して武力による威嚇によって出雲の国譲りを迫り、おそらく大国主命を死に至らしめた。

そして、天照大神の次男とされる天穗日命を出雲の新しい支配者に任命した。

と、同時に大国主命の同志ともいえるニギハヤヒを丹波に派遣した。

時間的な流れでいえば、次のとおりとなる。

- ① 260 年ごろ出雲の国譲り
- ② ニギハヤヒを丹波へ派遣
- ③ ニニギノミコを日向へ派遣(天孫降臨)
- ④ ニギハヤヒの近畿東遷
- ⑤ 300 年前後に神武天皇が近畿東遷(大和政権の樹立)

すなわち、出雲の国譲りのあとに、高天原勢力による急激な拡大政策が採られているのである。

そして、その勢いはつづき、わずか 40 年足らずの間に、九州・西日本地域を広域的に支配する新たな政治体制を構築している。

何ゆえ、こういえるのか。

そういう流れを、『古事記』『日本書紀』などの古代文献や、地域伝承・社伝などがこぞって伝えて
いるからである。

戦後史観の主流たる日本古典抹殺論は、本シリーズでは採用しない。

丹波の海部氏

天橋立のつけ根にある丹後一の宮の籠神社(京都府宮津市大垣)の神主家は、ニギハヤヒを祖とする海部(あまべ)氏である。

大化改新以前は、丹波の国の国造家であった。

この神社の祭神は、彦火明命(ニギハヤヒ)のほか、豊受大神・天照大神・天水分神(あめのみくまり)・海神(ワタツミの神)である。

この籠神社には、海部氏に関わる系図が伝えられている。

- ①『籠名神社祝部氏係図』1 卷(「本系図」)
 - ②『籠名神宮祝部丹波国造海部直等氏之本記』1 卷(「勘注系図」)
- である。

「本系図」

本系図は平安時代に作成されたものである。

「従四位下籠名神」とあることから、籠神社が「従四位下」であった期間、すなわち貞観 13 年(871)6 月 8 日～元慶元年(877)12 月 14 日の間に成立したとみられる。

「勘注系図」の注記にも、貞観年中(859～877 年)の成立とある。

制作者は当時の当主である第 33 世の海部直稲雄である。

体裁は、楮紙 5 枚を縦に継ぎ足した幅 25.7cm×長さ 228.5cm の大ききで、中央に「丹後国与謝

郡従四位下籠名神 従元于今所齋奉祝部奉仕 海部直等之氏」と表記し、以下淡墨による罫線を引いて、その上に神名・人名を記している。

そして、その上に「丹後国印」の朱方印を押しており(その数は 28 顆)、丹後国庁に提出し、その認可を受けたものであることがわかる。

その内容は、始祖彦の火明命(ニギハヤヒ)から第 32 世の海部田雄まで、各世 1 名の直系子孫のみを記した縦系図である。



籠神社

「勘注系図」

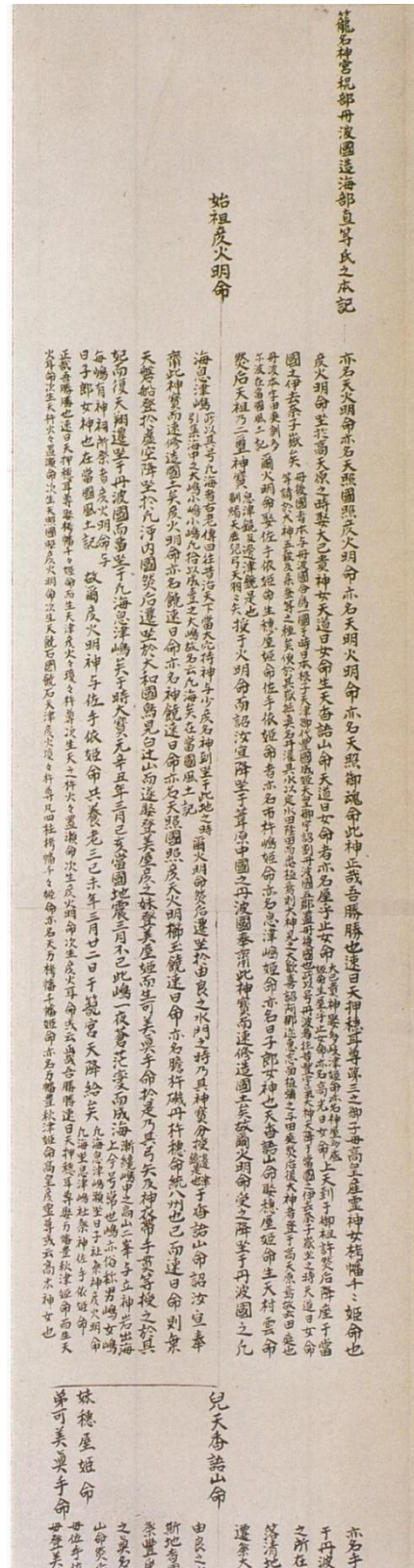
勘注系図は、本系図に細かく注を付したものである。

江戸時代初期の写本で、原本は仁和年中(885~889年)に編纂された『丹波国造海部直等氏之本記』という。

反故紙が用いられており、紙背には桃山時代に遡る天候や雲の形による「卜占図」が画かれている。

内容としては、始祖の火明命(ニギハヤヒ)から第34世までが記され、詳しい補注を加え、当主の兄弟やそこから発した傍系を記す箇所もあって、『古事記』『日本書紀』『先代旧事本紀』などを補完する独自の伝承を記している。

本系図と勘注系図は、昭和51年(1976)6月に一括して国宝の指定を受けた。



このうち、勘注系図の巻首部分について、筆者の現代語訳を紹介しよう。

「始祖彦火明命は、またの名を天照国照彦火明命(ひこほあかりのみこと)、またの名を天明火明命、またの名を天照御魂命という。

この神は正哉吾勝勝也速日天押穗耳尊(あめのおしほみみ)の第三の御子で、母は高皇産靈神(タカミスビ)の娘の栲幡千千姫命(たくはたちぢひめ)である。彦火明命が高天原におられたとき、大己貴神の娘の天道日女命(あめのみちひめ)を娶って天香語山命(あめのかごやま)が生まれた。天道日女命はまたの名を屋乎止女(やおとめ)という。

(大己貴神は多岐津姫命、またの名は神屋多底姫命を娶って、屋乎止女、またの名は高光日女命が生まれた)

(彦火明命は)高天原に上って御祖(みおや)のもとへ至り、その後、当国(丹波)の伊去奈子嶽(いさなごたけ)に降臨なされた。

(丹後国はもと丹波国と合わせて一国であった。日本根子天津御代豊国成姫天皇(元明天皇)の時代に、丹波五郡を割いて丹後国を置いた。

丹波と名づける理由は、昔豊受気大神が当国の伊去奈子嶽に降臨された際に、天道日女等が大神に五穀と桑蚕などの種をお願いした。そして伊去奈子嶽に真名井を掘り、その水を灌いで、陸田水田を耕し、五穀の種を植えた。それを見て、大神は大いに喜ばれ、『立派に植えた田庭かな』とおっしゃられた。その後大神は高天原に帰られた。これが田庭の由来である。丹波のものと字は田庭で、多尔波(たにわ)と読むと当国(丹波国)の風土記に記されている)

火明命は佐手依姫命を娶って穂屋姫命を儲けた。佐手依姫命は、またの名を市杵嶋姫命、またの名を息津嶋姫命、またの名を日子郎女神という。

天香語山命は穂屋姫命を娶って天村雲命が生まれた。

その後、天祖は二つの神宝(息津鏡と辺津鏡である。天鹿兎弓と天羽々矢を添えられた)を火明命に授けられ、『汝はこれより葦原中国の丹波国に降って、この神宝を奉じて、すみやかに治めよ』と命じられた。かくして火明命は丹波国の凡海(おおしあま)の息津嶋に降臨された。(凡海と名づけた理由について古老は次のように言う。『昔、天下を治めるに当たり、大穴持神と少彦名神がこの地においてなされた時、海中の大島小島を引き寄せ、およそ10の島で一つの大島を造ったので、凡海(おおしあま)と呼ぶようになった』このことは当国(丹波国)の風土記に記されている。

火明命はその後由良の港に遷られた時、その神宝(息津鏡と辺津鏡)を天香語山命に授けられ、『汝、この神宝を奉って、すみやかにこの国を治めよ』とおっしゃられた。

彦火明命、またの名は饒速日命(ニギハヤヒ)、またの名は神饒速日命、またの名は天照国照彦天火明櫛玉饒速日命、またの名は膽杵磯丹杵穗命にして八州(おおやしま)を治められた。

そうして、速日命は天磐船に乗り、空に上って凡河内(おおしかわち)国に降臨された。その後大和国鳥見白辻山に遷られ、そこで登美屋彦の妹の登美屋姫を娶って可美真手命(うましまじ)が生まれた。このため弓矢と神衣・帯・手貫(たぬき・籠手)などを妃の登美屋姫に授け、再び天を翔けて丹波国に戻り、凡海の息津嶋に留まっておられた。

ところが、大宝元年(701)三月己亥、丹波で地震が起こり三日間続き、この島は一夜で崩落して

海に沈んだ。(わずかに島の高山の二つの峯と立神岩が海上に残り、いまは常世島と名づけている。また、俗に男島と女島と称する。二つの島には祠があり、彦火明命と日子郎女神を祭っている。このことは当(丹波国)風土記に記されている)

そういうことで、彦火明命と佐手依姫命とともに、養老三年己未(719年)三月二十二日に籠宮に天降りされた。

(凡海の息津嶋の瀬に鎮座する日子社の祭神は彦火明命である。凡海の息津嶋社の祭神は佐手依姫命である。正哉吾勝勝也速日天押穗耳尊は栲幡千々姫命を娶って、天津彦火々瓊々杵尊が生まれた。次に天之杵火々置瀬命が生まれた。次に彦火明命が生まれた。次に彦火耳命が生まれた。あるいは正哉吾勝勝也速日天押穗耳尊は万幡豊秋津姫命を娶って、天火耳命が生まれ、次に天杵火々置瀬命が生まれ、次に天照国照彦火明命が生まれ、次に石饒石国饒石天津彦火瓊々杵尊が生まれた。およそ四子である。

栲幡千々姫命は、またの名を天万栲幡千々姫命、またの名を万幡豊秋津師姫命といい、高皇産霊尊あるいは高木神の娘という)」

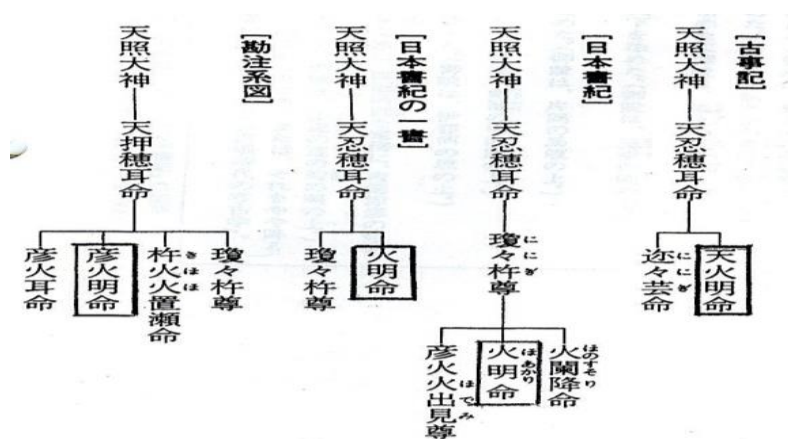
逐次、解説しよう。

(一) 彦火明命=ニギハヤヒの名

まず、彦火明命=ニギハヤヒについては、『古事記』『日本書紀』『先代旧事本紀』などにもその名が記されている。

文献	名称
『勘注系図』	彦火明命、天照国照彦火明命、天明火明命、天照御魂命、饒速日命神、饒速日命、天照国照彦天火明櫛玉饒速日命、膽杵磯丹杵穗命
『古事記』	邇芸速日命
『日本書紀』	饒速日命、櫛玉饒速日命
『先代旧事本紀』	饒速日命、天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊、天明火明命、天照国照彦天火明尊、胆杵磯丹杵穗命

(二) その兄弟

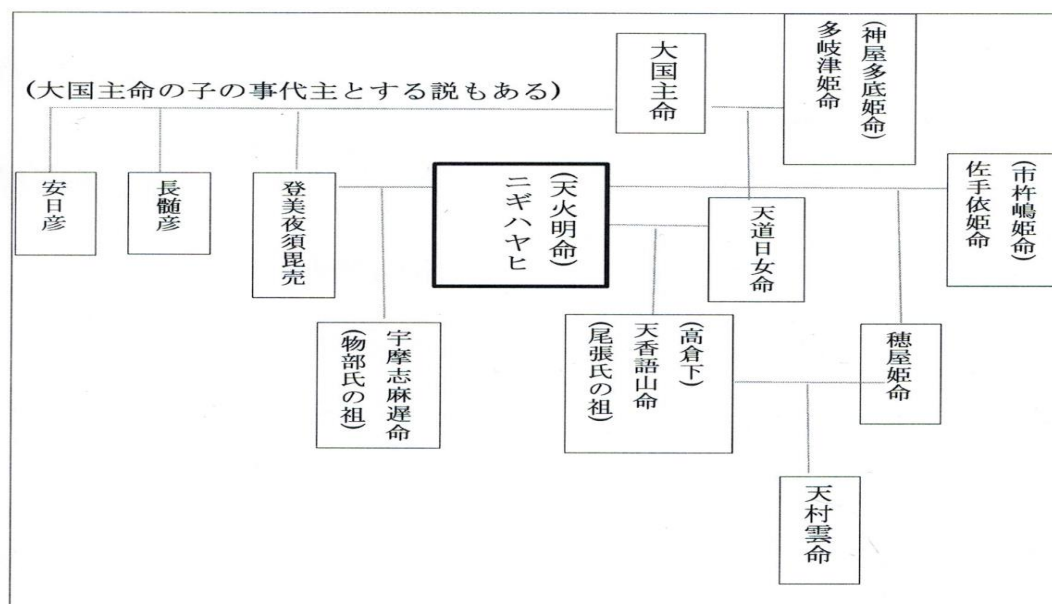


日向に天孫降臨したニギノミコとの関係でいえば、『日本書紀』本文の一例を除いては、『古事記』、『日本書紀』の一書、『勘注系図』のいずれも、二人兄弟としている。ただし、『勘注系図』のみは四人兄弟とする。

(三) 両親

『日本書紀』本文の一例を除いて、『古事記』、『日本書紀』の一書、『先代旧事本紀』、『勘注系図』のいずれも、父を天照大神の長男の天忍穗耳命とし、母を高皇産靈神(タカミスビ)の娘の万幡豊秋津媛命(栲幡千千姫命)とする。

(四) ニギハヤヒの家族関係



『先代旧事本紀』と『勘注系図』によれば、ニギハヤヒは宗像三女神の一人——佐手依姫命(市杵嶋姫命・息津嶋姫命・日子郎女神)を娶って穂屋姫命が生まれた。

また、大国主命の娘の天道日女命(屋乎止女)を娶って天香語山命が生まれた。

『先代旧事本紀』は、「天香語山命のまたの名は高倉下命」と記し、熊野で疲弊した神武天皇軍を救援するため、神剣を携えて駆けつけた人物と同一人物とする。

(五) 丹波に赴任

『勘注系図』には「御祖(みおや)」としか書かれていないが、高天原(後期・邪馬台国)の実権を掌握した祖父のタカミスビと母の万幡豊秋津媛命を指すのであろう。

ニギハヤヒは生前の大国主命と親密な関係を構築し、日本海方面の情報に精通していたはずである。

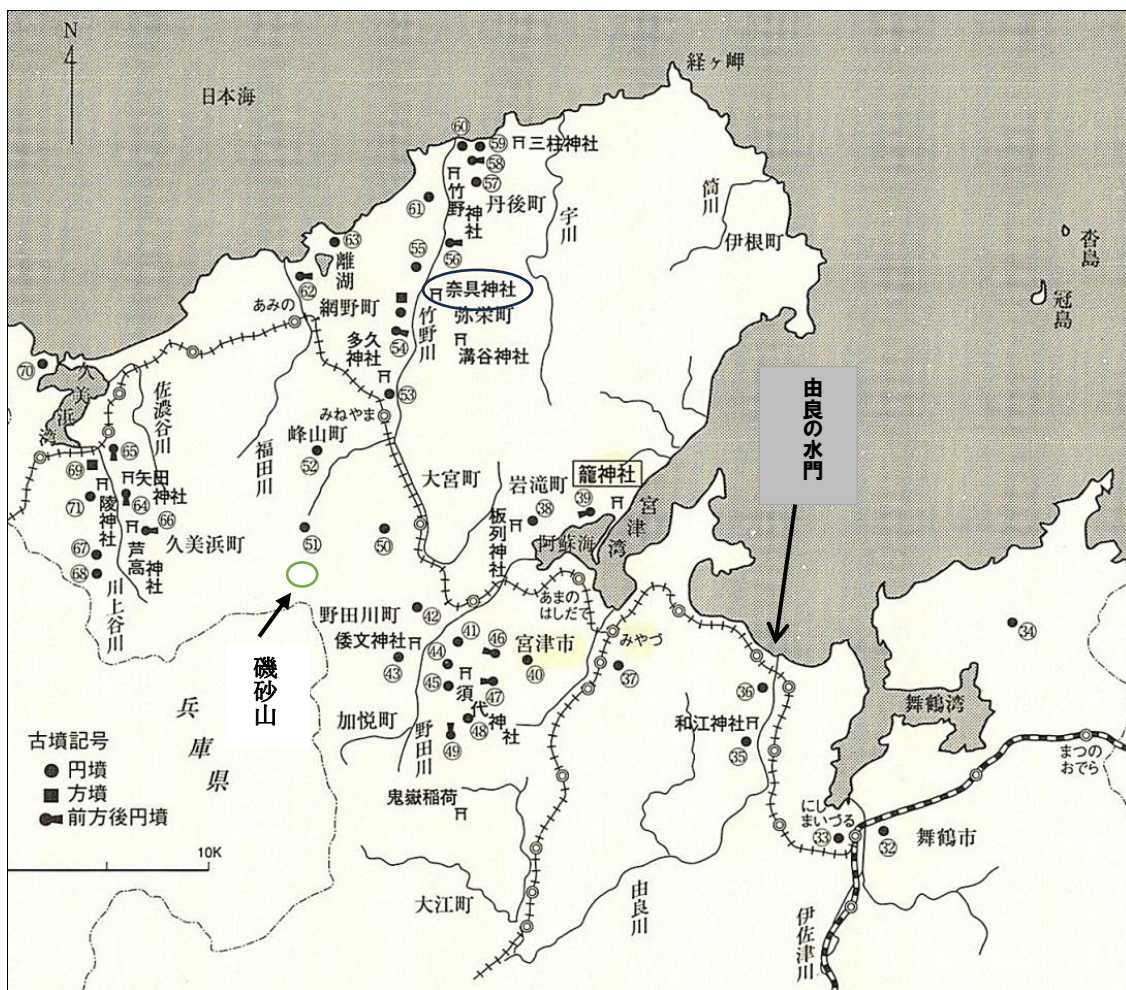
御祖の命を受け、妻の佐手依姫命(市杵嶋姫命)を伴って、丹波に赴任し、これから治める丹波

の地勢を観察するため、伊去奈子嶽に登って国見をしたとおもえる。

磯砂(いさなご)山(標高 661メートル)(京都府京丹後市峰山町)のことで、羽衣伝説の地として知られている。

『丹後国風土記』逸文によれば、丹後国比治の山(磯砂山)に真名井という池(女池)があり、8人の天女が舞い降りて水浴びをしていた。これを見つけた和奈佐という翁が一人の天女の羽衣を隠し、養女として連れ帰った。羽衣を失った天女はこれに従うしかなく、10年余り一緒に暮らした。働き者の天女が万病に効く酒をつくったおかげで翁の家は富み栄えたが、やがて心変わりした翁は、天女はもともと自分の子ではないと家から追い出してしまった。天女は泣く泣く北に去り、竹野の郡船木の里で亡くなった。村人たちは、天女を奈具社に祀り、豊宇賀能売命(豊受気大神)となったという。

奈具社とは、奈具神社(京都府宮津市由良)のことである。磯砂山から北に流れて日本海に注ぐ竹野川の右岸に位置する。祭神は、豊宇賀能売命(豊受気大神)である。

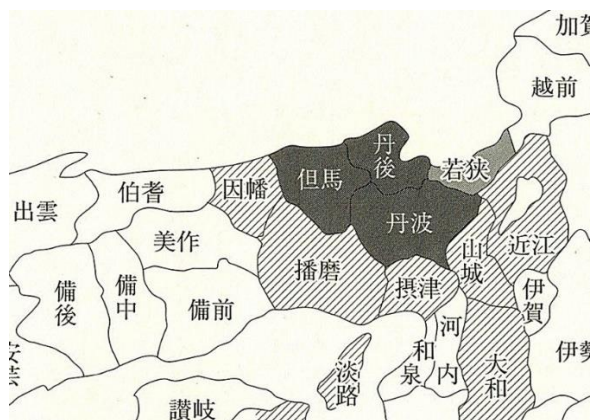


(六)丹波と丹後

つづけて「勘注系図」は、日本根子天津御代豊国成姫天皇、すなわち元明天皇(在位 707～715)の時代に丹後国が分割されたことを記す。

律令制以前の丹波は、但馬と丹後も含み丹波国造の支配領域とされていた。

7世紀の令制国成立に伴い、まず北西部を但馬国として分割し、その後、元明天皇の時代の和銅6年(713)4月3日に、北部5郡を丹後国として分割した。



(七)豊受気大神と万幡豊秋津媛命

「勘注系図」は、さらに丹波の由来について記す。

「昔豊受気大神が当国の伊去奈子嶽(磯砂山)に降臨された際に、天道日女等が大神に五穀と桑蚕などの種をお願いした。そして伊去奈子嶽に真名井を掘り、その水を灌いで、陸田水田を耕し、五穀の種を植えた。それを見て、大神は大いに喜び、『立派に植えた田庭かな』とおっしゃられた。その後大神は高天原に帰られた。これが田庭の由来である。丹波のもとの字は田庭で、多尔波(たにわ)と読むと当国(丹波国)の風土記に記されている」

この記事は、きわめて重要な問題をはらんでいる。

まず、その昔、豊受気大神が丹波の伊去奈子嶽に降臨し、大国主命の娘でニギハヤヒの妃でもある天道日女命の要請を受けて五穀と桑蚕などの種を授けたと記す。

豊受気大神というのは、『古事記』によれば出雲のイザナミの尿から生まれた和久産巢日神(わかむすび)の娘である。

『古事記』では豊受気毘売神と表記され、『先代旧事本紀』では豊受気比女神と表記される。ただし、『日本書紀』には登場しない。

「受気(ウケ)」は食物のことで、食物・穀物を司る女神とされる。

尿から生まれるわけではなく、暗記術の名残であることについては、すでに述べたとおりである(『日本古代通史』第4巻「出雲の神々」の章)。

この豊受気大神が丹波を訪れたとする「勘注系図」の記事は、前述した『丹後国風土記』逸文のなかの「村人たちは、天女を奈具社に祀り、豊宇賀能売命(豊受気大神)となった」という記事とも符合しているようにみえる。

しかしながら、豊受気大神と天道日女命は、大きく時代が異なる。

豊受気大神はイザナギから生まれた女神であり、天照大神やスサノオと同時代である。

しかしながら、天道日女命は宗像三女神の次の世代の人物である。

問題は、「勘注系図」によれば、豊受気大神が出雲ではなく、「高天原に帰った」と記されていることである。

出雲ではなく、高天原に帰った豊受気大神は、出雲の豊受気毘売神とは別人なのではないか。のちに述べるように、丹波における稲作は紀元前から始まっている。

ニギハヤヒやイザナミの時代よりも大ききさかのぼる。

豊受気大神が五穀の種を持参したという話は、長旅や航海の際の古代におけるいわば常識的な慣行について述べたものであって、稲作の起源とは無関係なのではないのか。

そういえば、高天原には「豊」という名のつく女性が確かに存在する。

ほかならぬ、ニギハヤヒの母の「万幡豊秋津媛命」である。卑弥呼の後継者となった「台与」も「豊」と読める。

	時代	備考
出雲の豊受気毘売神	イザナミの次世代(180年～)	・天照大神 ・卑弥呼(180～247年)
高天原の豊受気大神	ニギハヤヒの時代(260年～)	・万幡豊秋津媛命 ・台与(248～270年)

要するに、息子のニギハヤヒの丹波赴任に際して、九州高天原の万幡豊秋津媛命——いわば二代目天照大神が丹波を訪れたというおぼろげな記憶が、「勘注系図」の「高天原へ帰った」という記事につながったのではないか。

『晋書』によれば、台与は266年に最後の使者を洛陽に派遣しているが、卑弥呼と異なり、台与の晩年の状況についてはまったく情報がない。万幡豊秋津媛命についても同様である。天照大神の天の岩戸のようなエピソードはまったく残されていない。二人とも、晩年の情報は皆無である。

もし、万幡豊秋津媛命ないし台与が丹波を訪れていたとすれば、事はきわめて重大である。

ただし、そのことを証明することは、残された情報量では、きわめて困難というしかない。

(八)元伊勢

籠神社は元伊勢籠神社とも呼ばれる。

『日本書紀』によると、疫病の流行や流民などで社会が騒がしくなったとき、第十代崇神天皇は宮中で天照大神の八咫鏡と寝起きすることが災いの原因ではないかと考えた。

そこで、娘の豊鍬入姫命に命じて笠縫村(奈良県桜井市)において祭らせたが、その後、倭姫命によって丹波に移され、籠神社の奥宮の真名井神社(もと吉佐宮)において祭られたという。

倭姫命は、垂仁天皇と皇后の日葉酢媛の皇女で、景行天皇の妹である。

日葉酢媛は丹波の海部氏の娘であるから、その娘の倭姫命も海部氏の血縁に属する。よって、倭姫命が一時期、丹波に八咫鏡を移したというのも合点がいく。母日葉酢媛の人脈を頼ったのであろう。

その後、倭姫命は各地を巡幸して、最終的に伊勢の地に八咫鏡を移した。これが伊勢神宮内宮である。

いずれにせよ、籠神社にしばらく八咫鏡が移されたことから、「元伊勢」とも呼ばれる。

「伊勢へ詣らば元伊勢詣れ 元伊勢お伊勢のふるさとじゃ 伊勢の神風海山越えて 天橋立吹き渡る」

という民謡は、まさしくそのことを歌っている。

(九)伊勢神宮下宮と豊受気大神

さらには、5世紀後半の雄略天皇の時代のことである。

伊勢神宮外宮の『止由気宮儀式帳』によると、雄略天皇の夢枕に天照大神が現われ、「自分一人では食事が安らかにできないので、丹波国の比治の真奈井(ひじのまない)にいる御饌の神、筥由気太神(とゆけおおかみ・豊受気大神)を近くに呼び寄せなさい」とお告げがあったので、伊勢神宮外宮で祭ったという。

伊勢神宮	主祭神
内宮	天照大神
下宮	豊受気大神

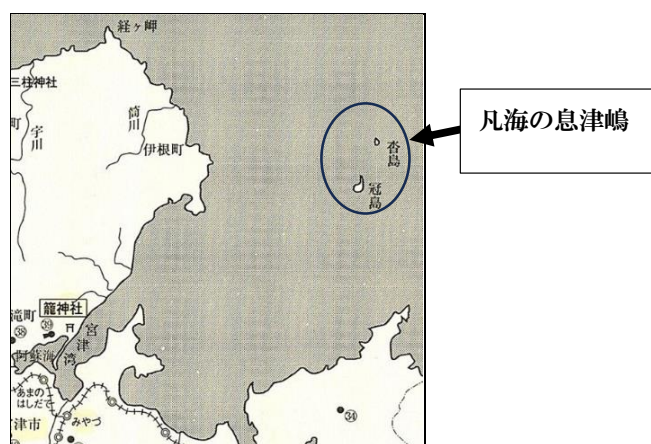
当然のことながら、この場合の豊受気大神は、御饌の神——食料の神という修飾語からみて、出雲のイザナミの娘の豊受気大神とみられていることは明らかである。

しかしながら、筆者は、前述したように、「高天原」の豊受気大神とは万幡豊秋津媛命ことであり、卑弥呼の後継者の台与ではないかと考えている。

歴史の世界に空想を持ち込むなという声が聞こえそうであるが、「出雲」ではなく「高天原」という一点に焦点を絞れば、そう考えざるを得ない。

(十)凡海(おおしあま)の息津嶋

「勘注系図」はさらにつづけて、「かくして火明命は丹波国の凡海(おおしあま)の息津嶋に降臨された」と記す。



そして、凡海と名づけた理由について古老の話として、

「昔、天下を治めるに当たり、大穴持神と少彦名神がこの地においでなされた時、海中の大島小島を引き寄せ、およそ10の島で一つの大島を造ったので、凡海(おおしあま)と呼ぶようになった」と、出雲とおなじような「国引き神話」を記している。

凡海(おおしあま)＝大島であり、小さな島々を引き寄せたのは大穴持神(大国主命)と少彦名神である。

大国主命の支配権が丹波に及んでいたことを示している。

詳しくは、前回の「大国主命の国づくり」の章を参照されたい。

息津嶋については、後述する。

(十一)息津鏡と辺津鏡

ニギハヤヒは丹波赴任に際して、息津鏡と辺津鏡という二つの神宝と天鹿兎弓と天羽々矢を天祖——おそろくタカミムスビと万幡豊秋津媛命から授けられていた。

昭和62年(1987)10月31日、突然籠神社に秘蔵されていたこの二つの鏡が公表されたのである。

「本系図」と「勘注系図」が国宝に指定されたのが、昭和51年(1976)6月のことであるから、ほぼ10年後のことであった。



辺津鏡 (へつかかがみ)
(内行花文昭明鏡)

息津鏡 (おきつかかがみ)
(内行花文長宜子孫八葉鏡)

	辺津鏡	沖津鏡
種類	前漢鏡【内行花文昭明鏡】	後漢鏡【内行花文長宜子孫八葉鏡】
直径	9.5cm	17.5cm
特徴	「日而月内而」「明而光」銘	「長・宜・子・■」銘
備考	栴島山遺跡1号石棺墓(佐賀県杵島郡北方町)出土の内行花文鏡と類似	平原遺跡(福岡県糸島市)出土の内行花文鏡と類似

ニギハヤヒが丹波に赴任するに当たって、前漢鏡と後漢鏡を持参したことについては、さまざま

な意味がある。

① 支配権付与の証し

高天原からいえば、ニギハヤヒに丹波支配の権限を授与した証しであり、ニギハヤヒにとっては、高天原から丹波を支配することを許された証しである。

北部九州を中心にカメ棺などに埋納された前漢鏡や後漢鏡なども、やはりその地域を支配する権限を付与した証しとみるべきであろう。

② 属人的権限から世襲的権限へ

しかも、天皇家の三種の神器のごとく、海部氏において代々世襲されて現在に至っている。

ところが、北部九州においては、鏡のほとんどがカメ棺などの墓から出土する。

その当時の支配権限は一身付与の属人的なものであり、世襲の権限ではなかったことを示している。

それにひきかえ、丹波に赴任したニギハヤヒとその末裔が、その支配権限を世襲的に許されている。そのことを、現存する辺津鏡(前漢鏡)と沖津鏡(後漢鏡)が実証している。

③ 前漢鏡と後漢鏡

籠神社に伝来した辺津鏡(前漢鏡)と沖津鏡(後漢鏡)の中国における製造時期は、洛陽焼溝漢墓から出土した前漢鏡と後漢鏡に関する中国科学院考古研究所の編年がいわば統一的な基準となっている。

表12 洛陽焼溝漢墓の時期別出土鏡

推定実年代	前漢中期 (前一八〇―七四)		前漢中期 (前七三―三三)		前漢晩期 (前三二―後六)		王莽 (後七―三九)		後漢前期 (後四〇―七五)		後漢中期 (後七六―一四六)		後漢晩期 (後一四七―一九〇)	
	第一期	第二期	第三期 前期 後期		第四期		第五期		第六期					
草葉文鏡	1													
星雲鏡	4	3												
日光鏡		3	8	5										
昭明鏡		3	10	6										
(1)変形四螭文鏡			9	2										
(2)四乳鏡			3	1		2								
(3)連弧文鏡				1										
(4)規玖鏡				4										
(5)雲雷文鏡											4			
(6)夔鳳文鏡											1			
(7)長宜子孫鏡											1			5
(8)四鳳鏡														1
(9)人物画像鏡														1
(10)変形四葉鏡														2
(11)三獸鏡														1
鉄鏡														7

『洛陽焼溝漢墓』(中国科学院考古研究所編、科学出版社 1959年刊) および奥野正男「内行花文鏡とその仿製鏡」(『季刊邪馬台国』32号)による。第六期に属する墓の陶器に、西暦170年(建寧3年)、190年(初平元年)にあたる年を朱で記したものがあつた。

	辺津鏡(前漢鏡)	沖津鏡(後漢鏡)
紀元元年	洛陽焼溝漢墓 (紀元前 64～紀元後 39)	
100 年		
200 年		洛陽焼溝漢墓(76～146 年)
		平原遺跡
260 年	椋島山古墳 ニギハヤヒの丹波進出(出雲の国譲りとほぼ同時)	
270 年	ニギハヤヒの近畿進出	
300 年	洛陽晋墓	洛陽晋墓

辺津鏡(前漢鏡)は日光鏡・昭明鏡に区分される鏡であり、製造年代は紀元前 73 年から紀元後 39 年までである。したがって、西暦 57 年に倭の奴の国王が洛陽に使者を派遣し、後漢の光武帝から金印を授与したときに下賜された鏡である可能性が高い。

沖津鏡(後漢鏡)は雲雷文鏡に区分される鏡であり、製造年代は西暦 76 年から 146 年までである。

奴国の時代の 107 年に再度使者を派遣した倭国王師升への返礼品として授与された鏡の可能性もあるが、239 年に初めて魏に使者を派遣した卑弥呼への返礼品であった可能性も考えられよう。

いずれにしても、奴国の時代の前漢鏡を携えて、ニギハヤヒは丹波に赴任している。

ということは、邪馬台国ないし高天原勢力は、奴国との連続性を有しているということになる。

奴の国王が入手したとみられる前漢鏡を、邪馬台国ないし高天原の支配者が保有し、ニギハヤヒに授与しているからである。

この点においても、卑弥呼が奴国の王族の出身であることを想起させる。

④ 『先代旧事本紀』に記された辺津鏡と沖津鏡

ニギハヤヒは尾張氏と物部氏の祖でもある。尾張氏は尾張地方をはじめ地方に展開し、物部氏は蘇我一族との抗争に敗れて没落した。

物部一族によって記されたのが、『先代旧事本紀』である。聖徳太子の序文がありながら、聖徳太子没後の記事が記されるなど、しばしば偽書の疑いをかけられてきた書物であった。

1945 年の太平洋戦争以後は、ほぼ決定的に偽書とみなされ、現在に至っている。

「国造本紀」やニギハヤヒに関する伝承など、他に類を見ない貴重な情報が記されているのに、まことに残念なことである。

筆者は『日本書記』を補完する資料として『古事記』と並び『先代旧事本紀』を活用させていただいている。念のために申し添えておきたい。

『先代旧事本紀』にも、ニギハヤヒが丹波赴任に際して持参した品々が記されている。

正哉吾勝々速日天 押穗耳尊
 天照太神詔曰 是言寄詔賜て、天降たまふ。
 瑞穂國は吾御子正哉吾勝々速日天 押穗耳尊の
 知す可き國なり」と言寄し詔賜て、天降たまふ。
 時に、高皇產靈尊の兒思兼神の妹萬幡豐秋津師
 姫袴幡干々姫命を妃と爲して、天照國照彦天火
 明櫛玉饒速日尊を誕生す。
 正哉吾勝々速日天 押穗耳尊奏曰 曰く「僕將に降
 らむと欲ひ裝束間に所生る兒あり。此を以て降可
 し」とのたまふ。詔して之を許たまふ。
 天神御祖詔て、天璽瑞寶十種を授る。羸都鏡一、
 邊都鏡一、八握劍一、生玉一、死反玉一、
 足玉一、道反玉一、蛇比禮一、蜂比禮一、
 品物比禮一と謂ふは是なり。
 天神御祖教詔て曰はく「若痛處有ば效十寶を令て
 良止布瑠部。如何爲は
 死人は反生なむ。是則ち、所謂る布瑠之言の本な
 り。

授けたのはやはり、天神(あまつかみ)の御祖(みおや)である。

何度か述べたように、この当時の高天原の実質的支配者であるタカミスビと万幡豊秋津媛命の父娘二人を指すであろうが、タカミスビ一人とみてもいいかもしれない。

問題は、『先代旧事本紀』に記されたニギハヤヒの神宝である。

種 類	天日槍の神宝				ニギハヤヒの神宝
	古事記	日本書紀			先代旧事本紀
		垂仁3年本文	垂仁3年別伝	垂仁88年	
玉	珠1貫	羽太玉	葉細珠	羽太玉	生玉
	珠1貫	足高玉	足高珠	足高玉	足玉
		鵜鹿鹿赤石玉	鵜鹿鹿赤石珠	鵜鹿鹿赤石玉	死反玉
					道反玉
比 礼	浪振比礼				蛇比礼
	浪切比礼				蜂比礼
	風振比礼				品物之比礼
	風切比礼				
壇		熊神籬	熊神籬	熊神籬	
劍 な ど		出石棒	出石槍		八握劍
			胆狭浅大刀		
		出石小刀	出石刀子	出石小刀	
鏡	奥津鏡	日鏡	日鏡	日鏡	沖津鏡
	辺津鏡				辺津鏡
	計8種	計7種	計8種	計6種	計10種

一見して、新羅の王子の天日槍が持参した神宝とよく似ている。

天日矛については、次の回で述べることにしたい。

ニギハヤヒが持参したものは、玉(生玉・足玉・死反玉・道反玉)と八握劍、鏡(冲津鏡・
辺津鏡)および比礼(蛇比礼・蜂比礼・品物之比礼)である。

玉・劍・鏡のいわゆる三種の神器と比礼(ヒレ)である。

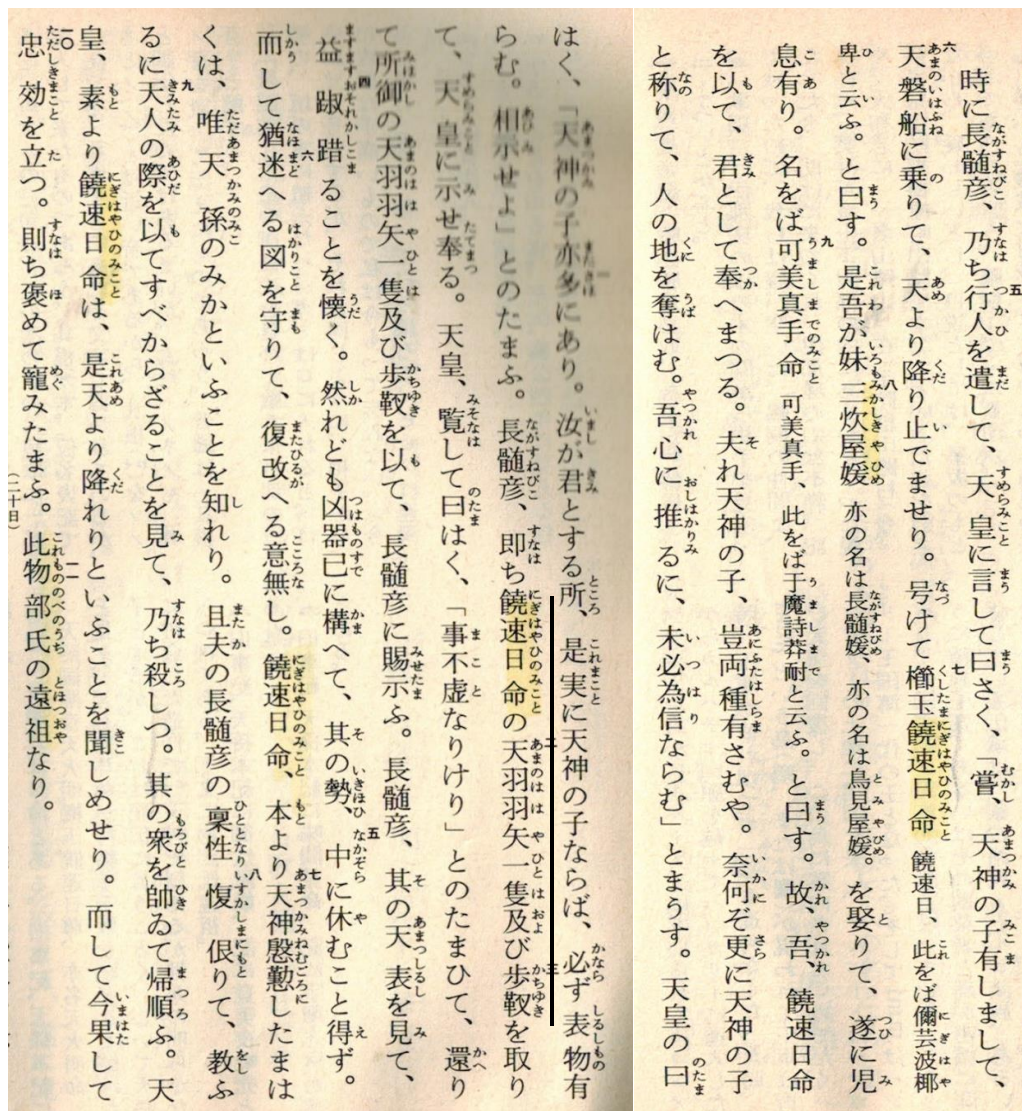
比礼(ヒレ)は、フカヒレや尾ビレなどとおなじ語源で、蛇比礼は蛇の皮、蜂比礼はハチの巣、品物
之比礼とは布切れ、熊の皮など、さまざまな切れ端を指すのであろう。

あとに続く本文を読めば、魔除けとして使われていることがわかる。

⑤ 『日本書紀』に記された天羽々矢と歩鞞

「勘注系図」は、ニギハヤヒが丹波赴任に際して、天祖から息津鏡と辺津鏡という二つの神宝の
ほか、天鹿兎弓と天羽々矢を授けられたと記している。

『日本書紀』の神武天皇紀にも、天羽々矢と歩鞞が登場する。



ずっと先のほうで述べるが、ニギハヤヒは丹波に赴任したのち、近畿に東遷している。

その後、神武天皇が日向から東遷して近畿を攻撃した。

そのとき、激しく抵抗したのが長髓彦(ながすねひこ)で、妹の三炊屋媛(みかしきやひめ・鳥見屋姫・登美夜毘売)はニギハヤヒの妃となっていた。

長髓彦はニギハヤヒに忠誠を誓い、神武軍と激しく戦い、「おなじ天神の一族なのにどうして攻めるのか」と神武天皇をなじり、ニギハヤヒが九州から持参した天羽々矢と歩鞞(かちゆき・矢を入れる道具)を見せた。

神武天皇が持ち帰って確認すると、自分が授与された天羽々矢と歩鞞とおなじであった。

『日本書紀』は以上のように記す。

⑥ 息津鏡と辺津鏡を天香語山命に授ける

なお、「勘注系図」には、ニギハヤヒが凡海の息津嶋から由良の港に遷ったとき、神宝の息津鏡と辺津鏡を息子の天香語山命に授けたことが記されている。丹波の支配権を譲渡して近畿に向かったのであろう。

⑦ 近畿から丹波に戻る

「勘注系図」によると、ニギハヤヒは近畿を立ち去る際に「弓矢と神衣・帯・手貫(たぬき・籠手)など」を妃の登美屋姫に授け、「再び天を翔けて丹波国に戻り、凡海の息津嶋に留まった」という。

(十二)大宝元年(701)三月の大宝大地震

『続日本紀』にも記された大地震である。

「勘注系図」は、

「大宝元年(701)三月己亥、丹波で地震が起こり三日間続き、この島は一夜で崩落して海に沈んだ。(わずかに島の高山の二つの峯と立神岩が海上に残り、いまは常世島と名づけている。また、俗に男島と女島と称する。二つの島には祠があり、彦火明命と日子郎女神を祭っている。このことは当(丹後国)風土記に記されている)」

と記す。

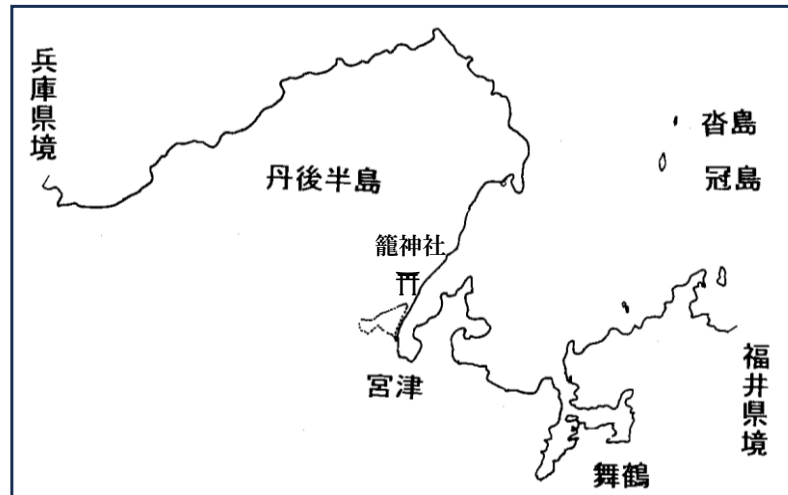
大きな島が海に埋没し、二つの山の峯だけが海上に残った。

「俗に男島と女島と称する」と「勘注系図」に書かれているが、常世島＝冠島＝大島＝男島のこと、沓島＝小島＝女島のことである。

冠島には、老人島(おいとしま)神社あるいは恩津島神社といわれる神社があり、祭神はニギハヤヒと宗像の日子郎女命である。男島ともいう。

沓島を女島ともいう。

男島と女島を合わせて息津島という。ニギハヤヒが最初に拠点とした島である。



60メートル以上陥没するほどの地殻変動について疑問視する説も根強いが、海に潜ったダイバーなどの間では、冠島周囲の海底の一部に弥生時代に創られたとおぼしき遺跡のような人工的痕跡があるとの噂もあるというから、いずれにしろ本格的な学術調査が必要であろう。関係者の積極的な取り組みを期待したい。

辰韓(のちの新羅)の祖は赫居世

『三国史記』新羅本紀によると、紀元前後の朝鮮半島南部の慶州には、楊山村(後の梁部もしくは及梁部)・高墟村(後の沙梁部)・珍支村(後の本彼部)・大樹村(後の漸梁部もしくは牟梁部)・加利村(後の漢祇部)・高耶村(後の習比部)という6つの村(新羅六部)があったという。

あるとき、楊山の麓の蘿井(慶州市塔里)の林で、馬が鳴いていることに気がついた高墟村村長の蘇伐都利(そぼつとり)がその場所に行くと、馬が消えてあとには大きい卵があった。その卵を割ると中から男の子が出てきたので、村長たちはこれを育てた。

10歳を過ぎるころには人となりが優れていたもので、6人の村長は彼を推戴して王とした。これが斯蘆国初代の王の赫居世で、姓を朴という。

このとき13歳で、前漢の五鳳元年(紀元前57年)のことという。

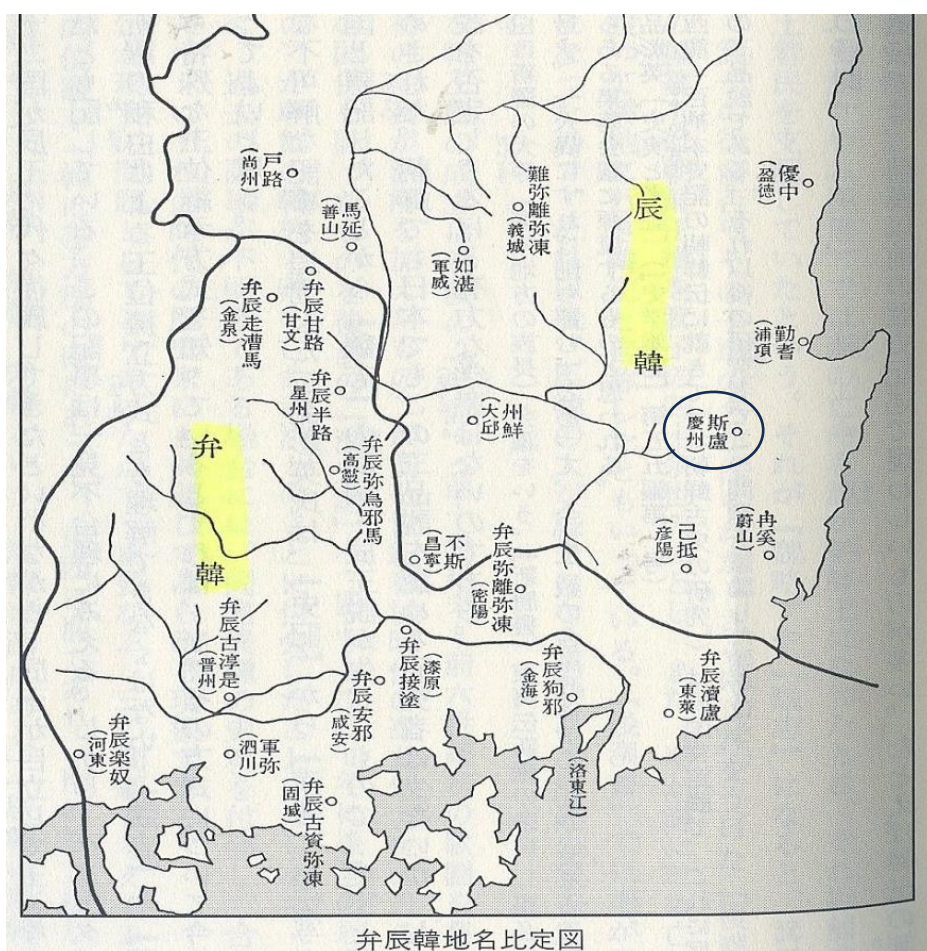
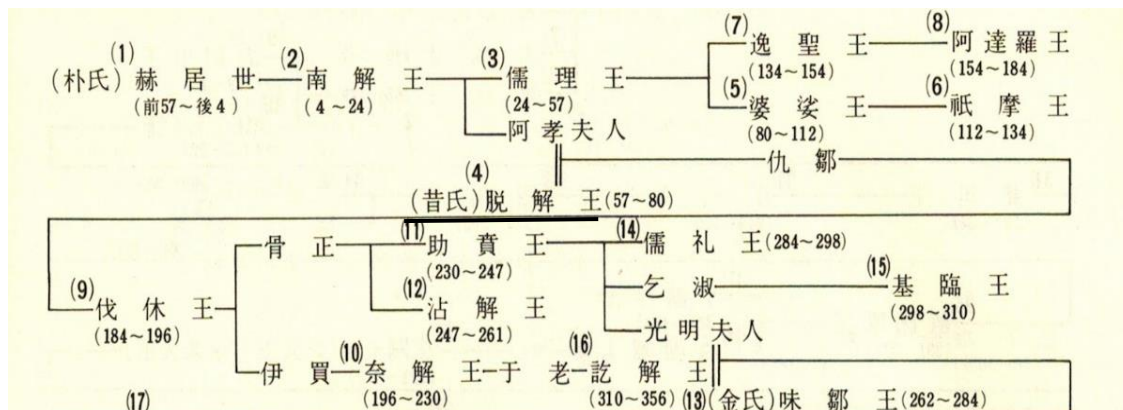
即位するとともに居西干と名乗り、国号を徐那伐(ソナボル)といった。

赫居世を補佐したのは倭人の瓠公(ここう)という。新羅の3王統の始祖のすべてに仕えた新羅建国時代の重要人物である。瓠(ひさご・瓢箪)を腰に下げて海を渡ってきたことからその名がついたと『三国史記』は伝えている。

初代新羅王の赫居世居の朴姓も同じ瓠から取られているため、同一人物を指しているのではないかという説もある。

また、脱解尼師今は新羅に着した時に瓠公の家を謀略で奪ったという。この瓠公の屋敷が後の月城(歴代新羅王の王城)となったという。

新羅王の系譜



脱解王は丹波出身の倭人

『日本古代通史』第1巻の「奴国の時代」において紹介したとおり、『三国史記』新羅本紀には、「倭国の東北一千里のところにある多婆那国で、その王が女人国の王女を妻に迎えて王妃とし、妊娠してから7年の後に大きな卵を生んだ。王は王妃に向かって、人でありながら卵を生むというのは不吉であり、卵を捨て去るように言った。しかし王妃は卵を捨てることに忍びず、卵を絹に包んで宝物と一緒に箱に入れて海に流した。やがて箱は金官国に流れ着いたが、その国の人々は

怪しんで箱を引き上げようとはしなかった。箱はさらに流れて、辰韓の阿珍浦の浜辺に打ち上げられた。そこで老婆の手で箱が開けられ、中から一人の男の子が出てきた。このとき、新羅の赫居世居の39年(紀元前19年)であったという。老婆がその男の子を育てると、成長するにしたがって風格が優れ、知識が人並みならぬものになった。長じて、第2代南解王5年(8年)に南解王の娘を娶り、10年には大輔の位について軍事・国政を委任された。南解王が死去したときに『賢者は齒の数が多い』という当時の風説をもとに餅を噛んで齒型の数を比べ、儒理王に王位を継がせた。儒理王が57年10月に死去したとき、儒理王の遺命に従って脱解が王位についた」

とある。

西暦57年に丹波出身の脱解王が第4代の王になったという。まさに、倭の奴の国王が後漢の光武帝から金印をもらった年である。

丹波から朝鮮に渡った倭人の脱解王は、金官国を経由して辰韓の地に到着し、長じて西暦57年に辰韓の王位についた。その翌年には、脱解王は、倭人の瓠公を大輔の要職に据え、

「夏五月、倭国と国交を結び、使者を交換した」

と、『三国史記』に記されている。

第1巻で指摘したように、まさしく、「倭の奴国王—瓠公(倭人)—脱解王(倭人)」との間に、倭人連合ともいべき特別の盟約関係が築かれ、かつ「辰韓—加羅—奴国」という海を介した連合が形成されている可能性が高い。

丹波についても、このような日本海交流の一員として、きわめて大きな役割を担っていたはずである。

古代丹波の遺跡

日本海に面した「出雲・伯耆・丹波・越」のラインは、豊かな縄文文化とともに、個性的な弥生時代の繁栄がうかがえる地域である。

前述したように、弥生時代終末期に、出雲・伯耆・越に四隅突出型墳丘墓が現われ、丹後地方に方形貼石(はりいし)墓が現われる。

これまた前述したように、出雲の中野美保遺跡の四隅突出型墳丘墓の墳丘下から時代の古い方形貼石墓が確認されたことから、四隅突出型墳丘墓の起源は方形貼石墓とみる見方がほぼ定説となっている。

というより、丹波地方は出雲地方において四隅突出型墳丘墓が主流になった時代においても、従来の方形貼石墓を維持しつづけたというべきかもしれない。

なわち、出雲文化の影響を色濃く受けながらも、独自の丹波文化を維持発展させている点に、丹波の特質を見出すべきであろう。

しかも、出雲よりもはるかに近畿に近いという地勢から、大和政権時代においては日本海の拠点と位置づけられ、崇神天皇時代に四道將軍の一人・丹波道主命が丹波を制圧し、大和政権の直轄地的な支配を受けるようになった。現在でも京都府に属しているのは、平安京の日本海側の玄関口であったことに由来するといえよう。



第1図 弥生時代中期～後期前葉の貼石を持つ墳墓の分布

日吉ヶ丘遺跡

日吉ヶ丘遺跡(京都府与謝郡加悦町明石)は丹波を代表する方形貼石墓である。弥生時代中期中葉から後半(紀元前2世紀～紀元前後)の丹後初の王墓とみられている。隣接して、日本海三大古墳の一つに数えられる蛭子山古墳がある。



日吉ヶ丘墳墓は、弥生時代の中頃(紀元前2～1世紀)に造られた大型の方形貼石墓です。墳形は、少しいびつな長方形で、大きさは長辺約32m、短辺約20m、高さは最大約2.7mです。同じ時代では全国二番目の大きさです。埋葬部は墳丘の中央南寄りに一基だけ確認され、槽

状木棺に埋葬されたと思われます。棺の中からは真っ赤な朱と緑色の勾玉 677 個以上が出土しました。これらは葬られた豪族の顔の上か、頭の下に副葬されたと思われます。古墳公園の蛭子山古墳など日本海三大古墳が造られた4～5世紀の古代丹後の繁栄が、日吉ヶ丘墳墓の発見によって、さらに 400 年以上も遡ることがわかりました。平成 18 年 3 月 与謝野町教育委員会



奈良岡遺跡

奈良岡遺跡(京都府京丹後市弥栄町溝谷)は、竹野川中流域の弥生時代拠点集落の一つであり、100 基以上の住居・建物跡などが確認されている。

そのうち、水晶玉工房跡は約 24 基から、水晶原石や完成品に近い関連遺物が大量に出土した。

生産された水晶玉は、大・中・小の小玉(直径約 6 mm)を中心に、そろばん玉、なつめ玉、管玉などである。

原石の粉砕から表面加工、研磨など 10 工程を経て完成品が作られたことが明らかになったという。また、原石を割るために使った、たがねや穴をあけるためのきり・針などの鉄製工具類、玉を磨く砥石なども見つかった。

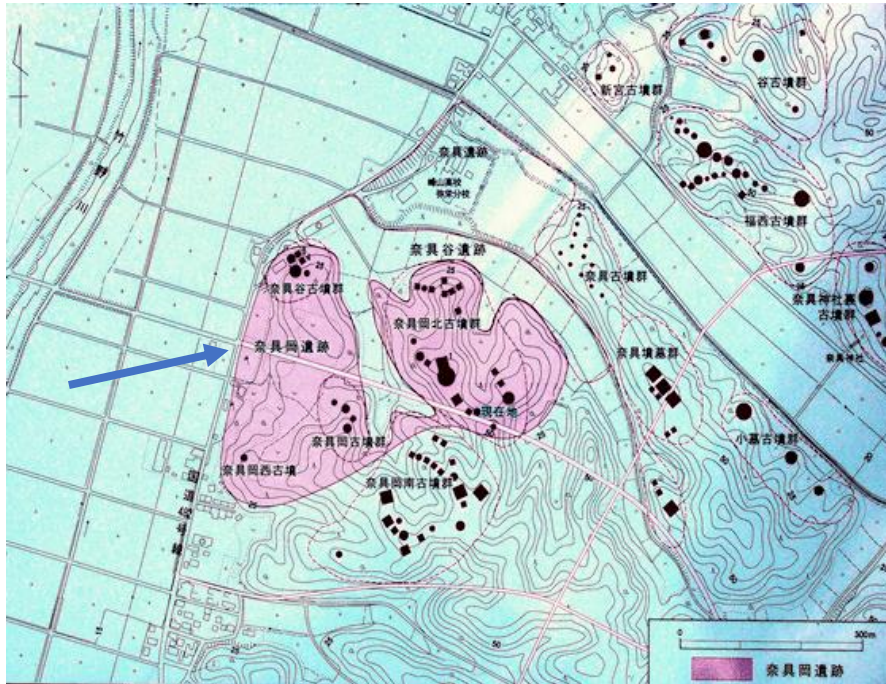
鉄製工具は、朝鮮半島から直接輸入されたものとみられ、ほかに鉄斧、鉄鎌や加工直前段階の板状、棒状になった鉄素材など約 2,600 点が見つかった。

鍛冶炉などは見つかっていないが、たがねなど一部の鉄製品は初歩的な加工が施されていたとみられ、国内最古の鉄加工技術を有する集団が丹後半島に存在していた可能性が指摘されている。

ちにみに、原料の水晶原石などをどこから入手したのか不明であり、かつ、製作された完成品がどこへ供給されていたのかもよくわかっていない。

九州西日本で出土した水晶製玉類の多くは奈良岡遺跡のものとは異なり、かつその生産量に比

較して出土例が少ないため、鉄の交換財として朝鮮半島南部へもたらされた可能性が指摘されている(野島永・河野一隆 2001)。ただし、これに対し、朝鮮半島との交換財ではなく、瀬戸内・近畿地方へ供給されたとする異論も出されており(中村大介 2015)、確定的な結論は出ていない。



215 | 水晶製玉作りの過程と鉄・石製の穴をあける工具
上左・長7.1cm / 弥生町 奈具岡遺跡 / 弥生中期後半

なお、九州西日本地域の弥生墳墓から出土した水晶製玉類の状況は次表のとおりである(平郡達哉・建神結香子『弥生時代西日本における副葬水晶製玉類について』より)。

表 1. 弥生時代西日本における水晶製玉類出土墳墓一覧

	所在地	遺跡名	遺構名	時期	出土状況	数量	型式	特徴・備考	共伴玉類
1	長崎県対馬市上対馬町古里宇所藩	塔の首	2号石棺墓	後期前半 ～中頃	棺内遺物→銅剣1、管玉1、水晶玉1、ガラス小玉およそ1400、土器3	1	有稜Ⅱ	小形霰玉(長さ0.7mm)中央部に鈍い稜、片面穿孔。	碧玉管玉1、ガラス小玉1400
2	長崎県対馬市峰町木坂ヨケジ	木坂	5号石棺	後期末	床面の南側の短側壁近くに、水晶玉1、ガラス小玉200	1	有稜Ⅰa	長さ11.8mm、幅11.6mm。両面穿孔。	ガラス小玉20
3	長崎県対馬市美津島町久須保蔵ノ本	かがり松鼻	石棺	後期前半 ～中頃		4		30	ガラス小玉
4	長崎県老松市芦辺町深江栄触・深江鶴亀触、石田町石田西触	原ノ辻原ノ久保B区	1号甕棺	後期後半 ～終末期		1	有稜Ⅲ	鈍い稜線	ガラス小玉
5	長崎県平戸市大久保町峰久保	田助古墳	石棺?	後期後半 ～終末期		1			
6	佐賀県唐津市半田字天神ノ元	天神ノ元	K-1 甕棺	後期前半		1	有稜Ⅱ		
7	佐賀県鳥栖市元町字内畑	内畑	SJ07甕棺墓	後期前半		2	無稜Ⅲ		
8	福岡県糸島市三雲	三雲八龍I-18地区	1・2号土壇	後期後半 ～終末期		4	有稜Ⅱ		ヒスイ勾玉、碧玉管玉、ガラス小玉
9	福岡県福岡市南区日佐4丁目	日佐原E群弥永原	15号石蓋土壇	後期後半 ～終末期		21			ヒスイ勾玉、碧玉管玉
10	福岡県福岡市西区吉武	吉武橋渡	3次調査1号木棺	後期中期後半 ～後期初頭?		2	有稜Ⅲ		碧玉管玉16、ガラス小玉35
11	福岡県鞍手郡鞍手町新北入生高木	高木	D7号土壇墓	中期中葉	副葬品としてはほほ東を頭とした場合、頸部に水晶玉2、管玉11、ガラス小玉8	2	無稜Ⅱ	長さ22mm、径18mm、孔径4.5mm。両面穿孔。	碧玉管玉11、ガラス小玉8
12	福岡県宮若市沼口字沙井掛	沙井掛	D115号土壇墓	後期末	頭位部の右側から斜め部並んだ状態。勾玉が前面の中心で管玉、水晶玉が交互に連なる。	10	有稜Ⅱ	長さ6.8～8.5cm、最大幅4.3～6.2cm、孔径0.4mm～2.2mm。透明度が高い。片面穿孔。	ヒスイ異形勾玉1、碧玉管玉10
13	福岡県京都郡みやこ町徳永	徳永川ノ上	I-8号木蓋(?)土壇墓	後期後半 ～終末期	右耳飾としてガラス小玉16、ガラス粟玉43、水晶丸玉1	1	無稜Ⅲ	長さ6.0mm、径7.1mm、孔径1.2mm。両側を平坦に研磨。片面穿孔。	ヒスイ勾玉、碧玉管玉、ガラス小玉
14	福岡県築上郡上毛町大字下唐原	穴ヶ葉山	11号墓石蓋土壇	後期後半 ～終末期		1	有稜Ⅱ		
15	大分県大分市浜	浜	2号石棺墓	後期後半 ～終末		1	有稜Ⅲ		
16	岡山県浅口市鴨方(旧：鴨方町)	和田	B区1号土壇	後期	床面から勾玉3、管玉7、水晶玉3、ガラス小玉26が一連状態で出土	3	有稜Ⅰb 有稜Ⅱ	内1点は長さ8.1mm、径8.0mm、孔径1.0mm。その他2点は長さ8.0、8.6mm、径6.1、6.5mm、孔径0.8、1.1mm。両面穿孔。	ヒスイ勾玉3、碧玉管玉7、ガラス小玉26
17	岡山県倉敷市西尾	辻山田	10号土壇	後期		3	有稜Ⅱ	完形2、小断片1出土。長さ8mm、径6mm。片面穿孔。	ヒスイ勾玉4、碧玉管玉7、ガラス小玉11
18	香川県高松市太田上町	太田原高州	主体部2-1木棺	後期前葉	水晶玉7のみでの出土	7	有稜Ⅲ	長さ4.46～5.84mm、径6.35～7.16mm。中央に鈍い稜線。透明度が高い。片面穿孔。	
19	京都府京丹後市大宮町三坂(旧：大宮町)	三坂神社	3号台状墓木棺	後期前半	水晶玉8+ガラス小玉10+水晶玉8+ガラス勾玉が頭頂部付近に一連して出土	16	有稜Ⅰb 有稜Ⅲ	長さ3.8mm～5.7mm、径5.0～6.1mm、孔径0.9～1.5mm。中央に鈍い稜。透明度は低い。片面穿孔。	ガラス勾玉1、ガラス小玉10

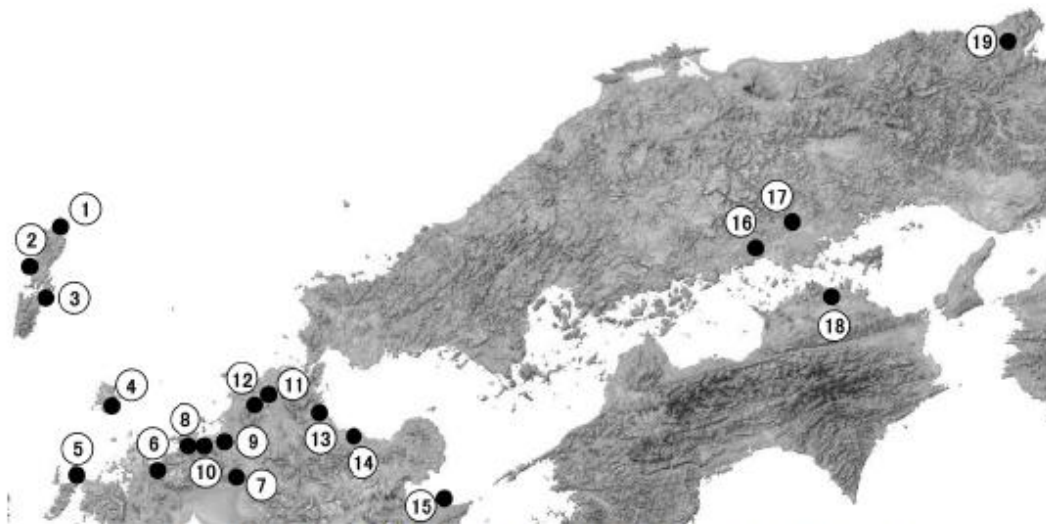


図 1. 弥生時代西日本における副葬水晶製玉類出土遺跡の分布 (番号は表 1 に対応)

大風呂南 1 号墳

大風呂南 1 号墳(京都府与謝野町岩滝)は、天橋立を見下ろす高台に築かれた弥生時代後期後半(2 世紀後半)の墳墓である。

青く透き通ったガラス釦(腕輪)をはじめ、11 本の鉄剣、九州からの交易品と推定される 13 個の銅釦などが発見され、まさに王墓にふさわしい墓である。

【出土品】ガラス釦 1 点、銅釦 13 点、貝輪(残欠)1 点、ガラス勾玉 6 箇、碧玉管玉 356 個土器など



京都新聞 1999.6.2



Kyoto Shinbun news 1999.6.2

岩滝町出土「ガラス釦」
中国産のカリガラス製？

中国産のカリガラス製の可能性が高いことが判明した大風呂南 1 号墳から出土したガラス釦

昨年9月、京都府与謝郡岩滝町の大風呂南1号墳から出土した弥生時代のガラス製の腕輪「釦」(くしろ)が、中国産のアルカリ珪(けい)酸塩ガラス(カリガラス)製である可能性が高いことが、1日までに奈良国立文化財研究所が行った成分分析の結果から明らかになった。カリガラスの遺物としては最大級の大きさという。同時に、釦の鮮やかな青色は鉄で着色するという珍しい手法が使われていたことも分かり、古代丹後の勢力の大きさを示すとともに、ガラス釦の入手経路や成形加工技術の解明に期待が寄せられている。

カリガラスは、中国で原料となる鉾石を溶解した後、日本に運び込まれたらしい。丹後半島からはこれまでも、カリガラス製の管玉や小玉が多く見つかり、管玉類は丹後で加工していた事もわかっている。しかし、ガラス釦が国産か中国産かについて今回の調査では判明しなかった。

奈文研によると、青色のガラスは通常、銅かコバルトを使って発色するが、ガラス釦には鉄が使われていた。鉄で着色したカリガラス製品は、奈良県斑鳩町の藤ノ木古墳から出土したなつめ玉などわずかしが確認されていないという。

成分分析は奈文研遺物処理研究室が行い、ガラス釦の表面からでるエックス線の含有元素を分析するエネルギー分散型蛍光エックス線分析装置を使用した。

弥生時代のガラスに詳しい蔵田等静岡大名管教授は「弥生時代後期の日本にお溶解したガラスを中国などから入手しており、加工する技術と勢力を持った集団が丹後半島に存在した証拠だろう」と話している。

銅釧

弥生時代には、イモガイやゴホウラ貝など南海産の貝類を加工した腕輪（貝釧）が作られ、広く流通した。

また、それらをモデルとして、青銅製の腕輪も生産された。これを銅釧（どうくしろ）という。

弥生時代の銅釧には、六角形のもの、円形あるいは楕円形の2種があり、弥生時代中～後期に作られた。

弥生時代中期ころに作られた初期の銅釧は、ゴホウラという大型の巻貝を縦切りにした形状をおおよそ踏襲しており、やや縦長の六角形状を呈し、片側に斜め上にのびる鍵状突起を持つ。

一方、弥生時代後期ごろの銅釧は、全体の形状が円形ないし楕円形に近づいていくが、片側の突起は依然としてつけられる。

銅釧の出土地

番号	所在地	遺跡名	個数	遺構	状態
1	長崎県対馬市	佐護白岳	2	積石墓(石棺)	なし
2	長崎県壱岐市	原の辻	3	甕棺(不明)	なし
2	長崎県壱岐市	原の辻	1	なし	鉤片
3	佐賀県唐津市	桜馬場	26	甕棺	なし
4	佐賀県武雄市	茂手	1	掘立柱建物	なし
5	広島県東広島市	浄福寺2号	1	竪穴建物	なし
6	岡山県津山市	荒神峪	1	竪穴建物	破片
7	岡山県岡山市	加茂政所	1	土坑	鉤片
8	高知県南国市	田村	1	竪穴建物	鉤片
9	大阪府大阪市	長原	1	竪穴建物	鉤片
10	大阪府東大阪市	巨摩廃寺	1	沼状遺構	破片
11	大阪府泉大津市	要池	1	溝	なし
12	奈良県奈良市	富雄丸山古墳	1	円墳(粘土槨)	なし

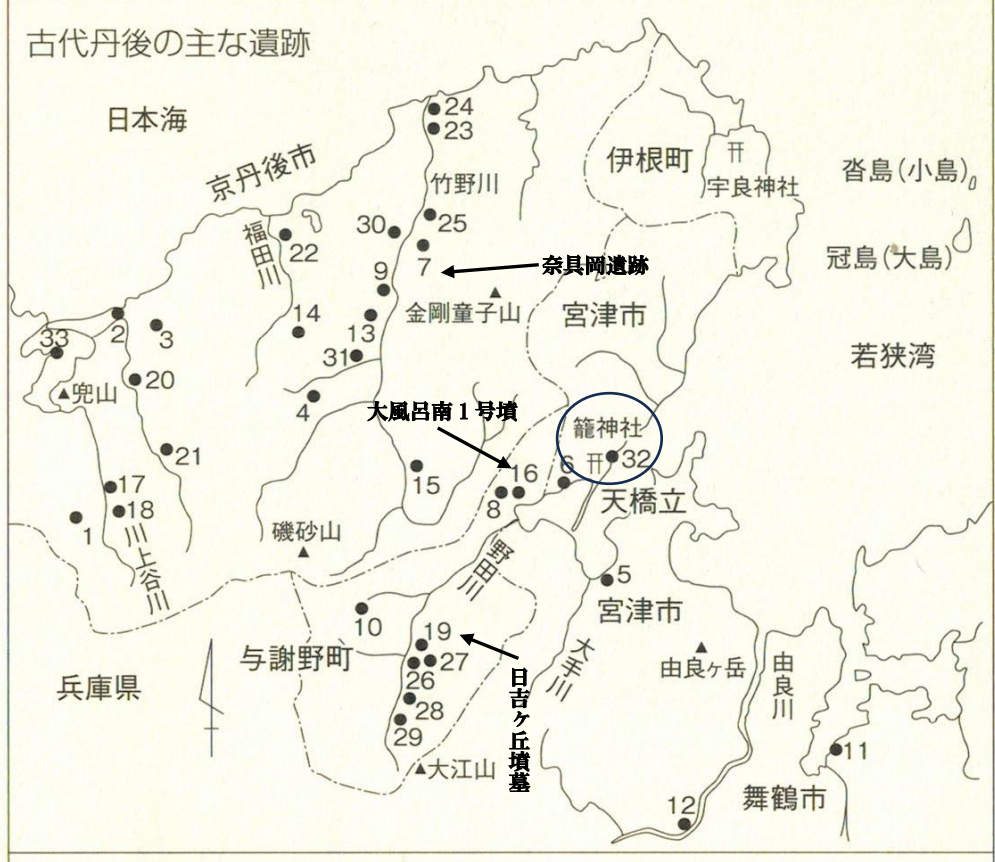
13	京都府与謝野町	大風呂南1号墓	13	方形台状墓(木棺直葬)	なし
14	福井県鯖江市	西山公園	9	埋葬施設	なし
15	石川県金沢市	南新保C	1	方墳周溝	破片
16	愛知県名古屋市	三王山	2	環濠	なし
17	静岡県静岡市	小黒	1	包含層	鉤片
18	静岡県静岡市	駿府城内	1	竪穴建物	なし
19	静岡県静岡市	曲金北(第6次)	1	水田(排水溝内)	鉤片
20	静岡県静岡市	登呂(第21次)	1	包含層	破片
21	静岡県沼津市	御幸町(第2次)	1	竪穴建物	鉤片
22	静岡県清水町	矢崎	1	包含層・竪穴建物	なし
23	静岡県下田市	了仙寺洞穴	1	洞穴	鉤片
24	神奈川県逗子市	池子(No.1-A地点)	1	方形周溝墓(不明)	鉤片
25	神奈川県逗子市	持田(U区)	1	竪穴建物	破片
26	神奈川県秦野市	根丸島	1	竪穴建物	鉤片
27	神奈川県鎌倉市	手広八反目	1	竪穴建物	鉤片
28	千葉県市原市	北旭台	1	竪穴建物	なし
29	埼玉県朝霞市	宮台・宮原(第7地点)	1	土坑	破片
30	鳥取県八頭町	奈免羅西の前	1	竪穴建物	破片
31	静岡県磐田市	御殿二之宮	1		鉤片
32	神奈川県海老名市	河原口坊中	1	竪穴建物	破片
33	神奈川県三浦市	赤坂(第16次)	1	竪穴建物	不明
34	鳥取県鳥取市	松原田中遺跡	1	土坑	破片

銅釧の鑄型は、下表のとおり、現時点では九州からしか出土していないが、簡易なデザインであることから、今後、九州以外の地域から出土する可能性は皆無とはいえないであろう。

有鉤銅釧出土地一覧（鑄型）

	所在地	遺跡名	個数	遺構	状態	出典
A	福岡県福岡市	香椎松原	1	なし	なし	森1963年
B	福岡県古賀市	浜山（B地点）	1	竪穴建物	破片	中間1982年
C	福岡県筑前町	宮ノ上	1	竪穴建物	なし	谷澤1989年





- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 1. 湯舟坂2号墳 (環頭大刀出土地) | 20. 岩ヶ鼻古墳 |
| 2. 函石浜遺跡 (貨泉出土地) | 21. 島茶臼山古墳 |
| 3. 俵野廃寺 | 4. 桃谷古墳 |
| 5. 波路古墳 | 6. 丹後国分寺 |
| 7. <u>奈具岡墳墓群 (水晶工房跡)</u> | 22. 網野銚子山古墳
(日本海三大古墳の一つ) |
| 8. 岩滝丸山古墳 | 23. 神明山古墳
(日本海三大古墳の一つ) |
| 9. 大田南墳墓群 | 24. 産土山古墳 |
| 10. 比丘尼城遺跡 (銅鐸出土地) | 25. 黒部銚子山古墳 |
| 11. 匂ヶ崎遺跡 (銅鐸出土地) | 26. 蛭子山古墳
(日本海三大古墳の一つ) |
| 12. 志高遺跡 | 27. 作山古墳 |
| 13. 大田南5号墳 (青龍三年鏡出土地) | 28. 温江丸山古墳 |
| 14. 赤坂今井墳墓 (勾玉等の冠出土地) | 29. 白米山古墳 |
| 15. 三坂神社墳墓群 | 30. ニゴレ古墳 |
| 16. <u>大風呂南墳墓群 (ガラス釧出土地)</u> | 31. 扇谷遺跡 |
| 17. 橋爪遺跡 | 32. 難波野遺跡 |
| 18. 芦原遺跡 | 33. 大明神古墳群 |
| 19. <u>日吉ヶ丘墳墓</u> | |

以上、丹波の主要な遺跡について紹介したが、ニギハヤヒや辰韓の脱解王に関する文献伝承とともに、紹介した主要遺跡の広域的關係などについて評価すると次のとおりとなる。

	丹波	北部九州	出雲	朝鮮	中国	備 考
大国主命伝承	○	○	○			
脱解王	○	△		○		辰韓は倭国(奴国)と密接な関係
ニギハヤヒ	○	○	○			
日吉ヶ丘遺跡			○			方形貼石墓
奈具岡遺跡	○		○	△		丹波の水晶、出雲の碧玉 製鉄の技法
大風呂南1号墳						
ガラス釧	○	○			○	中国産のカリガラス 釧は九州の貝釧に由来
銅釧	○	○				九州の貝釧に由来
貝輪	○	○				九州の貝釧に由来
鉄刀	○	△		△	△	
碧玉	○		○			出雲の玉文化
計	8	6	5	2	1.5	

※ ○は1点、△は0.5点で判定

これからみても、丹波地方は、日本海を通じて出雲・九州と密接な関係があったことがわかる。

朝鮮半島との関係は、考古学的に確かなことはいえない状況であるが、今後の研究次第では大きく変わることも考えられる。

(以下、つづく)

後期・邪馬台国の時代⑦

天日槍と但馬

河村哲夫

天日槍と大国主命

前号の「大国主命の国づくり」のなかで、

『播磨国風土記』には、第 11 代垂仁天皇の時代に新羅から来日したとされる天日槍命と葦原志拳乎命あるいは伊和大神が、土地の領有をめぐる争ったという記事が散見される。しかしながら、天日槍命の来日は第 11 代垂仁天皇の時代——大和朝廷成立後のおそらく 4 世紀半ばごろのことであり、大国主命の活躍年代は、大和政権成立以前の後期邪馬台国時代の 3 世紀後半のことである。葦原志拳乎命＝伊和大神＝大国主命を前提として考えれば、この年代の矛盾を解決することは極めて困難である。したがって、この問題についても、稿を改めて、ずっと先のほうで詳しく論じることとしたい」

と述べたが、本稿においては、この問題について触れてみたい。

そのとき紹介した『播磨国風土記』のなかで、【葦原志拳乎命＝伊和大神＝大国主命】と天日槍が土地争いをした地名・郡名は下表のとおりである。

『播磨国風土記』のなかの天日槍関係記事

八千軍 神前郡	多陀里 神前郡	御方里 穴禾郡	雲箇里 穴禾郡	柏野里 穴禾郡	高家里 穴禾郡	同右	比治里 穴禾郡	揖保里 揖保郡	郡・里名
八千軍野	糠岡	同伊都志 同夜夫郡 但馬国気多郡	波加村	伊奈加川		奪谷	川音村	韓国 粒丘	関連地名
天日槍命	伊和大神 天日槍命	(伊和)大神 葦原志拳乎命	伊和大神 天日槍命	天日槍命 葦原志拳乎命	天日槍命	葦原志拳乎命	天日槍命	天日槍命 葦原志拳乎命	登場する神名
ヒボコ軍と地名起源	伊和大神とヒボコ軍との戦争と地名起源	葦原志拳乎命(＝伊和大神)との土地争いの決着によるヒボコの但馬国出石への定住	起源 伊和大神との土地争いと地名	地名起源 葦原志拳乎命との土地争いと	地名起源 葦原志拳乎命との土地争いと	地名起源 葦原志拳乎命との土地争いと	途次としての地名起源 葦原志拳乎命との土地争いの	ヒボコの渡来と葦原志拳乎命との土地争いに地名起源	説話の内容

『古事記』の記事

手始めに、『古事記』の記事を紹介しよう。

『日本書紀』は「天日槍」と記すが、『古事記』は「天日矛」と記す。

また新羅しらぎの国王の子の天の日矛あまのひぼこという者がありました。この人が渡って参りました。その渡って来た故は、新羅の国に一つの沼がありまして、阿具沼あぐといひます。この沼の辺である賤せんの女が昼寝をしました。そこに日の光が虹のようにその女にさしましたのを、ある賤の男がその有様を怪しいと思つて、その女の有様をのぞき見しました。しかるにその女はその昼寝をした時から妊んで、赤い玉を生みました。

そののぞき見していた賤の男がその玉を乞い取つて、常に包んで腰につけておりました。この人は山中の谷間で田を作つておりましたから、耕作する人たちの飲食物を牛に負わせて山谷の中にはいりましたところ、国王の子の天の日矛にあいました。そこでその男に言うには、「お前はなぜ飲食物を牛に背負わせて山谷にはいるのか。きつとこの牛を殺して食うのだらう」と言つて、その男を捕えて牢に入れようと思ひましたから、その男が答えて言うには、「わたくしは牛を殺そうとは致しません。ただ農夫の食物を輸送しているだけです」と言ひました。それでも赦しませんでしたか

ら、腰につけていた玉を解いてその国王の子に贈りました。よってその男を赦して、玉を持って来て床の辺に置きましたら、美しい嬢子になり、ついに婚姻して本妻としました。その嬢子は、常に種々の珍味を作って、いつもその夫に進めました。しかるにその国王の子が心奢りして妻を罵りましたから、その女が「大体わたくしはあなたの妻になるべき女ではございません。母上のいる国に行ってしまいます」と言って、ひそかに小船に乗って逃げ渡って来て難波に留まりました。これは難波の比売碁曾の社においでになる阿加流比売という神です。

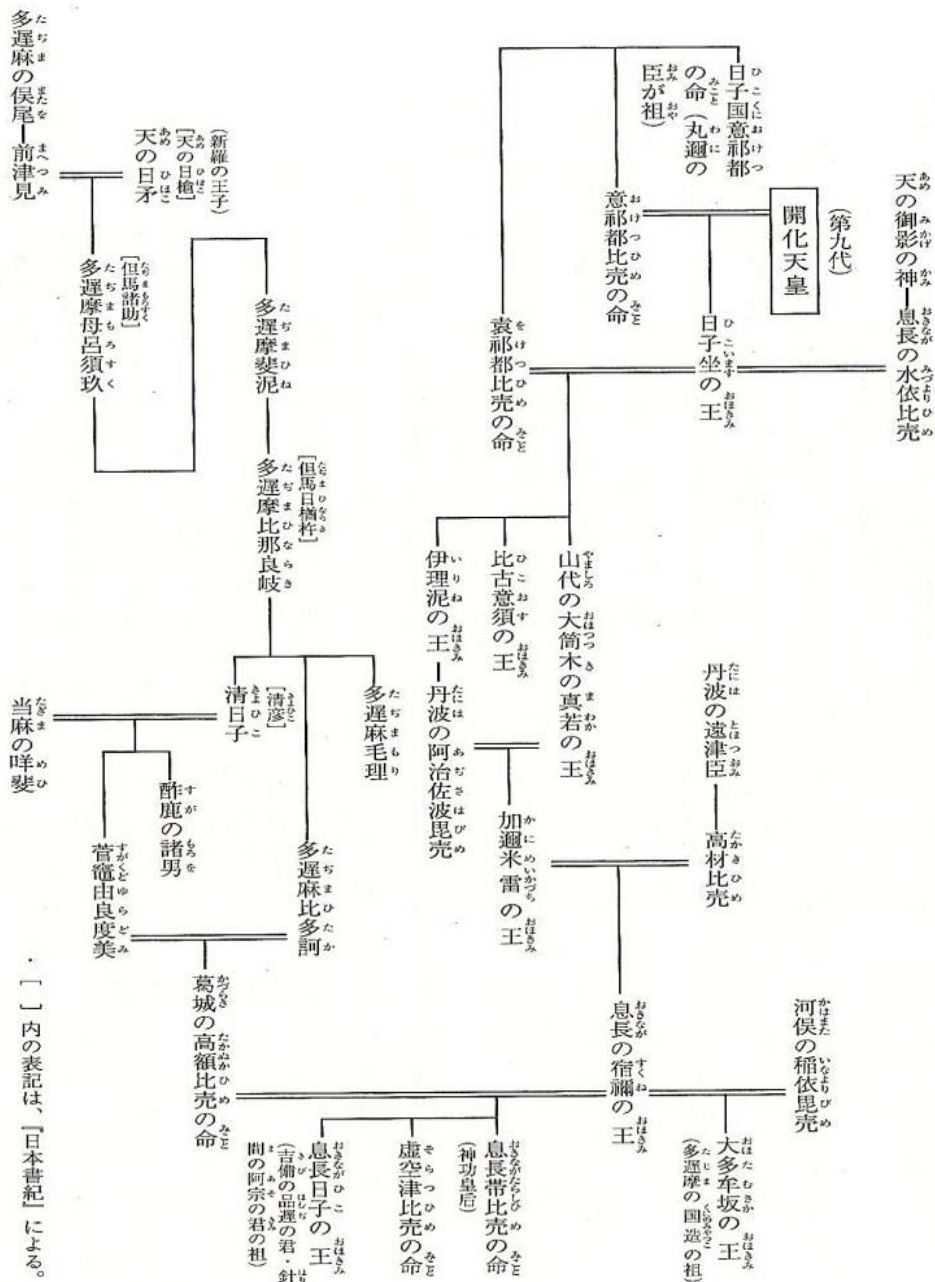
そこで天の日矛がその妻の逃げたことを聞いて、追い渡って来て難波にはいろうとする時に、その海上の神が塞いで入れませんでした。よって更にかえって、但馬の国に船泊てをし、その国に留まって、但馬の俣尾の女の前津美と結婚して生んだ子は多遅摩母呂須玖です。その子が多遅摩斐泥、その子が多遅摩比那良岐、その子は、多遅摩毛理・多遅摩比多訶、清日子の三人です。この清日子が当摩の咩斐と結婚して生んだ子が酢鹿の諸男と菅竈由良度美です。上に挙げた多遅摩比多訶がその姪の由良度美と結婚して生んだ子が葛城の高額比売の命で、これが息長帯比売の命の母君です。

この天の日矛の持つて渡って来た宝物は、玉つ宝という玉の緒に貫いたもの二本、また浪振る領巾・浪切る領巾・風振る領巾・風切る領巾・奥つ鏡・辺つ鏡、合わせて八種です。これらは伊豆志の社に祭つてある八神です。

要約すると、次のとおり。

- ① 天日槍は新羅の王子
- ② 赤玉から変身した妻の出身地は日本で、名は阿加流比売神(あかるひめ)
- ③ 天日槍は逃げた妻を追って日本にやってきた
- ④ しかし、難波の海峡を支配する神に遮られて妻の元へ行くことができなかった。
- ⑤ そこで、但馬国に上陸し、現地の娘・前津見と結婚した
- ⑥ 携えてきた神宝は但馬の「伊豆志の社」すなわち「出石神社」(兵庫県豊岡市出石町宮内)に祭られている

そして、『古事記』は次のような系譜を書き記す。



驚くべきことに、息長帯比売——すなわち、神功皇后の母は、天日槍の末裔である葛城高領比売である。

ということは、神功皇后のなかに新羅の王族の血が入っていることになり、朝鮮出兵の動機の一つになったとも考えられよう。

なお、天日槍から葛城高領比売までの系譜をみると、多遲摩——すなわち、「但馬」を冠する名称が多いことが目につく。天日槍とその末裔が、但馬を拠点としていたことの反映であろう。

ついでながら、神功皇后の父の息長宿禰王は、第9代開化天皇の皇子の彦坐(ひこいます)王の末裔である。

彦坐王は、丹波地方を制圧した四道將軍の一人の丹波道主命の父とされている。

彦坐王およびその末裔の系譜をみると、丹波や山代(山城・京都府)、息長(近江・滋賀県)などの姓を名乗っていることから、琵琶湖周辺や日本海沿岸部などで活躍した氏族であったことがわかる。

『日本書記』の系譜

垂仁天皇時代に天日槍が来日したことが記されている。

三年の春三月に、新羅の王の子天日槍来歸り。將て来る物は、羽太の玉一箇・足高の玉一箇・鶴鹿鹿の赤石の玉一箇・出石の小刀一口・出石の棒一枝・日鏡一面・熊の神籬一具、并せて七物あり。則ち但馬国に蔵めて、常に神の物とす。一に云はく、初め天日槍、艇に乗りて播磨国に泊りて、宍粟邑に在り。時に天皇、三輪君が祖大友主と、倭直の祖長尾市とを播磨に遣して、天日槍を問はしめて曰はく、「汝は誰人ぞ、且、何の国の人ぞ」とのたまふ。天日槍對て曰さく、「僕は新羅国の主の子なり。然れども日本国に聖皇有すと聞りて、則ち己が国を以て弟知古に授けて化歸り」とまうす。仍りて貢獻る物は、葉細の珠・足高の珠・鶴鹿鹿の赤石の珠・出石の刀子・出石の槍・日鏡・熊の神籬・胆狭浅の大刀、并せて八物あり。仍りて天日槍に詔して曰はく、「播磨国の宍粟邑と、淡路島の出浅邑と、是の二の邑は、汝任意に居れ」とのたまふ。時に天日槍、啓して曰さく、「臣が住まむ処は、若し天恩を垂れて、臣が情の願しき地を聴したまはば、臣親ら諸国を歴り視て、則ち臣が心に合へるを給はらむと欲ふ」とまうす。乃ち聴したまふ。是に、天日槍、菟道河より浜りて、北近江国の吾名邑に入りて暫く住む。復更近江より若狭国を経て、西但馬国に到りて則ち住処を定む。是を以て、近江国の鏡村の谷の陶人は、天日槍の従人なり。故、天日槍、但馬国の出嶋の人太耳が女麻多鳥を娶りて、但馬諸助を生む。諸助、但馬日槍杵を生む。日槍杵、清彦を生む。清彦、田道間守を生むといふ。

宇治谷孟氏の『日本書紀』(講談社学術文庫)による現代語訳は次のとおり。

三年春三月、新羅の王の子、天日槍がきた。持ってきたのは、羽太の玉一つ・足高の玉一つ・鵜鹿鹿の赤石の玉一つ(赤く輝く石の玉の意か)・出石の小刀一つ・出石の杵一つ(出石は但馬の国)・日鏡一つ・熊の神籬一具、合せて七点あった。それを但馬国におさめて神宝とした。

——一説には、初め天日槍は、船に乗って播磨国にきて宍粟邑にいた。天皇が三輪君の祖の大友主と、倭直の祖の長尾市とを遣わして、天日槍に「お前は誰か。また何れの国の人か」と尋ねられた。天日槍は「手前は新羅の国の王の子です。日本の国に聖王がおられると聞いて、自分の国を弟知古に授けてやってきました」という。そして奉ったのは、葉細の珠・足高の珠・鵜鹿鹿の赤石の珠・出石の刀子・出石の槍・日の鏡・熊の神籬・胆狭浅の太刀合せて八種類である。天皇は天日槍に詔して、「播磨国の宍粟邑と、淡路島の出浅邑の二つに、汝の心のままに住みなさい」といわれた。天日槍は申し上げるのに、「私の住む所は、もし私の望みを許して頂けるなら、自ら諸国を巡り歩いて、私の心に適った所を選ばせて頂きたい」と言った。お許しがあつた。そこで天日槍は宇治河を遡って、近江国の吾名邑に入つてしばらく住んだ。近江からまた若狭国を経て、但馬国に至り居処を定めた。それで近江国の鏡村の陶人は、天日槍に従っていた者である。天日槍は但馬国の出石の人、太耳の娘麻多烏をめぐって、但馬諸助を生んだ。諸助は但馬日槍杵を生んだ。日槍杵は清彦を生んだ。清彦は田道間守を生んだという。

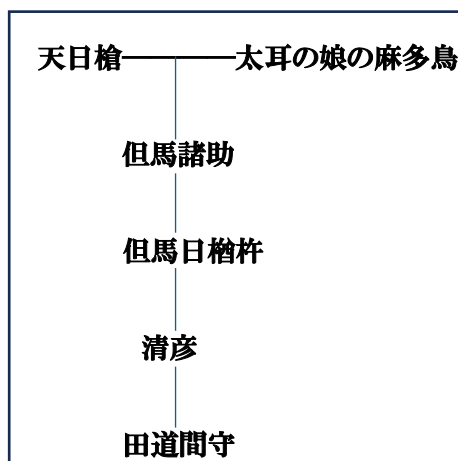
垂仁天皇三年に新羅の王子の天日槍が来日した。

- ① 七点の神宝を持参していた。
- ② 垂仁天皇は三輪君の祖の大友主と倭直の祖の長尾市を播磨の宍粟村に派遣して天日槍に應對させた。
- ③ 天日槍は新羅を弟の知古(ちこ)に譲って来日したと告げた。
- ④ 垂仁天皇は播磨の宍粟村と淡路島の出浅(いでさ)村での居住を許した。
- ⑤ それに対し、天日槍は自分で探したいと答え、宇治川を上って近江国の吾名村でしばらく留まり、その後、近江から若狭国を経て但馬国に定住した。
- ⑥ 近江国の鏡村の陶器を作る人々は天日槍につき従って来日した人々である。

『日本書紀』の系譜

右のとおり。

ただし、『日本書紀』より、『古事記』の方がはるかに緻密で網羅的である。



天日槍が持参した神宝

なお、天日槍が新羅から持参した神宝については、前述した「ニギハヤヒと丹波」の章でも紹介したが、再掲すれば次のとおり。

種類	天日槍の神宝				ニギハヤヒの神宝
	古事記	日本書紀			先代旧事本紀
		垂仁 3 年本文	垂仁 3 年別伝	垂仁 88 年	
玉	珠 1 貫	羽太玉	葉細珠	羽太玉	生玉
	珠 1 貫	足高玉	足高珠	足高玉	足玉
		鵜鹿鹿赤石玉	鵜鹿鹿赤石珠	鵜鹿鹿赤石玉	死反玉
					道反玉
比礼	浪振比礼				蛇比礼
	浪切比礼				蜂比礼
	風振比礼				品物之比礼
	風切比礼				
壇		熊神籬	熊神籬	熊神籬	
剣など		出石棹	出石槍		
			胆狭浅大刀		八握劍
		出石小刀	出石刀子	出石小刀	
鏡	奥津鏡	日鏡	日鏡	日鏡	冲津鏡
	辺津鏡				辺津鏡
	計 8 種	計 7 種	計 8 種	計 6 種	計 10 種

そのときも述べたが、ニギハヤヒが持参した品々と天日槍が持参した品々がよく似ている。

熊神籬(くまのひもろぎ)のみ異なっているが、これは熊の皮で造った何らかの祭具なのであろう。

ニギハヤヒと天日槍が持参したものがよく似ているということは、両者の宗教観などが類似していることを示している。

何度も述べたように、ニギハヤヒは北部九州を拠点とする高天原勢力——邪馬台国勢力の大王家に属する人物である。

天日槍は、新羅の前身たる辰韓斯蘆(しろ)国の王子である。

すでに述べたように、辰韓の建国神話には、倭人の倭人の瓠公(ここう)が関与し、四代目の脱解王は、『三国史記』新羅本紀によると、その出身は「多婆那国」、すなわち「丹波国」と記されている。これまた倭人である。しかも、倭の奴の国王が西暦 57 年に後漢の光武帝から金印を授与されたまさにその年に、脱解王は国王に就任している。

【辰韓—北部九州—丹波】の三者は、その建国当初から、かなり密接な関係があり、王族間の血縁関係もあったのではないかと推測される。

但馬も丹波の一角である。天日槍は脱解王の末裔でもある。彼が但馬を永住の地として選んだのは、彼にとって必然の選択であったのかもしれない。



天日槍に関する根本的な疑問

しかしながら、天日槍に関しては、その来日年代が本当に垂仁天皇時代であったのか、という根本的な疑問が潜んでいる。

(一) 大国主命と天日槍が土地の領有権争いをしている

『播磨国風土記』によると、天日槍は葦原志挙乎命=伊和大神=大国主命と土地争いをやっている。

すると、天日槍は大国主命の存命中に日本にやってきたこととなり、垂仁天皇時代とする『日本

書紀』と明らかに矛盾する。

(二) 天日槍の五世の孫の田道間守が垂仁天皇時代に活躍している。

『日本書紀』によると、垂仁天皇の命を受けた田道間守は、「非時香菓(ときじくのかくのみ)」を求めに常世の国に派遣された。しかし帰国すると垂仁天皇は崩御し、景行天皇が即位していた。

田道間守は持ち帰った「非時香菓」を捧げ、垂仁天皇の御陵で自殺したという。『古事記』もほぼ同様の記事を記している。

しかしながら、天日槍が垂仁天皇時代に来日し、くわえて五世の孫の田道間守までもがおなじ垂仁天皇に仕えたとする記事は明らかにおかしい。

天日槍の来日の時期は、垂仁天皇の時代よりもずっと早かったのではないか。

(三) 天日槍の朝鮮名が伝わっていない。

そういえば、新羅の王子であるのに、天日槍の朝鮮名が伝わっていない。弟の名が「知古(ちこ)」であることだけは、『日本書紀』に記されている。

(四) 天日槍という名は、高天原の神々の名によく似ている

天照大神はじめ、高天原の神々は、「天」を付すことが多い。

丹波に赴任したのも天火明命(ニギハヤヒ)で、出雲に赴任したのも天穗日命であった。

天日槍という名は、高天原を支配した天孫族の伝統的な名称を踏襲している。

天日槍の活躍年代の試算

試みに、『古事記』の系図に基づき、安本美典氏の「統計的年代論」に基づく神功皇后の活躍年代(390～410)を基準に、第五代の多遲摩毛理以前を1代あたり25年(15歳で成人し、40歳で死去)と仮定して計算してみると、次のとおりとなる。

代	名	活躍年代	備考
初代	天日槍	250～275	後期邪馬台国(台与の時代)は248～270
二代	多遲摩母呂須玖	275～300	
三代	多遲摩斐泥	300～325	
四代	多遲摩比那良岐	325～350	
五代	多遲摩毛理 清日子 多遲摩比多訶	350～375	「統計的年代論」によると、垂仁天皇(357～370)、景行天皇(370～385)
六代	葛城之高額比売	370～390	
七代	神功皇后	390～410	←「統計的年代論」 ・391年広開土王(倭の大軍が朝鮮出兵)

- ① 天日槍の年代は250～275年ごろとなり、ほぼ後期邪馬台国の年代と重なる。
- ② 大国主命の活躍年代は255～260年ごろとみられ、天日槍の年代と部分的に重なる。

	240	250	260	270
天照大神＝卑弥呼	180～247	→		
タカミムスビ＝難升米	239～？	→	→	
豊秋津師比売＝台与	248～270		→	→
天忍穗耳命	248～？		→	
スサノオ	248～255	→		
大国主命	255～260		→	
ニギノミコト	260～265		→	
ニギハヤヒ	260～265		→	

- ・260 年ごろ①出雲の国譲り→②日向への天孫降臨→③ニギハヤヒの東遷
- ・266 年に台与が西晋に使節団を派遣

以上のことから、天日槍が来日したのは、垂仁天皇の時代ではなくて、大国主命存命中の 255 年ごろではなかったのか。

そうすれば、朝鮮から北部九州、瀬戸内海を経て播磨地方に到着し、大国主命と領地争いをする事ができる。その後、260 年ごろの出雲の国譲りと大国主命の死去に伴って、丹波地方にはニギハヤヒが、但馬地方には天日槍が入国した。

これが、天日槍に関する根本的な疑問への筆者の現時点における答えである。

『古事記』『日本書紀』に真っ向から相対立する立論になってしまったが、今後、この問題に関する議論が深まることを期待したい。

田道間守

この際、天日槍の末裔である田道間守について、述べておこう。

『日本書紀』では「田道間守」、『古事記』では「多遲摩毛理」「多遲麻毛理」と表記される。

田道間守は、菓子之神・菓祖、柑橘(みかん)の祖として祭られている。

『日本書紀』垂仁天皇 90 年 2 月 1 日に、田道間守は天皇の命により「非時香菓(ときじくのかくのみ)」を求めため、「常世の国」に派遣された。

しかし垂仁天皇 99 年 7 月 1 日に天皇は崩御する。

翌年(景行天皇元年)3 月 12 日、田道間守は「非時香菓」を手に入れて常世国から帰ってきたが、垂仁天皇がすでに崩御されたことを聞き、嘆き悲しんで崇神天皇陵で自殺した。

『古事記』では、多遲摩毛理は「登岐士玖能迦玖能木実(ときじくのかくのこのみ)」を求めに常世国に遣わされ、その実を取り、「八纒(やかげ)・八矛(やはこ)」を持って帰ってきた。

しかし、その間に垂仁天皇は崩御されていたため、「纒四纒・矛四矛」を大后に献上し、残りの「纒四纒・矛四矛」を天皇の陵の入口に供え泣き叫び、そのまま死んだという。

田道間守の墓

『日本書紀』『古事記』には田道間守の墓に関する記載はないが、『釈日本紀』卷十所引の『天書』には、景行天皇が田道間守の忠心を哀れんで垂仁天皇陵近くに葬ったと伝える。

垂仁天皇陵(菅原伏見東陵・宝来山古墳・奈良市)では墳丘南東の周濠内に小島があり、これが田道間守の墓とされている。

『廟陵記』には周濠南側に「橘諸兄公ノ塚」と記載されており、対岸には遥拝所も設けられている。天皇に忠誠を尽くした楠木正成が兄、弟が田道間守として崇敬された。



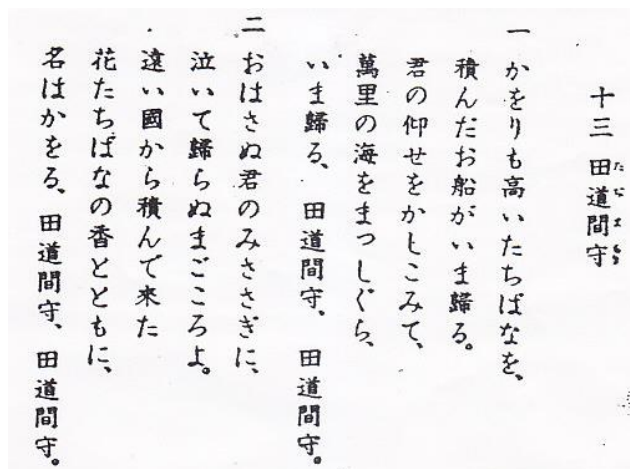
中嶋神社

生誕地とされる中嶋神社(兵庫県豊岡市三宅)では、「田道間守命」を菓子の神として祭っている。分霊は、太宰府天満宮(太宰府市)、吉田神社(京都市)など全国各地で祭られ、菓子業者の信仰を受けている。



なお、菓子は当時「果子」とされた橘(ミカン等)を指すことから田道間守はミカン・柑橘の祖神としても知られる。確かに、【菓子(かし)—果子(橘・みかん等)—果物(くだもの)】と並べてみると、菓子も果物も同類であることがわかる。

戦前の文部省唱歌に、「田道間守」の歌が選曲されていた。



この歌詞にも、田道間守が遠い国から「たちばな」(橘・みかん)を船に積んで帰国したことが記されている。

みかんと橘

『魏志倭人伝』にも、「橘」が登場する。

「倭の地は温暖、冬夏生菜(生野菜)を食す。ただし、ショウガ、橘、椒(さんしょう)、ミョウガあるも、もって滋味とするを知らず」

と、倭人は橘を食べないと記されている。

日本唯一の野生のミカン科であるヤマトタチバナは、西日本九州地域に自生している。

枝にトゲがあり、果実は平たい球形で黄色、ユズに似た香りがするが、酸味が強くて食べることができない。

これが、『魏志倭人伝』に記された「橘」である。

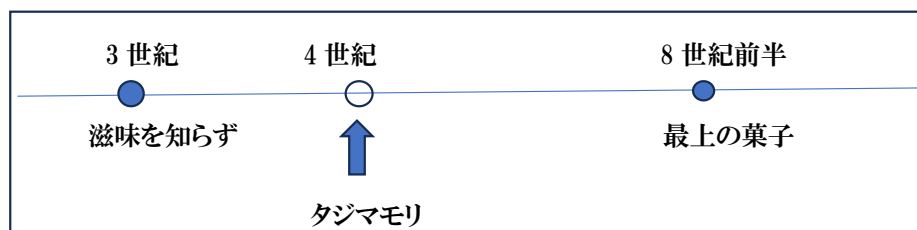
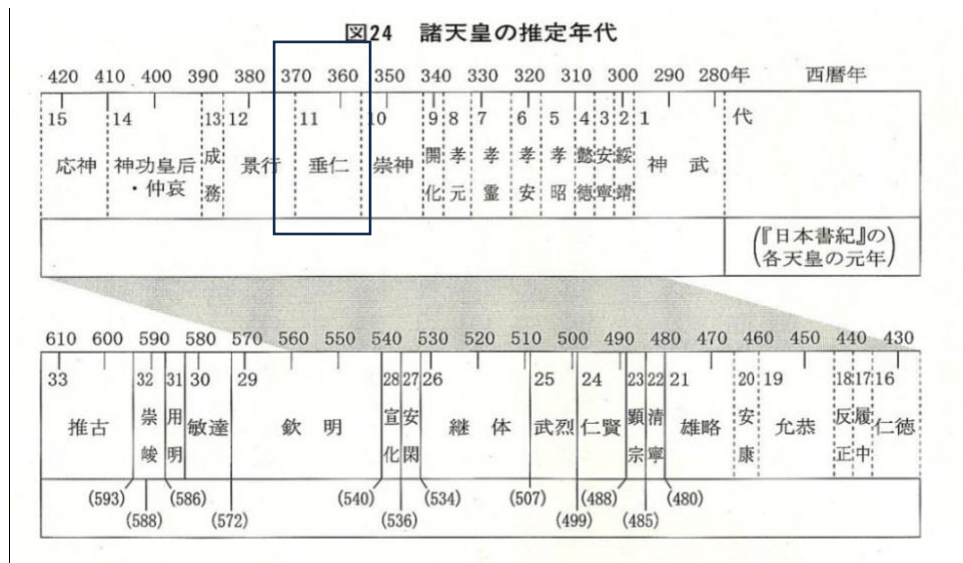
ところが、『続日本紀』の天平 8 年(736)の条にも、「橘」のことが記されている。

「橘は菓子の長上(ちょうじょう・最上のもの)にして、人の好むところなり」

これは、元明天皇の和銅元年(708)11 月の宴での言葉である。

3 世紀の邪馬台国の時代には「滋味を知らず」とあったのに、8 世紀前半には「最上の菓子」にまで評価がバク上がりしている。

安本美典氏の「統計的年代論」



田道間守が持ち帰ったミカンの種類

紀伊国屋左衛門が江戸に運んだミカンは、「紀州ミカン」であり、いわゆる「小ミカン」である。

現代は温州ミカンが全盛であるが、「小ミカン」は温州みかんが普及する明治中期までの日本の代表的品種であった。

幹は 5 メートル位、枝は細く、よく分岐し、枝にとげはない。葉は長卵形で、果実は径 4 センチほどの平らかな球形である。甘い、種が多い。

中国原産で、古い時代に渡来したといわれるこのミカンこそ、田道間守が持ち帰った橘であり、ミカンであったろう。

温州ミカン

ついでながら、温州(うんしゅう)ミカンについても述べておこう。

約 500 年前中国から伝わったミカンの種子の「偶発実生(ぐうはつみしょう)」といわれている。

人為的に交配されたものでなく、自然に生まれた高品質の果実のことである。

黄岩県(浙江省台州市)に留学していた天台宗の僧が持ち帰ったともいわれている。

江戸時代末に長崎に来たドイツ人医師シーボルトが温州みかんの錯葉(おしば)を作り、これに Nagashima(ながしま・鹿児島県出水郡長島町)と記していた。これをもとに長島が温州みかん発祥の地とする説が生じ、九州では「仲島ミカン」と呼ばれた。

ということは、温州(浙江省温州市)との直接的な関係はなく、そのブランド名をまねて命名したのでないかというのか通説的見解となっている。

「雲州ミカン」と表記されることもあるが、これは温州の単なる当て字で、出雲とはまったく無関係である。

柳川藩主であった立花鑑寛公が明治時代に全国に先駆けて創設した立花農事試験場における品評会において、大牟田・柳川地方の特産であった宮川早生(筑後早生)を出品したことから、全国に広まったともいわれている。

現在に至るまで全国各地で品種改良が進められ、全国各地で特産的なミカンも開発され、世界的なミカン大国となった。

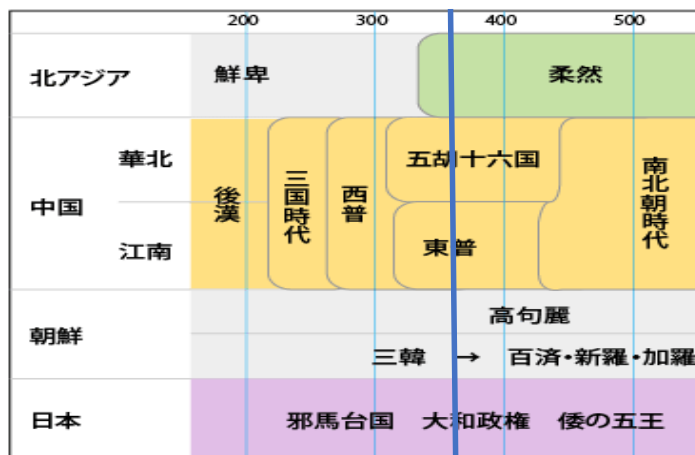
常世の国

少彦名命に関してすでに述べたが、下表のような用例がある。田道間守が向かった常世の国も、「海の向こうの世界」あるいは「海の向こうの国」——中国とみてさしつかえなからう。

常世国の意味	人名	説明
死後の世界	御毛沼命	・ウガヤフキアエズの子で、神武天皇の兄 ・「御毛沼命は波の穂を跳みて常世の国に渡った」(古事記) ・神武天皇の東征に従軍して熊野に至った折、暴風に遭い、波を踏んで常世郷に行った(日本書紀)
海の向こうの世界	田道間守	・垂仁天皇が田道間守を常世国に遣わして、「非時香菓(ときじくのかくのみ)」を求めさせた(日本書紀)
	少彦名命	・出雲から九州へ帰った。
不老不死の世界 海中の理想郷	浦嶋子	・浦島太郎伝説のルーツ ・浦島子が漁に出て、七日帰らず海を漕いで「常世」に至り、海若(わたつみ)の神の宮で神の乙女らとともに暮らした。神の宮では老いも死にもせず、永世にわたって生きることができたにもかかわらず、浦嶋子は帰郷し、自分の家がすでになくなっていることを知って、開けてはならぬ玉笥を開けてしまう(『万葉集』巻九・1740)。

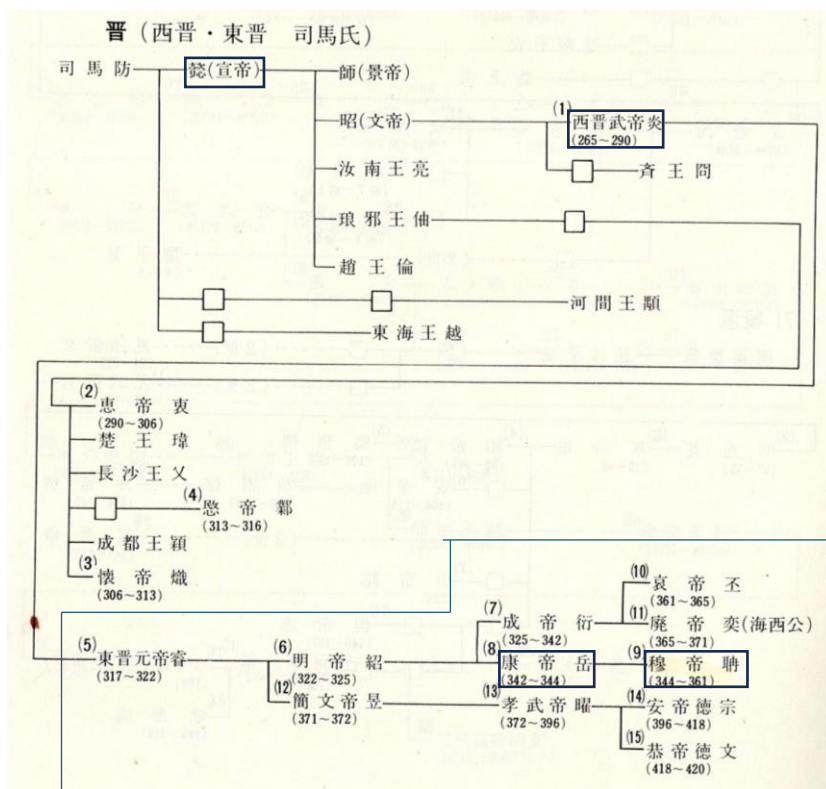
4 世紀半ば、漢民族の東晋の都は南京にあった。

洛陽や長安など黄河の中流域一帯は、異民族が跋扈する「五胡十六国」の時代に突入していた。



「五胡十六国」の時代とは、この劉淵が漢を建国した 304 年にはじまり、439 年の北魏による華北統一までの 135 年間にさす時代区分である。

311 年 5 月の「永嘉の乱」によって、司馬炎が建国した「西晋」が滅亡するや、建業(南京)に赴任していた司馬一族の司馬睿(276~322)は、317 年に晋を再興し、帝位に就いた。これが「東晋」である。420 年まで約 100 年間続いた王朝である。



先に、田道間守の年代を 350～375 年ごろと推定したが、このころの東晋の皇帝は、穆(ぼく)帝の司馬聃(たん・344～361)・哀帝の司馬丕(ひ・361～365)・廢帝の司馬奕(えき・365～371・海西公)の在位期間に重なる。

皇帝	諱	説明
穆(ぼく)帝 (344～361)	司馬聃(たん)	幼くして即位したため、在位の 17 年間で母の褚太后が執政し、何充や会稽王司馬昱が補佐した。桓温らの有力軍閥の活躍によりその治世は安定し領土は拡大した。
哀(あい)帝 (361～365)	司馬丕(ひ)	従弟の穆帝が後嗣なく崩御すると、褚太后の命により即位。しかし、成漢征討や洛陽奪回の功勲者桓温と皇室の長老で大叔父の会稽王司馬昱が実権を握っており、哀帝自身は傀儡同然であった。そのためか、政務は顧みないまま仏法を好み、不老長寿を求める長生術に没頭した。ついには丹薬の中毒により日常生活が不可能になった結果、364 年 3 月から褚太后が再び摂政となった。365 年正月、皇后王氏が死去し、哀帝も同年 2 月崩じた。享年 25。弟の司馬奕が帝位を継いだ。
廢帝 (365～371)	司馬奕(えき)	同母兄の哀帝の崩御により即位。穆帝の代から権力を牛耳っていた桓温の専横がなおも続いた。 桓温は 369 年に洛陽奪回の北伐軍を興したが、枋頭の戦いで大敗してしまう。桓温は失脚の危機を挽回するため皇室の篡奪を図るようになる。 371 年桓温は「帝が不妊になった」と讒訴し、褚太后は真偽を確認せず司馬奕の皇位を剥奪し、海西公に降格した。 以後、飲酒に耽ることによって朝廷の警戒をそらし、どうにか天寿を全うした。386 年 45 歳で死去。酒中毒による死ともいう。

この時代の政治的な実権は、康帝・司馬岳(在位 342～344)の皇后で、穆帝・司馬聃(たん)の母である褚太后——すなわち、褚蒜子(ちよさんし・324～384)と、重臣の桓温(かんおん・312～373)に握られていた。

桓温は 345 年に荊州刺史になると、かつての蜀の都の成漢を攻め、347 年にこれを攻略する大功を立てた。

東晋は江南と蜀を合わせた大国となり、桓温の権力も強大化した。

五胡十六国の支配を受ける華北の地にもしばしば北伐し、長安を攻め、さらに洛陽を落として、356 年に凱旋した。

しかしながら、桓温は再び北伐を行ったが、慕容垂の前に大敗して、その権威と権力は大きく揺らぐこととなった。

田道間守が活躍した 350～375 年ごろというのは、桓温が全盛期からやがて下り坂に転じる時

期と重なる。

とはいえ、中国全土の統一に向けた北伐をしばしば決行するなど、東晋全体としてはいまだ勢いのある時代であった。

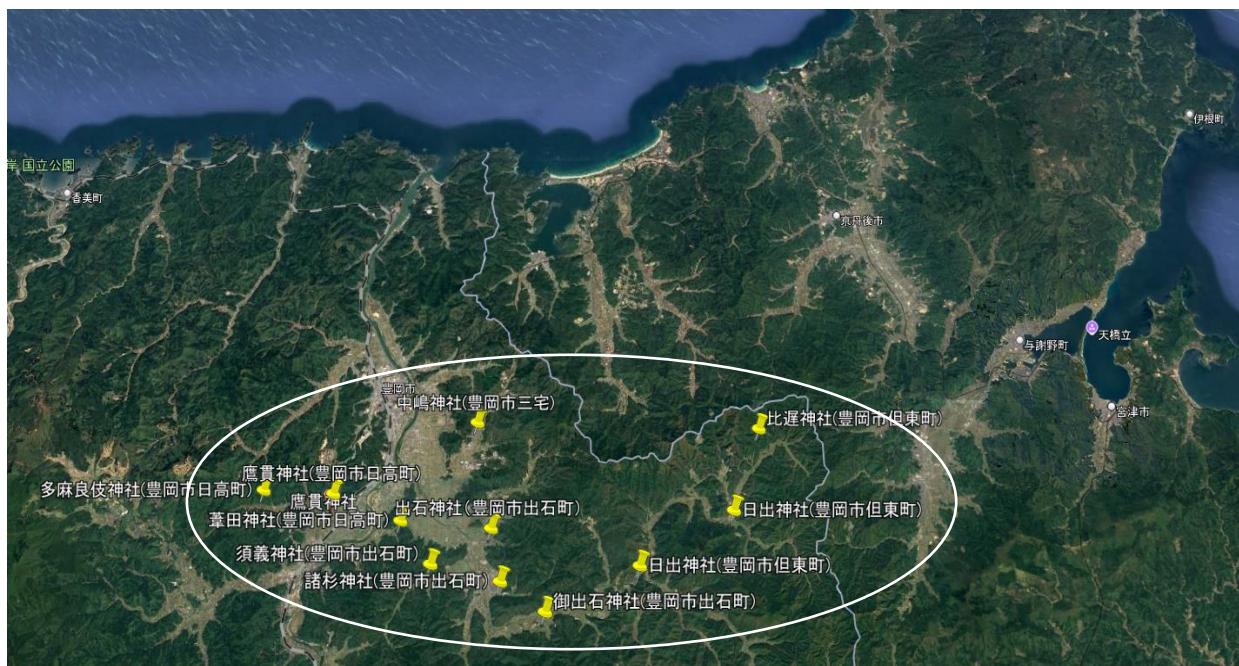
東晋の公式記録は残されていないが、田道間守たち一行は、東晋の都の建業(南京)において褚太后や桓温ら東晋から歓迎を受け、さまざまな返礼品を授与されたであろう。

「紀州ミカン」が中国華南の古ミカンをルーツとすることが証明されれば、間接的ではあるが、田道間守の東晋訪問の確実性も高まる。

DNA 鑑定技術も急速に進展しており、この点からの調査分析をぜひともお願いしたい。

天日槍および一族ゆかりの神社

最後に、天日槍および一族ゆかりの神社を紹介しておこう。



但馬における天日槍の拠点的地域

○出石神社(兵庫県豊岡市出石町宮内)

式内社(名神大社)、但馬国一の宮。旧社格は国幣中社で、現在は神社本庁の別表神社である。かつては出石神社付近が、この地域の中心地であった。

現在の出石市街地は、天正 2 年(1574)に山名氏がその居城を有子山城(のち山麓に出石城)に移してから発展になる。

天日槍が将来したという八種神宝のおよび天日槍の神霊を祭り、地元では出石の開拓神としても信仰されている。



出石神社

○御出石(みいずし・みずし)神社(兵庫県豊岡市出石町桐野)

神武天皇六年三月、出石丘に鎮座。天日槍の子孫によって祀られたという。

○諸杉神社(兵庫県豊岡市出石町内町)

祭神は天日槍の子の多遲摩母呂須玖。もと水上村(豊岡市出石町水上)に鎮座したといい、現在地に遷座したのは天正2年(1574)とされる。

延喜式内社で、但馬国出石郡に「諸杉神社」と記載されている。

○日出神社(兵庫県豊岡市但東町畑山)

祭神は多遲摩比多訶。本殿は室町末期の建築といわれ、境内には、後醍醐天皇の皇子である恒良親王が幽閉されたという黒木御所の跡や、舞殿(農村歌舞伎舞台)がある。

○日出神社(兵庫県豊岡市但東町南尾)

祭神は多遲摩比多訶。室町時代末期の建築といわれ、本殿は国指定の文化財である。

○須義神社(兵庫県豊岡市出石町荒木)

主祭神の由良度美神は、多遲摩母呂須玖神の妹あるいは娘とされる。

『神名帳考證』によると、祭神は天日槍の子の多遲摩母呂須玖とある。

○中嶋神社(兵庫県豊岡市三宅)

前述のとおり、田道間守の生誕地と伝わる。

○比遲神社(兵庫県豊岡市但東町口藤)

祭神は多遲摩比泥神。延喜3年(784)に多遲摩比泥神の末裔の葛井宿禰比遲磨が藤ノ森に祭ったと伝わる。

○多麻良伎神社(玉良木神社・兵庫県豊岡市日高町猪ノ爪)

祭神は彦火火出見命(山幸彦)とされ、異説として多遲摩比那良岐とされる。

○葦田神社(兵庫県豊岡市中郷森下)

祭神は天麻止都祢命。天日槍に随行した神という。

○鷹貫神社(兵庫県豊岡市日高町竹貫字梅谷)

祭神は神功皇后の母の葛城高額比売命(鷹野姫命)という。

延喜式			関連人物名		
郡	社名	格		社名	所在地
出石郡	伊豆志坐神社八座	名神大		出石神社	兵庫県豊岡市出石町宮内
	御出石神社	名神大		御出石神社	兵庫県豊岡市出石町桐野
	諸杉神社	小	但馬諸助 (多遲摩母呂須玖)	諸杉神社	兵庫県豊岡市出石町内町
	日出神社	小	多遲摩比多詞	(論) 日出神社	兵庫県豊岡市但東町畑山
				(論) 日出神社	兵庫県豊岡市但東町南尾
	須義神社	小	菅竈由良度美	須義神社	兵庫県豊岡市出石町荒木
	中嶋神社	小		中嶋神社	兵庫県豊岡市三宅
比遅神社	小	多遲摩斐泥	比遅神社	兵庫県豊岡市但東町口藤	
気多郡	多摩良伎神社	小	但馬日槍杵 (多遲摩比那良岐)	多摩良木神社	兵庫県豊岡市日高町猪爪
	葦田神社	小	(アメノヒボコ従者)	葦田神社	兵庫県豊岡市中郷森下
	鷹貫神社	小	葛城高額比売	鷹貫神社	兵庫県豊岡市日高町竹貫

『日本書紀』に記された天日槍のコースは、

「菟道河(宇治川)をさかのぼり、北方の近江国の吾名邑に入ってしばらく住む。また近江から若狭国を経て、西方の但馬国に到って住処を定めた。近江国の鏡村の谷の陶人は天日槍に従ってきた人々である」

とされている。

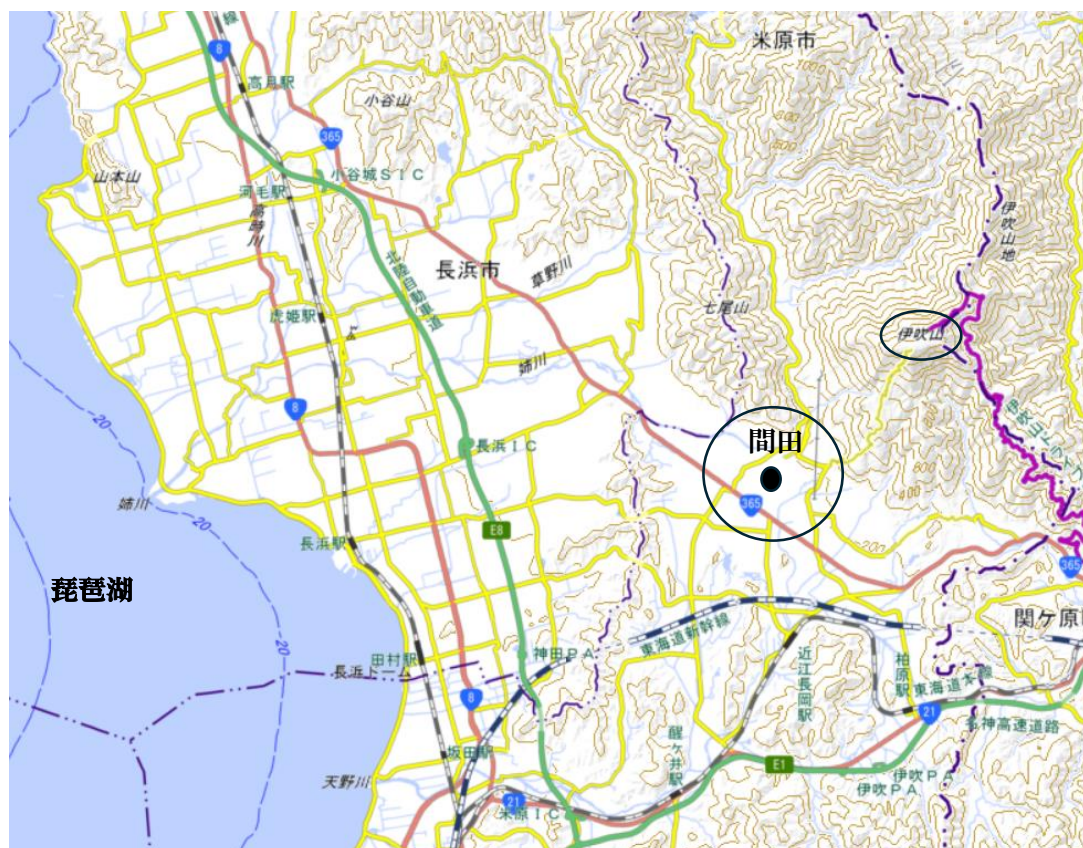
近江(滋賀県)・若狭(福井県)にも天日槍を祭る神社が散見されるから、天日槍は大阪方面から淀川を上り、宇治川から琵琶湖沿岸部を通り、若狭、丹波を経て但馬に入ったのであろう。



(一)近江国の吾名邑の所在地

	候補地		備考
一説	滋賀県草津市穴村町	安羅(ヤスラ)神社 (祭神は天日槍)	<ul style="list-style-type: none"> ・社伝「日本医術の祖神、地方開発の大神を奉祀する」 ・安羅神社名は朝鮮の安羅・阿羅に由来するか。
二説	滋賀県米原市間田 (はざまた)	『和名抄』の「坂田郡阿那郷」の項に「近江国吾名邑」と記されている。	<ul style="list-style-type: none"> ・後の息長郷 ・律令時代「穴太駅」が置かれた。 ・200基以上の後期古墳群あり。 ・朝鮮系の穴太村主が居住 ・米原市顔戸に「天日槍暫住」の石碑あり

『和名抄』の記事からみても、二説の「滋賀県米原市間田」が有力であろう。
息長一族の拠点的な地域でもある。



(三) 近江国の鏡村

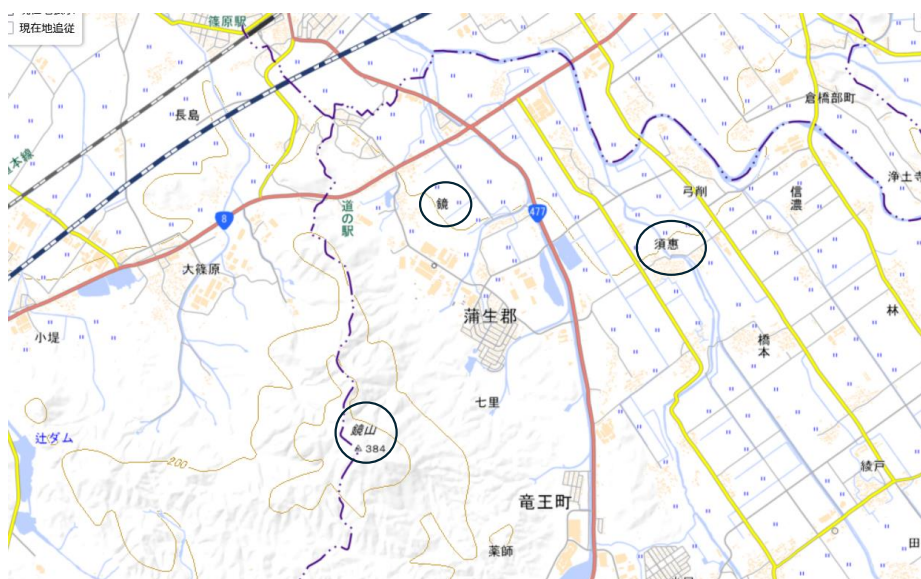
『日本書紀』には、「この村で陶器を作る人々は天日槍につき従って来日した人々である」と書かれている。

岩波書店の『日本書紀』の注には、「鏡村は後世の鏡宿。鏡谷は鏡山の東麓で、近くに須恵の地名を存する」とある。

鏡宿（かがみのしゆく）は、平安時代における東山道の宿駅名で、現在の滋賀県蒲生郡竜王町鏡である。早朝に京都を出発した旅人の一日目の宿泊地とされた。

その地にある鏡山神社の祭神は天日槍で、社伝に「新羅より天日槍来朝し、捧持せる日鏡を山上に納め鏡山と称し、その山裾において従者に陶器を造らしめる」とあるという。

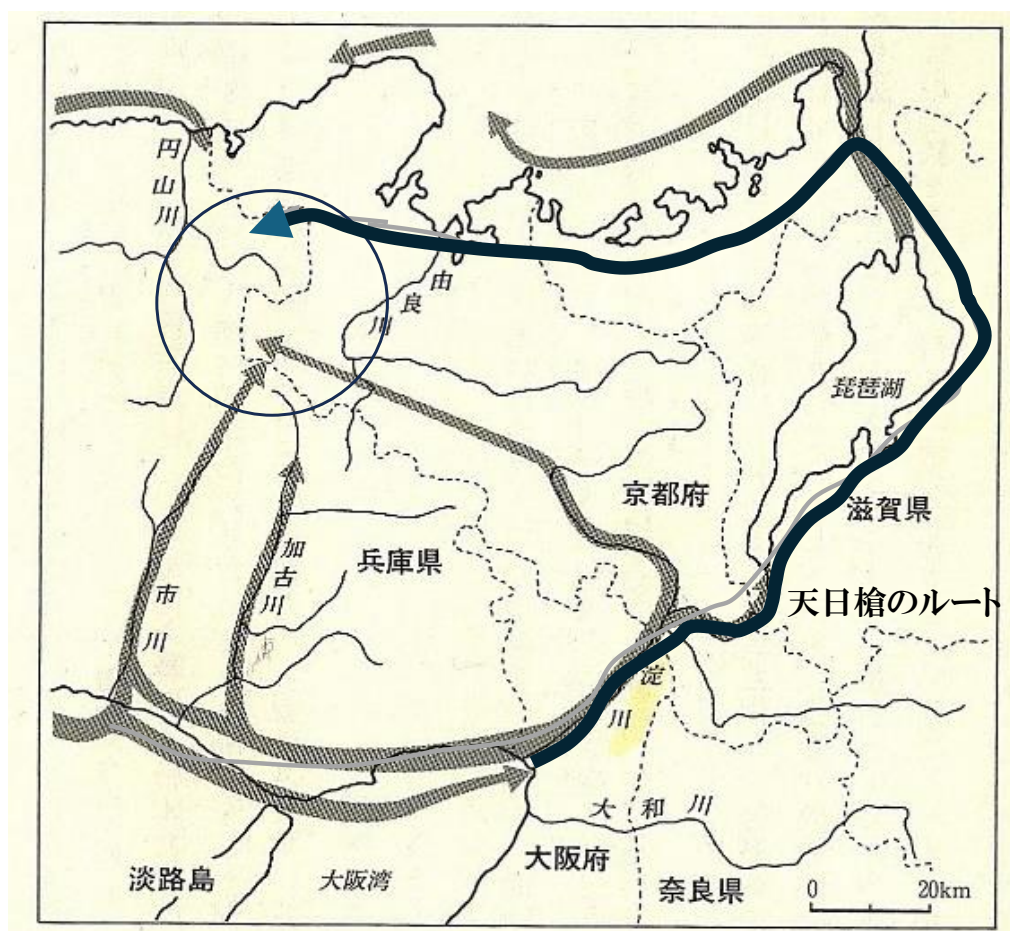
『日本書紀』に記された「近江国の鏡村」は、この地と断言してよろしかろう。



(二)若狭国の天日槍ゆかりの神社

神社名	所在地	備考
気比神宮	福井県敦賀市曙町	<ul style="list-style-type: none"> ・越前国一の宮 ・主祭神は伊奢沙別命(イザサワケ・気比大神)であるが、社伝に「新羅の王子・天日槍を伊奢沙別命として祭った」とある。
須可麻神社(すかま)	福井県三方郡美浜町菅浜	祭神の世永大明神(菅竈由良度美姫)は天日槍の子孫で、神功皇后の祖母にあたるという。
静志神社	福井県大飯郡大飯町	<ul style="list-style-type: none"> ・祭神は少彦名命 ・ただし、鎮座地の父子(ちちし)は、「静石」あるいは「出石」の訛りで、本来の祭神は天日槍命とする説がある。

近畿地方から但馬地方へ至る複数のルート



『新撰姓氏録』による天日槍の末裔氏族

『新撰姓氏録』(しんせんしょうじろく)は、平安時代初期の 815 年(弘仁六)に、嵯峨天皇の命により編纂された京都および畿内に住む古代氏族の名鑑である。

天日槍の末裔氏族は「諸蕃」に区分されている。もちろん、帰化系の氏族のことである。

姓	種別	『新撰姓氏録』の記事
橘守	左京諸蕃	・三宅連同祖 ・天日杵命の後
三宅連	右京諸蕃	・新羅国王子の天日杵命の後
糸井造	大和国諸蕃	・新羅国人の天日槍命の後
三宅連	摂津国諸蕃	・新羅国王子の天日杵命の後

『古事記』の天日矛と『日本書紀』のツガアラシトの比較

なお、垂仁天皇時代に大伽耶国(高霊)から来日したツガアラシトと天日槍は、下表のとおりよく似ている。

このため、二人を同一人物とする説、二人とも虚構とする説などがある。

しかしながら、名前も朝鮮の出身地も異なる。別人と解するのが妥当である。

いずれにしても、戦後 80 年の間、この二人は研究対象としてまともにとり扱われていないことだけは確かである。

しかしながら、本稿でも述べたように、あるいは『日本古代通史』第一巻の「奴国の時代」で述べたように、この二人の解明は、日本と朝鮮の古代史を解明するうえで、大きな役割を果たす可能性を秘めている。

朝鮮優位の「渡来人優位史観」ではなくて、対等平等の史観のもとに、ツガアラシトと天日槍について冷静に論理的に解明を進めなければならない。

妻の神格化	追跡経路	妻の出奔先	妻の出奔理由	妻の出自	渡来理由	渡来表現	出自	名	比較項目
国前郡比賣語曾社神	難波比賣基曾社の阿加流比賣神に妨げられ、その後、タジマに	祖の国(難波)	日矛の奢り	沼に女性、日光に感じて妊娠 その女性、赤玉を生む 牛を運れた男が玉をもつ 男を捕らえ、玉を取り上げる 玉が女性に交容結婚	逃げた妻を追って	参渡来	新羅國主の子	天之日矛	応神記
難波比賣語曾社神	難波(瀬戸内)―国崎	東の方海 日本(難波)	結婚しようとする	黄牛がいた 黄牛がいなくなる 牛の代価として白石を受ける 白石、きれいな童女となる		歸化(別一書)	意富加羅國王(別一書)	都怒我阿羅斯等	垂仁二年是歲桑一書

そして、4 四世紀半ばに長江流域の東晋に渡ったとみられる田道間守の伝承は、小ミカン——紀州ミカンのルーツなど、日本における南朝的要素を解明する大きな手がかりを与えてくれるであろう。

さらには、中国正史のなかで、266 年の西晋への朝貢を最後に消息が途絶え、413 年に再び登場するまでの倭国の 150 年の空白期間の一部を埋めてくれるのが、田道間守であるかもしれない。

(以下、次号へつづく)

河村哲夫(かわむら・てつお)

福岡県柳川市生まれ
九州大学法学部卒
歴史作家
福岡県文化団体連合会顧問
ふくおかアジア文化塾代表
立花壱岐研究会会員
元『季刊邪馬台国』編纂委員長
西日本新聞 TNC 文化サークル講師・朝日カルチャーセンター講師
大野城市山城塾講師



〈おもな著作〉

- 『志は、天下～柳川藩最後の家老・立花壱岐～(全5巻)』(1995年海鳥社)
「小楠と立花壱岐」(1998年『横井小楠のすべて』(新人物往来社))
『立花宗茂』(1999年、西日本新聞社)
『柳川城炎上～立花壱岐・もうひとつの維新史～』(1999年角川書店)
『西日本古代紀行～神功皇后風土記～』(2001年西日本新聞社)
『筑後争乱記～蒲池一族の興亡～』(2003年海鳥社)
『九州を制覇した大王～景行天皇巡幸記～』(2006年海鳥社)
『天を翔けた男～西海の豪商・石本平兵衛～』(2007年11月梓書院)
「北部九州における神功皇后伝承」(2008年、『季刊邪馬台国』97号、98号)
「九州における景行天皇伝承」(2008年、『季刊邪馬台国』99号)
「『季刊邪馬台国』100号への軌跡」(2008年、『季刊邪馬台国』100号)
「小楠と立花壱岐」(2009年11月、『別冊環・横井小楠』藤原書店)
『龍王の海～国姓爺・鄭成功～』(2010年3月海鳥社)
「小楠の後継者、立花壱岐」(2011年1月、『環』藤原書店)
『天草の豪商石本平兵衛』(2012年8月藤原書店)
『神功皇后の謎を解く～伝承地探訪録～』(2013年12月原書房)
『景行天皇と日本武尊～列島を制覇した大王～』(2014年6月原書房)
『法頭の旅・ブッダへの道』(2012～2016年『季刊邪馬台国』114号～124号に連載)
『日本古代通史』第1巻～第4巻(2024年11月Amazon・kindle版)

(テレビ・ラジオ出演)

- 平成31年1月NHK「日本人のおなまえっ！ 金栗の由来・ルーツ」
平成28年よりRKBラジオ「古代の福岡を歩く」レギュラー出演中
令和6年4月よりYouTube番組「河村哲夫の古代史チャンネル」に出演中